

選ばれし真の王と仲間達で世界最高

ゴアゴマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルシスの為に自らの命を捧げ世界を救つた真の王ノクティス。そしてその仲間達は次は皆で笑い合える世界を望んだ。

いつになつたかの頃、ある高校ではかつての仲間達や宿敵が集い平和な生活を過ごしていた。

だが再びこの世界でもまた困難に見舞われる。

謎の異世界へと召喚された嘗ての王と仲間達はその世界で何を成すのか。

この物語を読む際の注意点

クロスオーバー作品です。

苦手な方はブラウザバックを推奨致します。

また、両作品の内容を完璧に把握出来ておらず、

(FF15は細かい設定やキングスグレイブ、ありふれた職業は細か

い設定や物語後半が。)

ほぼほぼにわかの書いた物語となっています。

ご不快に思う方は申し訳ございません。

これらが大丈夫な方は、ゆっくり閲覧していくて頂けると嬉しいです。

目次

CHAPTER 1 召喚

王達は

トータス

迷う者

優花と愛子の想い

友の誓い

大迷宮オルクス

そして闇へと

CHAPTER 2 王の目覚め

目覚め

軍師は決意する

少女の叫び

ハジメを探して

焦燥と月

荒んだ眼

怒りと始動

197 188 175 159 140 125 110 88 70 59 47 30 18 1

CHAPTER 1 召喚

王達は

「俺達が出来る事は、ここまでになるな」

嘗て、王の頭脳となり、彼が歩むべく道を照らし合わせた軍師が
言った。

「後は全て、お前に任せた。…頼むぜ」

嘗て、衝突しつつも、王の盾として彼を守り、
彼の道を阻む物を薙ぎ払つた者が言つた。

「…つ、頑張つて…！」

嘗て、身分が違えど彼の側に寄り添い、
彼の迷いを共に分かちあつた者が言つた。

彼らの見つめる先にある王は、ゆっくりと階段を登る
足を、やがて止めて、振り返り彼らを見た。

その眼には、いつかの不安は消え去り、覚悟が灯つっていた。

「プロンプト」

王は、自分に寄り添つた仲間を見る。

「グラディオ」

王は、自分を守り抜いた仲間を見る。

「イグニス」

王は、自分を支えた仲間を見る。

全てを見終えると、王は、最期の言葉を放つ。
それは、王としての最後の言葉、そして、

「常に、胸を張つて生きろ」

親友としての、最後の言葉であつた。

かくして、世界に覆われた闇は、選ばれし王、
ノクティス・ルシス・チエラムによつて祓われ、
世界に光が戻つた。

世界は平和を取り戻したのだ。

彼の犠牲により。

ノクテイスは、定められし運命の通り、自分の命と引き換えに闇を祓つた。

そして世界は平和を取り戻したのだ。

しかし、それを真の平和と呼べる者が居るのであれば、その者は悪魔に魂を売つたのであろう。

彼の犠牲により、世界は救われた。
そう、世界は。

では人々は？ 確かに多くの者はこの光の再来を喜び合うだろう。

しかし、ノクテイスを知る者たちは？

彼の犠牲により成り立った平和に、真の喜びを味わうことなど出来るはずがなかつた。

ノクティスの戦友達は、彼の犠牲に涙を流す事しか出来なかつた。

思い浮かぶのは、彼との日々の思い出ばかりで、

考える事は、今になつての後悔。

あの時、自分が何かを考えていれば、この結末は変えられたのではないか。

あの時、自分は知らず知らずのうちに、彼に使命を果たして死ねと言ひ、そんな事を言える暇があるのなら

自分が代わりになれたのではないか。

あの時、彼の苦しみを全て吐き出させて、一緒に逃げさせる事も、出来たのではないか。

無理だと、無謀だと、傲慢だと言われてしまうかもしれない。だけども、彼らにとつてそれ程にまで、

ノクティスと言う男はかけがえのない親友であつた。

しかし、今更失った者は取り戻す事は出来ない。

だから、彼らはこう願うしか無かつた。

次があるのであれば、もう一度彼と親友に…

「なんか朝から意味わからんねえ夢を見たんだが」

「ええー、なにそのテンプレ的な犠牲ファンタジー？自分が王様つてさー、ククツ。ちょっとキモイよー？」ノクト

「うつせえ！ 良いだろ夢くらい!? 文句は俺じやなくて、夢に言つ

てくれよプロンプト！」

眩しい朝っぱらの教室から、今日もノクティスとプロンプトのコント染みた声が聞こえてくる。そんな2人に周りは「ああ、またあの二人がじやれ合ってる。位の視線しか送らない。それ程までにこんなやり取りを二人がしている証拠もある。

この高校に通う普通の高校生、ノクティスとプロンプトは、此処で出会つて意気投合した親友であり、こうしてただのお話をしているだけ周りを少し和ませてくれる、ある意味良心的存在である。

「てかそんなんことよりさプロンプト、また2年のどこ行かね？」まだ授業まで少し時間あるしな？ 暇だし…」

「うん、良いけどさ、ちょっと待つてよ。もしかして俺と二人で会話してんのが暇とか言わないよね？」

「あながち間違いないじゃない」

「辛辣う！」

このやり取りに吹き出してしまう人達が何名かいる中、二人はそそくさと教室を出てしまつた。

2年の教室を目指して歩いている際にも、二人のお話は止まらない様子で、ちょっと耳を傾けた人達の腹筋を崩壊させるには丁度いい材料だった。

やがて、お目当ての教室へ辿り着くなり、プロンプトの顔が少し険しくなる。

「うわあ～、また絡んでるよアイツら。飽きないのかな？」

その反応にノクティスもまたチラッと覗き見し、顔の表情が同じになる。

「飽きねえからやつてんだろう？ てか止めに行くぞ。俺達の邪魔する奴は消してやるつてな」

「うわ怖ー。どこで覚えたのそんな言葉？」

教室へ侵入した二人は、ドカドカと歩いていき、目標の人物が居る所へ直進していく。そしてそのまま、邪魔なヤツらに向かつて肩を叩く。

「お前ら良く飽きもせずに同じ事繰り返すよなあ。1回メられたの忘

れたつけ?」

「ああ? 何が…てヒイいいい!! ノクティス先輩!?!?」

その叫び声で、一気にクラスの視線がノクティス達に集まる。一部が恐怖に顔を染め、一部が舌打ち、そして殆どが歓喜の声を上げた。

「いやあー、相変わらず人気者だねノクト! 僕妬けちゃうなあ」

「なあに言つてんだよ。その中にはお前も入つてんの、分かつてねえのか?」

どうやら二人は舌打ちした奴らの事を無視して話を進めている様で、その態度のせいで睨まれてしまふが、それも無視する。別に自分を嫌つてゐるからとかではなく、ただ単にそいつ等には何を言つても分からぬ事が判明してゐるからだ。

「よ、ハジメ。暇だから遊びに来たわ」

「おはよーハジメ! 朝から眠そだねえ! ノクトと同じくらい！」

「お、おはようございます。ノクティス先輩、プロンプト先輩」

一人が挨拶した青年、南雲ハジメは戸惑いながらもどこか嬉しい様で、快く挨拶を返してくれた。だが、ハジメをからかっていた途中のDQN:檜山グループの連中は納得がいかない様で、ゴリ押しでハジメに文句を浴びせようとしていたが、プロンプトが良い笑顔で、「ねえねえ、この前君達がノクトにやられてベソかいてた写真、此処で見せてもいい?」

と言つた所、大騒ぎしてその場を立ち去つて行つた。

「あんまり過ぎんなよ? 訴えられたらめんどくせえんだから」

「うわ、ノクト大人ぶつてるねえ。いつもだつたら友人に手を出す奴は醜態晒しちまえば良いとが言つてる癖にさ?」

「バ!? 言うんじやねえよ!」

ここでもお得意のコントを披露する二人に、周りは勿論、先程まで憂鬱だったハジメも、クスクスと笑い始めた。こうして少しクラスの雰囲気が良くなつたところで、また1つ、厄介事が登場する。

「おはよう! 南雲くん! 今日も眠そだね!」

げつと顔を顰めるハジメの前に現れたのは、白崎香織と言う美少女

だつた。彼女は、この高校で二大女神と呼ばれる程の人気があつて、それ故にハジメは話しかけてくれるのは嬉しいが、少し遠ざけくなってしまう理由がある。

(なぜ、アイツだけ!!)

嫉妬である。そんな白崎に話しかけられる存在であるハジメは、物凄くクラスの人達から妬まれており、睨まれてしまう事から、そつとして欲しいと思う様になつてしまつたのである。

それでも、まだ良くなつた方である。ノクティスやプロンプトが、ハジメ以外を巻き込んで話す事もある為、ハジメの良さ等を理解し、また苦労してゐるな、と同情の眼差しを向けてくれる人も増えた。

そのため、ハジメは居心地を良くしてくれた二人に感謝を覚え、今ではそこそこ、このクラスでもやつていけている。

「お、おはよう白崎さん」

「あー、俺達は見えてない感じか。やつぱ恋する乙女つて怖えな」

「良いなーハジメ。俺もそんな事してくれる人ほしーなー?」

「え!? あ、すみません気づかなくて! おはようございます。ノクティス先輩、プロンプト先輩」

軽く無視された二人にやつと気付き、大慌てで挨拶され、軽く挨拶を返した。

因みに、さつきのプロンプトの呟きに過剰に反応した人が一人いた事を、プロンプトは知らなかつた様子。

だが、白崎に余り話しかけて欲しくないと思う理由は、もう一つある。それは、今から近付いてくる人物の一人に原因がある。

「おはよう。南雲君、ノクティス先輩、プロンプト先輩」

「全く、香織はまた彼の面倒を見ているのか? 本当に優しいな」「どうもつす! 3人共、相変わらず朝から元気つすね!」

近づいてきた人物は八重樫零と呼ばれる美少女と、天之河光輝と呼ばれる青年と、坂上龍太郎と呼ばれる青年であつた。

零は、もう1人の二大女神であり、龍太郎は脳筋、と呼ばれる男ではあるが、この男は二人が巻き込んだ人物の一人であり、ハジメの良さを理解して友人となつた人物である。

雲が来ている事もハジメには痛い視線を喰らう原因にはなつているが、この二人はまだ良いのだ。

最大の原因是、天之河である。この男は、顔良し、運動良し、勉強良しの完璧超人であり、とてつもなくモテる人物だが、非常に思い込みが激しく、自分の思った事を正しいとして疑わない正確なのである。

その為、ハジメには相性が悪く、苦手意識を持つていた。

「お、おはよう。八重樫さん、天之河君、坂上君。まあ、自業自得だから仕方ないさ」

ハジメは、ああ、また始まつたと思うが、何とか自分の意見を押し殺して、穩便に済ませようと言葉を選んで発言する。

「それが分かっているなら直すべきじゃないか？何時までも香織の優しさに甘えてばかりでは行けないだろ。それに、香織だつていつも君に構つてられないだろ？」

だが、そんなハジメの努力も虚しく、結局はご都合主義で返されてしまう。どうでもいいから早くしてくれ、と考えていた。

一方その頃、ノクティスとプロンプトはと言うと。

「あーもー、また来たよアイツ。アイツが来ると話したい事話せないから嫌なんだよなあ」

「だな。俺も。虫と同じ位嫌だわ」

「それはちょっと酷くないですか!?」

物凄く嫌悪感を解放していた。もうお分かりだろうが、二人は天之河が大つ嫌いである。ハジメを兎に角日の敵にしている所もそうだが、実はこの二人も相性が悪いのである。

「それに、ノクティス先輩、プロンプト先輩。貴方達も態々2年の教室へ来て時間を潰していくので、もつと努力をするべきでしよう。クラスの皆さんに迷惑をかけては行けませんよ？」

「ご都合主義の狙いに自分達も入つていてから更にタチが悪いのだ。「あのさあ、俺達が何をしようと勝手じやないの？なんでそれを君に決められなきやならないんだよ？」

「お前は俺達の母親か何かか？ てか、それが通用するならお前もい

ちいち注意しに来ないで自分の為になる事やればいいんじゃね?」

「うつ…それは…」

その癖、反論されると非常に弱いからこれまたウザイ。なのに納得せずにうだうだと絡んでくる為、とことん馬が合わない。

因みに、ハジメ達は自分と接する時は全く違う一人の態度を見て、物凄く驚いていた。何回も見ているはずだが、やはりここまで対応が変わるとどうしても驚いてしまうらしい。

居づらくなつたのか、天之河は逃げる様にその場を去つてしまつた。

「ごめんなさい。3人共。彼には悪気は無いのですけど…」

「逆にそれが1番タチ悪いんだよなあ…」

「しかもほぼ毎回つて…。しんどいわ」

「あはは、大丈夫だよ。慣れてるから」

ハジメは口では誤魔化しているが、3人共心の中は一致しており、もう俺達には関わらないでほしい、と思うばかりだ。

「はーい、授業を始めますよーつて、ノクティス君、プロンプト君!なんでこの教室にいるんですかー!?

「やつべえ! もうこんな時間だつた! ジャあなハジメ! また来るわ!」

「ちょっとノクトー! 置いてかないでよー!」

「え! あ、はい!」

急いで二人は戻つたが、間に合わずに先生に怒られてたのは自業自得だ。

「いやあ、朝は酷い目にあつたねヽノクト」

「だな。先生も見逃してくれれば良い物を…。ちょっと厳しそぎないか？ グラディオ先生？」

「そもそもお前らが遊びに行つてんのが悪いんだろうが！ てかなんで俺までここに来なきやなんねえんだ！」

昼休憩中、二人に続き教師のグラディオラスも、また2年の教室に来ていた。

グラディオラスはノクティスの親戚の兄さんの様な立ち位置だったが、高校に入ると自分達の教師になり、そこで三人は常に一緒にいるようになった。ちなみにこのグループにはもう1人仲間がいるが、ここにはまだ来ていない。

「良いじやねえか。だつてお前とプロンプト此処に連れてくると、面白えもんが見られるから俺は大歓迎だぜ？」

「俺が迷惑してんだよ!!」

「待つて!? 何で俺も巻き込まれてんの!?!」

その言葉に憤慨するグラディオラスとプロンプトだが、時すでに遅し、既にノクティスの娯楽は始まろうとしていた。

「あの、先輩、お昼ご一緒にても良いですか？」

「先生、私も良いですか？」

そこに現れたのは、園部優花と呼ばれる少女と、零だつた。

そう、この二人がノクティスがこの二人を連れてきた理由である。

「え？ 良いけど、グラディオは？」

「ああ、俺も構わねえってノクト…。お前まさかこれ狙つて俺らを連れてきたろ…」

「あ？ だつて面白えじやん。この一人とお前ら絡ませると暇しなくて良いんだよ俺は」

ニヤニヤしながら自分達のこの状況を見て楽しんでいるノクティスに、少しだけ殺意がわいた二人だつたが、残念だが優花達が見ている状況では何も出来ないため、睨むだけに留まった。

察しの通り、優花はプロンプト、零はグラディオラスにそう言つた感情を持ち合わせている。

朝のプロンプトの発言に過剰に反応していたのも優花で

ある。ただプロンプトは自分に向けられる好意には鈍感である為、彼女はいつも苦労している。

一方グラディオラスはある程度は気付きやすい性格ではあるが、何故かまだ進展がない。

そんな様子を見せせられているノクティスはいい加減痺れを切らし、進まないなら行動起こしてやろう、という事でこの様に彼女達のプラスになるよう行動しているのだ。

「先輩、良かつたら私のお弁当、少し分けましようか？：先輩に食べてもらいたくて余分に作りすぎちゃつたんですけど」

「え？ 本当？ ジャあちよつと貰おうかな～！」

「先生、はい、どうぞ。流石にカップヌードルだけじゃ体を壊しますよ？」

「悪いが。朝急いでこれしか持つて来れなかつたんだわ」

ノクティスの策通り、無自覚だがイチャつき始めた彼らを見て、より一層意地悪い笑顔を浮かべた。とりあえず、後にプロンプト達と話し合いになる未来は確定した様だ。

ところで、先程のもう1人の人物が合流した様だ。
「やはりここに居たか。すまないな。少し生徒の相談に乗つていたら遅れてしまつた」

「やつと来たか。おせえぞイグニス…って あ」

もう1人であるイグニスもこの教師で、ノクティスの幼い頃からの友人でもあつた。

ただ、そんな彼もノクティスの格好の的であり、その横には、「ちょっとノクティス君、なんで私達を見てそんな顔をしてるんですか～！」

社会科担当の畠山先生を引き連れてやつてきた。

「愛子先生も一緒に構わないか？ どうせなら彼女も一緒にと思つてな」

「わ、私は一人が良かつたんですけど、イグニス先生に言われたらその、嬉しくてつい…」

しかもこの2人、他の二人とは違い、もう既に出来ていた。その為、

授業以外何かと二人で居る事が多く、不審に思つた生徒が聞いた所、交際が発覚して落胆する人達が居た事をノクティスは明確に記録している。

「俺は構わねえけど、いやあ、周りがアツアツすぎて困つちまうなあ」「その割には随分と楽しそうだが。：人の恋沙汰で遊ぶのも程々にしておけよ」

「あーハイハイ。お前は俺の母親かつて事で、俺はハジメの所に行つてくるから、お前らは好きにやつてな」

「反省してねえよアイツ」

「そーだよ全く。無闇矢鱈こんな事したら園部さん達にも迷惑かかつてるじゃんか」

ノクティスは既に満足した様で、逃げる様にハジメの所に避難していった。もとい、現在香織に迫られてタジタジになつてている彼の援護射撃に向かつたつて言うのも正解かもしねりない。

因みに、鈍感発言に優花がジト目で見られたのをプロンプトが不審に思つて聞いた所、機嫌を損ねて顔を背けられてしまうと言つたチチ事件が発生していた。

「香織、こつちに来て一緒に食べよう。南雲はまだ寝足りないみたいだし。それに、そんな寝惚けた状態で香織の美味しい料理を口にするなんて俺が許さないよ？」

ノクティスがハジメを手助けしようと向かおうとすると、運悪くそこには天之河が乱入していた。またコイツか。と思いながらも、このままだとハジメの立場が余計に悪くなると危惧したので、そのまま乱入しようとしたが、

「え？ なんで光輝君の許しがいるの？」

「ブフッ」

香織の天然発言により、その必要はなくなつたのと同時に、彼自身の腹筋がやられてしまつたので、どちらにせよ近づく事が出来なかつた。

「つ、ノクティス先輩、また来てたんですか」

「ハジメ、とりあえずヘイトは俺が凌いでおくからお前は白崎と一緒に食べとけ。出来ればそのままくつ付け」

「あ、ありがとうございますノクティス先輩、いやいや流石にそれは無理ですつて！」

今度はノクティスに敵意を向けられたが軽く無視し、ハジメに軽く助言してなるべく香織との二人の時間を邪魔しない程度の位置に移動して、彼らに向けられるヘイトをカバーしていた。

「おーおー、やつてるねえノクト。またお友達の恋愛援助？ 面倒くさがり屋な君にしては珍しいんじやない？」

「ゲツ。アーデン…」

彼がハジメの為に奮闘していると、苦手意識を何故か持つてしまう人物が此方に近づいてきた。

その名はアーデン。彼もまた此処の教師をしている者だが、非常に馴れ馴れしく、苦手意識を持つ者も多いが、それでも人気もそこそこにあると言つた謎の人物だつた。

ただ、ノクティスはそれだけの理由にしては酷すぎるくらいに苦手意識を持つていた。一部の人は前世で何があつたんじやないか、と冗談交じりにノクティスに返答していたが、当たつている様な感覚がしたのは何故だろうか。

「なんだよ、つれないなあ。俺とも仲良くしてくれたつていいじやん？」

「いや仲良くする理由ねえし、それにアンタにはお連れ様がいるんじやなかつたつけ？」

「連れ？」

アーデンが首を傾げたので後ろを指さすと、そこには眼鏡少女が

アーデンのちょうど真後ろにいた。

「やあ、先生。暇だから来ちゃつた」

眼鏡少女こと、中村恵里は、何かとアーデンに引っ付いており、正確にはイグニスと愛子と同じ位の確率で一緒に居ることが多い。ただしかなり一方的なのが難点である。

「…相変わらず物好きだねえ。君も。俺じゃなくてあの正義君の所にでも行つたらどうなんだ？」

「ヤダ。僕はあんな奴よりも先生の方が落ち着くの」

「ほら、やつぱりお連れ様じやねえか」

ノクティスの返答に苦虫を潰した様な表情を浮かべるアーデンだが、それ程嫌らしく思つていないので付きまとわれる原因ではある。なんでも、昔恵里が一悶着あつて、橋から飛び降りようとした所を、アーデンが声を掛けて自分の家に連れてつた事があつたらしい。

それ以来、恵里はアーデンを好意的に思つており、あの様に着いてくるらしい。少々やり過ぎ感は否めないが。

「ねー先生、お昼ご飯、食べてなかつたでしょ？ 僕の少し分けてあげようか？」

「いや遠慮しておくよ。ちよつとノククト。見てないで助けるとかしないの？」

「いや？やつぱ人のそーゆーのつて面白えなつて」

「君ホントそーゆーとこゲスいよね」

アーデンをとりあえず凌いで、そろそろイグニス達の所へ戻ろうとしたのも束の間、教室一帯が光り輝く魔法陣に包まれた。

「!? なんだこれ!？」

「あーっと、これちよつと不味い事になつたかもねえ。しかも原因是あの正義君、か」

教室が混乱になる中、愛子、イグニス、グラディオラスが生徒を外に出そうとするも間に合わず、

その瞬間、
その教室の人達は行方をくらました。

トータス

(ここは……どこだ？俺は確か、謎の魔法陣みてえなのに包まれて……それで……)

『力を求めよ……』

(は……?)

『ルシスに蔓延る闇を祓う力を、クリスタルで貯えよ。それが、我、剣神―――トの啓示……』

(ルシス……？ 剣神？ 闇？ なんだその厨二臭い設定……。てかルシスって何処だよ……。日本にそんな秘境あつたつけ？)

『それで、世界が救えるのか？』

(あれは……誰だ……？ 俺に似て いる様な……)

『左様。力を貯え、お前の命と引き換えに闇を祓い、このルシスに平和は訪れる』

『ハア……!?』

(随分と身勝手なお願いしやがって……。アイツ可哀想だらうが。……いや、待てよ……？)

一ト

(俺は、あの神を知つて いる……？ 様な……気がする)

一クト

(……そうだ、俺はー)

「ノクト!!」

「あ!?」

彼が気が付くと、そこは教室では無かつた。中世の大聖堂の様な、昔にトリップしたかの様に感じる洋風な造りの建物が、自分達を覆っていた。 いつの間にか彼の周りには、お馴染みの三人とハジメが集まつていた。

「大丈夫か？」 何時ものボケーっとした顔しやがつて

グラーディオラスが心配そうにノクティスの顔を覗く。強面の顔がドアップで出てきたらそれはそれは驚くので、当然ノクティスは後ろへ下がつた。

「お、おお。平氣だ。てか、ここ何処だ？」

「わつかんない。けど、どうやら俺達、異世界転移、て奴に巻き込まれたみたいだよ」

「おかげでクラスの皆は混乱に陥つている。取り敢えず俺達は皆を落ち着かせに行つている状態だが、お前が人には見せられない様な表情で突つ立つていたからな」

イグニスの指摘を受け、ノクティスは酷くショックを受ける。そして思わず自分の顔をペタペタと触るが、そんな事をしても何も変わらない為、直ぐに止めた。

「ウエ!? そんな顔してたのかよ！ てか、そんな場合じやなさそうだな」

「ああ、直ぐにお前も手伝つて欲しい。この際、少しでも落ち着いていれる人達の協力が必要だ」

「…それはいいんだけど、お前らの後ろに引っ付いてる奴らは大丈夫か？」

「…あー、この子達ね。大分参つてるみたいだから、背中を貸してあげてるんだよ」

イグニス以外の二人の後ろには、優花と零が背中にひつしりとしがみついていた。大変な状態なのは分かっているが、何か思わず吹き出

してしまいそうになってしまった。

「愛子先生は？」

「あの人も取り乱している生徒のフォローに行つてゐる。あの性格だからな。誰に言われるまでもなく真っ先に行動していたさ」

「あの人そーゆーのはつとけないからな。…彼女の事も後で手厚くフォロー入れとけよ？」

「…提案感謝する…」

ノクティスの発言の意味が良く分かつたのか、明らかに顔を赤らめて照れ臭そうに答えたイグニス。緊張感が無さすぎる様に見えるが、これでも大真面目である。

一部の人人が奮闘する中、1人の老人が皆に声を掛けた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様とそのご同胞の方々。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて、教皇の地位に就いております、イシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願ひ致しますぞ」

「うつわ〜。明らかに胡散臭そうな人キター」

ハツキリ言つて、4人の中の彼の第一印象は最悪であつた。あの勇者（笑）は知らないが。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「どうやら勇者様方はとても取り乱して居られる様子、この事態についての説明を何よりも先にした方が良さそうですな。落ち着いて話せる所まで案内致しますので、着いてきてください」

イシュタルと名乗った爺は、この混乱を予想していた様に迅速な対応で、皆に話していた。

クラスの人達は皆とても落ち着いていられる様ではなく、とても物静かに彼について行くばかりだつた。その中でも落ち着いている方

なのは、勇者（笑）と、あの4人と、ハジメだつた。落ち着いていると言ふか、後者の5人はこの状況を不審がつてゐる為、入念に怪しい所が無いか確認しながらついて行つた。

「…どう思う？」

「どうも何も、怪しそうだろ」

「確かに。本当に此方の状況を理解してゐるのなら、無理に話を進めるよりもそつとしておくのが道理な筈だ」

「全くだよね。こんなに園部さん達怯えちゃつてるんだからさ、もうちよつと考えらんないのかな？」

「…／＼／＼

「…お前マジで早く自覚してくんねえかな」

こんな事まで言われてゐるのにも関わらず、気付かれぬ優花は少し哀れに思えてきてしまう。それに加え零も少しグラディオラスに何か言つてもらいたげな顔をしていたが、それに気付いた彼は何故か頭をポンポンと軽く叩くだけであり、不服ながらも何処か嬉しげな顔を浮かべているのをノクテイスはバツチリ目撃した。

「ヘタレゴリラ」

「うるせえな」

一旦皆の気遣いの話はそこで終わり、彼等は警戒を緩めないまま、イシュタルへついて行つた。

やがて、イシュタルは長いテーブルがある応接室の様な、会議室の様な場所へと連れて行き、そこにある椅子に彼等を座らせた。する

と、何人かのメイド服の女性達が現れ、一人一人に丁寧な給仕をしてくれる。

殆どの男子がそれに釣られ鼻を伸ばしていて、女子が軽蔑の眼差しでそれらを見る。此方しても、ハジメはヲタクの血が騒いだ様で、しばらく凝視していると香織に良い笑顔で睨まれ、プロンプトも初めて見るメイドに心を踊らせていると、優花に泣きそうな鋭い目で見られと、男子にとつては嬉しくも1部の信頼を失う一件が起こつた。

一方、イグニスとグラディオラスも彼女達を見つめていて、愛子と零が他と同じ目線を浴びせようとしたが、どうにも釣られている様には見えず、尋常ではない程に警戒していた様子なので、どこか安心した様子でそのまま眺めていた。

「これ、どう考へても戻だよな」

「ああ、年頃の女性を上手く使つて俺達を誘導しようとしている魂胆が丸見えだな」

「プロンプトは案の定だが、ノクトが見向きもしないのは以外だな」

「アソツはそんなもんだろ。日本でだつてアソツが女を探してゐる様子なんて見られなかつたし、余程に心に決めた人が居るとか、居ねえとか言つてたしな」

実質それは当たつており、ノクティスは顔も名前も知らない筈なのに、何故か明確に特徴が出てくる程に、巡り会いたい女性がいると、一度だけグラディオラスに曖昧に答えたことがあつたようだ。

「さて、皆さん、話に耳を傾ける程には落ち着いたご様子、ですので、まずこの世界について、少しながらお話をさせて頂きたいと思います」

そこからイシュタルは、事細かく、そして丁寧に説明し始めた。

まず、この世界はトータスと言い、このトータスには人間族、魔人族、亜人族が存在する。

人間族は北一帯、魔人族は南一帯を支配しており、亜人族は東の樹海にひつそり住んでいる、という。

人間族と魔人族は対立関係にあり、数は人間族の方が上回っているが、個人一人一人の力や資質は魔人族がリードしている、という状態にある。

しかし、ここ最近で魔人族が魔物を使役した事により、人間族は数を減らされ、壊滅の危機に陥つたという事。

魔物とは、野生動物が魔力を取り入れて変化した生物で、固有魔法と呼ばれる魔法を使う生物、と以外詳しい事は分かつていないらしい。

「あなた方を召喚したのは、エヒト様です。我々人間族が崇める守護神であり、聖教教会の唯一神にして、この世をお創りになられた至上の神でございます。恐らく、この事をエヒト様は悟られたのでしょうか。それを避ける為に、あなた方を召喚なされた。あなた方の世界はこの世界よりも上位にあたり、例外なく、強大な力を持つているのです」

まるでテンプレだな、とノクティスは感じていた。大方、ここまでくれば話は見えてくる。その力を使つて世界を救え、との事だろう、と。実際その通りだつた。

ただ、此方に対しても黙つてはい、そうですか、と呼ばれる状況下ではない。

「ふざけないでください！ 結局の所、この子達を戦争に加担させようつてことでしょう！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を帰してください！ きっと御家族の皆さんが心配しているはずです！」

「それに対する同感だ。第一、我々はこの世界の事を何も知らない。そんな世界でいきなり戦え、と言われても、何も出来ずに殺されて終わりのはずだが」

真っ先に反対意見を述べたのが、イグニスと愛子夫婦であつた。その姿に、尊い、と思う者や、ああ、また愛ちゃん先生が頑張つている、と思う人、イグニス先生のイケメンパワー発動してるわ、と興奮している人がいた。

「お気持ちをお察しします。ですが、あなたたちのご帰還は、現状、不可能です。」

「ふ、不可能ってどういうことですか!? 召喚出来たのなら、帰す事だつて出来るはずでしょ!?」

「いや、愛子先生、その言い分は正しいかも知れない」

「え？ どういう事ですか？」

「イシュタル殿は先程、エヒト様が召喚なされた、と言つていた。だが、そのエヒト、と名乗る者は実際にここにはいない。そして言い分から推測すると、エヒト以外には、転移手段を持った人物がない、だからエヒト自身が帰還を承諾してくれないと不可能、ということなのかも知れない。合っているか？ イシュタル殿」

「敬わない言葉遣いは気になりますが、その通りですさな。実際、我々にはそのような高度な魔法は扱えませんゆえ」

「そ、そんな…」

殆どイグニスの推測通りの結果だつた。その言葉を聞いた刹那、生徒達にパニックが襲う。

中には泣き出す生徒や、父母に助けを求める者もいた。幸い、正氣でいられているのは、道中でも堂々としていた面々だけだつた。

「…益々胡散臭いな」

「ああ。イシュタルって奴は信用出来ないが、エヒトは、もつと信用出来なさそうだな。第一、それ程までに凄まじき神ならば、俺達が戦闘のせの字も知らない事ぐらい、把握しているはずなのだがな」

「…やっぱり、先生方もそう思つていたのですか？」

「ん？ やっぱりって事は、南雲もそう思つてたつて事か？」

「はい。なんか、ここの人達には申し訳ないんですけど、どうも信用しちゃいけない感じがして…」

「どうやら、正しく分析出来ているのは俺達とハジメと、愛子先生だけだろうねー」

余りにも少人数だが、それでも味方がいて良かつた、とハジメは安堵していた。

「でもさ、実際俺達、詰んでない？」

「ハア？ 何がだよ」

「プロンプトの言う通りだな。実質帰れない、となれば、俺達は意地でも戦いに駆り出されるだろう。ましてや、クラスには、物事を考えずに行動を起こす人物も残念ながらいる」

「…ああ。理解したわ」

「状況的にも、人選的にも最悪な状態、て訳だ」

そして、またもやイグニスの予想通りとなつてしまふ。その物事を考えずに行動を起こす戦犯が、今立ち上がつた。

「みんな、ここでイシュタルさんに文句を言つても仕方ないんだ。俺は、戦おうと思う。この世界の人間達が危機的状況にあるのは、事実だ。放つておくなんて俺には出来ない。人間を救う為に召喚されたのだから、救えれば帰してくれるかも知れない。…イシュタルさん。どうですか？」

「そうですな。エヒト様も、救済の暁に元の世界に戻す事をお考えになられるかもしだせぬ」

「俺達には大きな力があるんですね？ここに来てから大きな力が漲つている気がします」

「ええ、そうです。ざつと、この世界の人々に比べれば数十倍ほどのお力をお持ちと考えても良いでしような」

「うん。なら大丈夫。人々も救い、皆が家に帰れるように、俺は戦う！」

イシュタルはその言葉を聞き、一瞬気持ちの悪い笑みを浮かべ、直ぐに顔を戻した。計画通り、とでも思つてゐるのだろう。

そして、クラスメイトも纏め役の光輝に言われたら、止まらない。何処からか知らないが溢れ出た勇気を出し、次々と賛同していく、が、「ちよつと待てお前ら。勢いで言つてるが、本当に戦えんのか？」

グラディオラスが注目を集め、クラスメイトの偽りに近い勇気を確かめる。ただ、グラディオラスと同じ意見のノクティス、イグニス、プロンプトも何時でもフォロー出来る様に構える。

「グラディオラス先生、何を言つてゐるんですか。覚悟があるから、俺達はこうやつて…」

「お前は黙つとけ。俺が言つてるのはそういう事じやねえ。魔人とはいえ、人を殺せる勇気は備わつてんのかつて話だ」

その言葉を聞き、はつと気がついた生徒達は、みるみる顔を青ざめさせていく。

「その反応が証拠だ。それに、今のお前達では、殺す所か、戦いの仕方も分からぬだろう？そんな状態で覚悟を決めて、すぐに崩れ去つて最後には挫折するのがオチだ」

イグニスもすかさずフォローを入れる。益々顔色が悪くなつていく生徒達。ちらつと見やると、イシュタルは物凄い形相でイグニス達を睨んでいた。余計な真似を、と思つてゐるのだろう。

だが、それでも空氣の読めない勇者は止まらない。

「じゃあ先生は、この世界の人達を見捨ててもいいってことですか!?」「そうじやない。だが、自分達が不完全な状態なのに、どうやって他人を救う？」

そう言つて、生徒達の中途半端な気持ちを傾かせようとするが、イシュタルも負けじと横槍を入れてくる。

「私達も、何も無い状態で戦いに参加させるわけではございません。訓練や講義等の、必要な事は此方が支援させていただきますが」

「じゃあ何も問題ありませんね！ それだけ支援して貰えるなら、俺達でも戦えるはずです！」

「だからそれだけじゃダメだつて言つてんだろうが。なんだ？ 人の殺す覺悟もそれだけで備わるとでも思つてんのか？」

「！ なら、話し合いにでも持ち込んで戦いを止めさせれば良いじゃないですか！」

どんなに説得を試みても、勇者が何かに操られているかのように頑なに意見を変えず、殆どが天之河に賛同していく。

そんな中、一人の男がイシュタルに話を持ちかけていた。
「ねえ、イシュタルさん？ だつたつけ。戦争に参加するしない、

は個人の自由にする事つて出来ない？」

「は？ と言いますと？」

あまりこう言つたデカい話には乗つてきた事が無いアーデンが、珍しく意見を放つた。勇者（笑）は勿論だが、ノクティス一行も彼を警戒していた。と言つても、後者は何かとんでもない事を抜かすのではないか、と危惧しているだけだが。

「いや、ね？ そこの正義くんとか、戦いたいって人達はそのまま参加す

ればいいさ。でもね、本当に心の底から嫌な人とかを無理矢理にでも参加させていいのかなって」

「アーデン先生まで、何を言つているんですか！俺達は心の底から」

「はいはい、ご都合主義で周りが見えない、可愛そうな頭の坊ちゃんは黙つてて。うるさいから」

「つ！」

相も変わらず反論しようとした勇者を、アーデンはこれまたいつもとは違う、軽やかな声色なのに何処か、殺氣の籠つた言葉で黙らせた。「生憎ですが、勇者様方がお決めになられることですから、私には何も…」

「無理に人を殺して壊れちゃつたら、困るのは貴方方だけど？」

「なんと！」

「先生!! 貴方はなんて事を!!」

室内一帯が氷河の様に寒く凍えた様な気がした。自分がそうなつた時を想像したのだろう。

勇者が歩いていき、アーデンの胸ぐらを掴みかかる。

「貴方はそれでも教師か!? 生徒の意見を聞くどころか、怯えさせるなんて!!」

「怯えるつてことは覚悟ができるでないつてこと何じゃないの？ てか、黙つてろつて言わなかつたっけ？」俺

凄い剣幕でアーデンを睨むが、当人は何処吹く風。そのままイシュタルに、己の考えを述べ始めた。

「いい？ 大方、多分召喚されたつてことはこの世界の大体の人人が知る事になるでしょ？ それで世界が救われるならまだしもさ、召喚された勇者達の心が壊れて戦いどころじゃありません、とかになつたら、救われもせず、あんた達のエヒト様？ の評価にも傷がつくんじやない？」

唖然とするしかなかつた。ノクティス達は何かを悟つているのか黙つているが、他の人達の半分がアーデンに軽蔑の眼差しを向け始めた。勿論筆頭は勇者（笑）。

イシュタルも何処か言いたげな表情を浮かべたが、

すぐ様そのケースを考え、

「ううむ…。我々としては救いこそ最大の目標、ですが、エヒト様の名が廃れてしまう事は、避けなければなりません…」

「別に俺は、完全に拒否してるわけじゃないよ？戦いたい奴はどうぞって差し出すつもりだけど、壊れて足出まいになるくらいなら最初から参加しない方がいいって言つてるだけだから。それに、戦う以外にも救う方法はいくらでもあるでしょ？それそれがやりたいことをさせればいいんじゃないかなって思うわけ。

だからさ、皆。さつきのイグニス君とグラディオ君の言葉に少しでも怯えた子達は、戦う以外の事、探しなよ」

なんやかんやで戦争拒否派の逃げ道を作つたアーデンは、意見に賛同する者を求めたが、

「それでも、この人達を見捨てる、ことは出来ない！」

勇者（笑）は絶対に意見を曲げなかつた。拳句の果てには、アーデンを悪と判断し、従つては行けないと生徒達に呼びかける始末。

「あのさ、さつきの会話で思いつかなかつたわけ？もし無理に戦つて精神に異常をきたせば、困るのはイシュタルさん達なの分かつてる？」

「そんな事には俺がさせない！！ 第一、人を道具の様に思つてているような貴方には賛同できない！」

「え？ そんな解釈してたの？ て言うか、君にそんな力あると思う？」

胸ぐらを掴んだままアーデンを責め立てるが、答えが出たようで、イシュタルが声を出す。

「本来なら、神への侮辱で不敬罪も検討すべきですが、貴方の仰る事も一理あると考えます。ですので、その意見を呑みましょう」

どうやら、自らが信仰する神の評価が下がる事を恐れた様で、上手い具合に誤魔化して話を承諾した。その言葉を聞いて、アーデンは二ヒルな笑みを浮かべた。

だが、その後で、

「イシュタルさんはああ言つてくれたが、それに甘えては行けないと

思う。第一、あの男の口車に乗せられてはだめだ！」
と、あまりにも都合の良すぎる解釈で、結局アーデンに賛同するものは少なかった。

迷う者

殆どの人達が戦争への参加を上げた後、生徒達はイシュタルに、今後の活動拠点にしてもらう場所へと案内された。この教会がある神山の麓にある王国、ハイリヒ王国へと。

途中、何かと目の敵にしたアーデンへと、天河が口論を持ちかけ光景が何度も見られたが、恵里が乱入し、「いい加減君の腐った価値観、川にでも投げ捨ててくれないかな？」耳障りなんだよ♪」

と、とてつもなくいい笑顔で言い返し、それで収まるかと思いつや、恵里に何をふきこんだ、と始まつたので、坂上に無理矢理前に引っ張られていた。坂上曰く、馬鹿の俺でも今のアイツは迷惑をかけっぱなしだと思つたからと述べている。

王国へ向かう際にも、前に案内された時と同じ様に固まりながら歩いていた。中でも、愛子のメンタルがズタズタで、イグニスの背中に乗りながら顔を填めて彼に慰められる事態が発生しており、「私はダメな教師ですう…」

とネガティブ全開な発言に、

「貴方程生徒の事を考えて行動している先生を俺は見た事がない。だから自信を持つていい」

と非の打ち所が無いフォローで励ましていた。そう言つてくれたのは貴方だけです…と若干声色を上げて返答していた事から、少しではあるが回復の傾向にあるのだろう。流石は夫（非公認）である。

尚、その会話を微笑ましげに見つめている人が多く居たが、この原因を作つているのは自身達が原因だと気付いてない人が多かつたが、優花を含めた1部の生徒は、何かを迷つている様な表情でそれを見つめていた。

ちなみに、ノクトは真剣な表情のハジメを見つけ、気持ちを和らげる為に話しかけに向かつた。

「ハジメ、どうした？」

「あ、先輩」

「もしかして、参加するかしないかの事か？」

「はい。僕は、何か自分に出来ることがあるなら、やつてみようかなって」

「…そつか。お前が心の底から決めた事なら何も言わねえよ。その代わり、俺達もカバーしてやるから、心配すんな」

「…何から何までありがとうござります…」

やがてノクティスはハジメの肩に手を置き、あんま背負い過ぎんなと言つて、気持ちを和らげていた。

やがて、台座のような場所に連れてこられ、そこに乗るよう促された皆は、なんの疑いもなく乗り、警戒組は、恐る恐る乗つた。全員が乗つたことを確認すると、イシュタルは杖を掲げ、呪文を唱える。「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん。

— 《天道》 —

なんということでしょう。（棒）台座の魔法陣が輝き出し、ゆっくりと移動しているではありませんか。

皆はこの魔法を見て、写メ大会が開かれているごとく、うるさい程に興奮していた。

ノクティスが氣だるそうにそれを眺めていると、毎度お馴染み、アーデンさんが現れた。

「やつほ、ノクト。調子はどう？　さつき見苦しい乱闘見せちゃつたらから氣分悪いでしょ」

「お前ほんと俺に着いてくるよな。なんだよ、意外なおっさん」

「おいおい、酷いなあ。おつさんなんて。俺まだ30代だよ？」

：

先程までイチャモンをつけられていたとは思えない程、彼は陽気に

回りながら答える。

「てかさ、毎度思うんだが、お前暑くねえの？　そんな厚着してさ」

ノクティスの突然の指摘だが、そう言いたくなるのも無理はない。

アーデンは、明らかに冬でも暑いような程にジャンジャン着込んでおり、素肌が顔以外見えない様に服で覆われている状態なのだ。

「いや、実は俺、日差しがダメだつたんだよ。最近は大丈夫なんだけ

ど、その時の癖でさ。暑くはないんだけどね」

「癖つて…。やっぱ変だなお前」

結局はアーデンに対する評価は変わらず、増してや変態度が増えてしまったその評価に不服そうにしながら佇んでいた。

「もう、先生つたら、ナイスフォロー入れた僕に何の礼もなくどつか行っちゃって」

ノクティスとの会話に集中していたのか、いきなり現れた恵里にらまたもや捕まれ、思い切り背中に張り付かれていた。

「やつぱり着いてくるのね…。どんだけ俺の事好きなの？君

「ええ？ 死んでもついてくぐらい？」

「やつべえのに好かれたなお前…」

彼女の狂気が垣間見える愛の発言に、これは恋バナ好きのノクティスも少し狼狽えてしまった様だ。

「スー、ハー、スー、ハー。んうー♪ 先生のこの独特な匂い…。いくらでも嗅げちゃうなあ」

「あのおー。おまわりさーん？ ここに頭の可笑しい人1名いまーす」

「お前まで頭おかしくなつてどうすんだよ！ 居ねえよここに警察！」

いくら大声でツッコミを入れても誰も振り向かなかつたのは幸いだつたようだ。

やがて、王国へと辿り着くと、王宮の様な場所へと連れていかれ、そこには国王と思われる男と、王妃、王子、王女と思われる人物が立つており、生徒を出迎えた。

国王から名を、エリヒド・S・B・ハイリヒ。

王妃、ルルリアナ・S・B・ハイリヒ。

王子、ランデル・S・B・ハイリヒ。

王女、リリアーナ・S・B・ハイリヒと呼ばれている。

そこでエリヒドは、玉座から立つたまま私達を出迎え、イシュタルがそこに辿り着くと、その手をとり、王は手にキスをした。

「ウオエ…」

「吐くな、プロンプト。これでも神聖なものよう…だ」

「お前だつて吐きそうじやねえか。ウオエ…」

仲間3人は耐えきれずに口を必死に抑えていた。奇跡的にバレずに済んだが、ノクティスには丸わかりだつた。

その後に、晚餐会が開かれ、それぞれ出された食事を美味そうに平らげていたり、緊張感が無くなつたのではないかと思えるくらいに楽しげに参加している人が殆どだつた。

「…そうちか」

「どうした、イグニス。何か分かつたのか？」

「新しいレシピを思い付いたぞ」

「そつちかよ!!」

イグニスは楽しむと言ふより、料理を見て少しだけ研究をしたようだ。常に愛子の傍というのは譲らなかつたが。

因みに、ランデル王子が香織を偉く気に入り、アプローチを掛けたが普通に流れされ、ハジメの所へと向かつたので、そのまま流れる様にハジメを睨むが、隣にいたノクティスに謎の気迫で押し返され、首がむしれるのでは無いかと言うくらいの速さで顔を逸らしたと言うことが起きていた。

王の話によると、王宮にいる間は、そこでの衣食住は保証するのと、何か行いたい事があるのであれば、最低限の援助を行う、というらしい。訓練にも教官が付属され、万全な状態でノクティス達をサポートするとの事だ。

晩餐会が終了すると、個人の部屋を設けられ、各自それぞれの部屋で休息をとるようにと言われ、そこでの一日は終了した。が、プロンプトが部屋に戻る際、優花が着いてきたので、部屋に入れて、2人でしばらく話をした。

「すみません。突然お邪魔しちゃつて」

「いいよいよー。俺も部屋に行つても中々寝れないだろうなあつて思つてた所だし」

プロンプトは椅子を少し引き、彼女が座れるようにちょうどよく調節した。こういう少しの気の利いた行動が、優花を惹き付けているのだが、彼は知る由もない。

「怒涛の一日だつたねえ。俺もうどつと疲れたよ」

「私もです。その、最初の方はご迷惑をおかけしました」

「え？ あー、あれは別に大丈夫だよー。なんかいーなーつて思ったし」

「え？ それって…？」

「女の子にああいう事されるのつてイタタタタタタタタ!! いきなり何するの!?」

「…むむむむむ…」

結局はいつも通りの結果に終わつてしまい、不機嫌になつて彼の腕を抓つたがそれでも機嫌が治らず、さらに力を強くした。

「と、所で、園部さんつて結局、戦争、参加するつもり？」

誤魔化すように彼は、今後について語ろうとし始めた。

「私は、参加しません」

「そつか。でも、何か悩んでる事、あるでしょ？」

「…はい」

彼女は、胸の内をポツポツと語り始めた。自分は、戦争に参加するのは反対で、アーデンの意見、そして自身の敬愛する愛子のあの状態を見て、よりその気持ちは強くなつたと言う。

そして同時に、反対意見に賛同していたが、天之河の熱量に押され、自分の気持ちを押し殺して参加せざるをえなくなつた人達を後押ししよう、とも考えた。だが、するにしても自分の発言力ではどうにもならないと決めつけてしまい、どの様に切り出そうか悩んでいると言う。

「そつか。そんな風に、考えてたんだね」

「…はい」

お互に沈黙が流れる。が、突然プロンプトがベッドに倒れて声を

上げる。

「すつごいねやつぱ！ イグニスも、園部さんもさ」

「凄い、ですか？」

「うん！ だつてさ、普通この状況だつたら自分の事で精一杯で、そこまで気が回らない人が多いじやん？」

素直に賞賛された優花は下を向き、恥ずかしそうに微笑んでいた。

「発言力がない、か。そんな事は無いんじやない？」

「え？」

突然の想定外のフォローに予想外だと反応を浮かべ、その返答を求める。

「だつてさ、その子達からしたら、きつかけが欲しいわけでしょ？ その子達もアーデン達の意見に賛同してたみたいだし、でも決定打が足りなかつたから、動けなかつた。だからこそ、同じ生徒である君が出る事は、その子達には何よりも必要な事なんじやないかな？ つて、俺は思う」

思い返せば、その通りだと思った。それでも、自分に出来るだろうかと言う気持ちは変わらず、表情が変わることは無かつた。

「俺ね、ノクトと出会う前、すつごく自分に自信がなくて、ビビリだつたからさ。何をやるにも怖くて、行動できなかつたんだよね」

「先輩が、ですか？」

「あ、そこ意外なんだ…。今もそれは少し残つてゐるけど、でもさ、皆と出会つてから、自分にもなにか出来る事があるんじやないかって、それで、これを始めたんだ」

彼は、ポケットに手を突つ込み、何枚かのプリントされた物を出した。

「これは、写真？」

「そう！ アイツらさ何回も集まる癖に、写真の1つも取らないんだよ？ だから俺が皆集めて、こうやってパシャつて。そしたら、何か楽しくなつて来て、ノクト達も心なしか嬉しそうでさ。皆の思い出を記録するのが、俺の1つの楽しみなのかなつて。そう考え始めたんだ」

プロンプトの楽しそうに語るその姿に、ただただ魅入ってしまい、すっかり悩みを忘れそうな程に惹き込まれていた。

「だから園部さんも、自分が一番したいなつて事は、思い切ってやつちやつた方が良いんだよ。写真の話と今の話を結びつけるのも何か、強引な感じもするけど…」

「…ふふ…」

「え、今笑う要素あつた？ 僕なんかしちゃつたつけ…」

少し焦った表情で困り果てているが、彼女には今の言葉は大分心に響いた様で、どうやら決心がついた顔付きになっていた。

「ありがとうございます。先輩。お陰で漸く、一歩踏み出す事が出来そうです」

「そ、そ？ なら良かつた。ちゃんとフォロー出来たかめっちゃ不安なんですけど…」

「上手く出来てましたよ。：普段も、それくらいに頭を回して気づいて欲しいんですけど…」

「あの、園部さん？」

じつと、プロンプトを見つめる。これだけで普通は分かるはずだが、分からぬのがこの男である。

「えつと…？」

「…むう」

「ええ？ ちよつと待つて!? なんでそんな不機嫌になつちやつたの！」

「知りません。先輩のばーか」

「ノクトと言い、君達辛辣だねホントに！」

「知りません。そんなんじや彼女なんて出来ませんよ」

「はうあ!! 気にしている所を抉られたあ…。でも鈍感つて？俺誰かに好意向けられてたりしたつけなあ」

「…やっぱり先輩の大バカ」

「一日のうちに何回罵倒されればいいんだよオ!!」

暫く優花が言いたい事を言つて、この夜でプロンプトの精神はゴリゴリ削られて行つた。

翌日、生徒達は再び集められ、手のひらにピツタリハマるくらいの銀色のプレートを配られ、不思議そうに眺めていると、騎士団長 メルド・ロギンスがそれについての

説明を始める。

「よし、全員に配り終わつたな？ 早速だがこれについて簡単な説明をしよう。これは、ステータスプレート、と呼ばれており、その通りに自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。まあ、簡単に言えば身分証明書にもなる物だから、失くすなよ？」

とても噛み砕いた言葉遣いで、分かりやすく説明をする。それに

は、「これから共に背中を預ける中になるかもつてのに、いつまでも他人行儀で話せるか！」

と本人の強い希望の上での言葉遣いである。生徒達からしたらフレンドリーなおじさんだが、騎士団からしたら威厳もあつたものでは無いので、止めさせたいのが本音だろう。

「このプレートの一面に魔法陣が刻まれているだろうから、そこに血を一滴、渡した針で傷を付けて垂らしてくれ。それで所持者が登録される。

『ステータスオープン』と言えば、表に自分のステータスが表示される筈だ。ああ、原理は聞くなよ？ 知らんからな。神代のアーティファクトの類だ』

ここで出て来た謎の単語に、疑問を浮かべ始めた生徒達の代わりに、勇者（笑）が声に出して説明を求める。

その実態は、このトータスでは現在再現できない強大な力を持った

魔道具、と言つたものらしい。ステータスプレートはその一環だという。

早速、それぞれが針を使い、ステータスを開示していく。

「どれ、俺達もやるか」

「おう。どんなもんか一応気になるしな」

「針い？ 自分から刺すとかどういう神経してんだよー」

「んなどこで渋つてんな。ほら、さつさとやれや」

「ちょっと待つてえ！ ノクトお！ 押さないでえ！ 大怪我したらどうすんだよおお!!」

「うるさいなあ。1回やるだけで何を戸惑つてるんだよ。ほら、早く

指、刺しなよ」

プロンプトを除いた皆は早速開示していき、ようやく決心をした彼も、痛がりながら開示した。

そこには、それぞれのステータスが書いてあつた。

ノクティス・ルシス・チエラム	??歳	男	レベル??
天職	真の○		
筋力	100		
体力	150		

魔力	敏捷	耐性	体力	筋力	天職	イグニス・スキエンティア	??歳	男	レベル??
50	70	10	150	80	○の頭脳				

連携特化	クス	耐魔力	耐性	敏捷	魔力	技能	武器召喚	魔法精製	ポーションボツ
??? :	??? :	言語理解	高速魔力回復	??? :	年齢	??歳	??? :	??? :	??? :
??? :	シフト	魔力回復	魔力回復	??? :	年齢	??歳	??? :	??? :	??? :
??? :	連携特化	武器召喚	魔法精製	武器召喚	年齢	??歳	武器召喚	魔法精製	ポーションボツ
天職	○の盾	○の盾	○の盾	○の盾	○の盾	○の盾	○の盾	○の盾	○の盾
筋力	250	250	250	250	250	250	250	250	250
体力	250	250	250	250	250	250	250	250	250
耐性	280	280	280	280	280	280	280	280	280
敏捷	40	40	40	40	40	40	40	40	40
魔力	10	10	10	10	10	10	10	10	10
耐魔	40	40	40	40	40	40	40	40	40
技能	言語理解	闘争本能	怪力	絶対防御（回数制）	秘技開発	ポーションボックス	武器召喚	魔法精製	ポーションボツ
絶対死守（回数制）	??? :	??? :	??? :	??? :	??? :	??? :	武器召喚	魔法精製	ポーションボツ
連携特化	??? :	??? :	??? :	??? :	??? :	??? :	武器召喚	魔法精製	ポーションボツ

耐魔

100 |

技能

言語理解

レシピドーム

料理保管

料理複製

状況把握

強制集合（ギャザリング）連携特化

ポーションボックス

??? :

??? :

プロンプト・アージェンタム

?? 歳

男

レベル??

天職

○の近衛

筋力

100 |

体力

50 |

耐性

80 |

敏捷

180 |

魔力

20 |

耐魔

80 |

技能 言語理解

武器精製特化

遠距離攻撃高確率命

中

銃弾自動転送

ポーションボックス

連携特化

??? :

??? :

『なんだこれ…』

まだステータスの主な見方や平均的な数値は聞いていないが、それでも以上だと分かるくらいにツッコミ所がいくつも上がっていた。

「真の○つて何だよ…。意味分からなすぎて笑えてくるわ」

「お前はまだいいだろ、俺の○の盾つて何を守るんだよ…」

「○の頭脳とは…。俺はプレートに馬鹿にされているのか…!？」

「俺なんて近衛だよ!! なんで知りもしない○さんを護衛しなきゃならないんだよ!!」

混乱を他所に、メルドは皆が確認し終えたと判断し、説明を再開し始めた。

「全員見れたな？ 説明するぞ。

まず最初にレベルがあるだろう？ それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100で、それがその人間の限界を示す。レベルとは即ち、その人物の到達できる領域の現在値とでも思つてくれ。レベル100なんて奴は、人間としての潜在能力を全て発揮した極地と言つても過言ではないからな。ま、そんな奴はそうそういないが」

丁寧に解説してくれるのは有難いが、彼らはレベルすらまともに表示されていないので、聞く意味が無くなつてしまつた。

そこからの説明は、ステータスは訓練や魔法、魔道具で上昇するという事、天職は才能のような物で、技能と結びついており、戦闘職と非戦闘職に分類される様と言う事を解説してもらつた。

「あれ？ 僕達つて結構可笑しいんじやない？」

「レベルどころか、天職も理解不能だからな…。連携していると言う割には、全く技能と釣り合つていなくて…？」

進めば進むほど混乱を強くさせる4人を他所に、メルドは止めること無く話を進めていく。

「後は…各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうな！ ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練を行う場合の参考にしなきやなん」

「レベルすら分からぬから、僕達がどれだけの段階なのかよく分からぬんだが…」

「ていうか待てよ？ よく見たらステータスの横に、なんか棒線が敷かれてないか？」

彼らがよく凝視すると、グラディオラスの発言通り、数字の横に何やら小さい棒線が敷かれていた。それも全てに。

「…ステータスプレートが壊れてんじゃねえの？」

「いや、そんな筈は…だが…うむ…」

「あ、あの、先輩…」

自分達の結果で精一杯の中、ハジメが、弱々しく話しかけてくる。その表情は凄まじく必死で、否定して欲しい様な、逃避したいようにも感じられた。

「どうしたハジメ。何かあつたのか？」

「（）、このステータス、何ですけど…」

――

南雲ハジメ 年齢 17歳 男

レベル1

天職 鍊成師

筋力	10
体力	10
耐性	10
敏捷	10
魔力	10
耐魔	10
技能	10

鍊成 言語理解

「o h . . . s i m p l e」

「無駄に良い発音しないでくださいよプロンプト先輩。心にきますから…」

「てかこれ、非戦闘職じやねえのか？」

「なら何も問題は無いだろう。逆に鍊成、と言うのは想像力が試されるものでは無いか？」

「いや、分かつてるんですよ。分かつてるんですけど…。言われるからには数倍くらいのステータスが良かつたです…」

「まあ、気にすんなつてハジメ。逆に鍊成の力ですげえもん作って伝説残してやろうぜ」

「…優しさが今は辛いです…」

どうやらここに集まっている人達は何かしら困り事を抱えている様だ。ハジメは精神的ダメージが大きいので、慰めも大した効果は得られなかつた。

そんな中、早速メルドの確認が、勇者（笑）から始まつた。

そこに書かれていたのは、

天之河光輝

17歳

男

レベル1

天職 勇者

筋力 100

体力 100

耐性 100

敏捷 100

魔力 100

技能 全属性適正

全属性耐性

物理耐性

複合魔法

剣術 剛力 縮地

先読

高速魔力回復

氣配探知

魔力感知 限界突破

言語理解

まさに、チートの塊だった。

「ほおー。流石は勇者様だな。レベル1で既に三桁か。技能も普通は3つくらいなんだがな。頼もしい限りだ！」

「いやあー、アハハ：」

「ハハ：。流石は天之河君：」

「あーー！　ハジメの目が虚ろになつてるう！　しつかりしてハジメえ！！」

流石は勇者（笑）。無自覚にも人にダメージを与える力は天才級のようだ。プロンプトは、これ以上ハジメの心が荒まないよう、そつと耳に手を当てて聞こえないようにしていた。優花からは凄く羨ましそうに見られていたが。

ちなみに、メルドのレベルは62で、ステータスは300前後、トータスでトップクラスに入る実力者だが、これを勇者（笑）は、たつた数レベルで追い越しそうな域に既に達していた。

どうやら、他の生徒達も中々のチート揃いだった様で、プロンプトはハジメの耳を塞いでいて良かつたと安堵していた。もし聞いていたらと思うと、ゾツとする。

やがて報告していないのは、愛子、ノクティス達、ハジメ、アーデンの計7人となつた。

「さて、残りはこここの奴らだが、よし、そこの坊主から見せてみろ」

「は、はい…」

「ハジメ、大丈夫？　もう少し落ち着いてから見せた方がいいんじやない？」

「いや、大丈夫です。どうせ見せるのは変わらないんですから…」

ハジメは覚悟を決め、メルドに勢い良くプレートを見せる。が、「ん？」と案の定笑顔のまま固まり、2回ほど軽く叩いて「見間違いか？」と様々な方法を試してステータスを確認する。が、結局変わらなかつたようだ。

「ああ、なんと言うか、鍊成師と言うのは、言つてみれば鍛治職の事だな」

非常に言いにくそうに現実を伝え、ハジメのこのステータスは残念だが事実ということになつてしまつた。

それを見た檜山達は、ここぞとばかりにハジメにいちやもんを付けようと近付いてくるが、ここで皆の先生、イグニスがすかさず助言を入れる。

「おいおい、南雲…」

「言つておくが、お前達に南雲を非難する権限はないぞ。聞いてなかつたのか？ 戦闘職と非戦闘職に別れると。ならば、南雲はサポートや、鍊成を駆使した役柄につけばいい」

思わず援護に檜山達は状況が悪くなり、2人を睨みながら何事も無かつたかのように座つた。

「あの、メルド団長、イグニス先生が言つた通り、後方支援的な立ち位置になつてもいいでしようか」

「ああ、それは構わねえぞ。ただ、訓練は厳しく行くから、ついてこいよ？」

檜山はここで黙つたが、ここでそうはならない人物が1人いる。

「ちよつと待つてください。先生。俺達は全員で戦うと言つたはずです。南雲だけを参加させないのは不公平では無いのですか？」

勇者である。尚、この勇者は既に、アーデンがイシュタルに発言して作つた、非戦闘の道を無かつたことにして、完全に自分の都合のいいように記憶を作り替えていた。

「…お前は何を勘違いしている？先日のイシュタル殿の発言をもう忘れたのか？言つていただろう。戦う意思のある人だけを向かわせる、と。メルド殿も、それはご理解の上ですよね？」

「ああ、俺もその様に聞いている。流石にステータスは驚きはしたが、坊主に意思がないと言うのならば、無理強いはせん」

「それに、ハジメは戦わねえとは言つてねえよ。ただ、今の状態で突っ込んだら危ねえから、後方支援になつた方がいいんじやねえかつて言つてるだけだろ」

この場での纏め役もその様に聞いている。それでこの場は解決する筈。だが、それを与えないのがこの勇者である。

「それは…アーデン先生がイシュタルさんを脅したからですよ！ そんな事をする様な男の意見を聞くなんて事は俺がさせません！ それに、そんな物は甘えでしかありません！ 普段から南雲は甘やかされてるからそんな結果になつたんですよ！」

「テメエ言わせておけば…！」

「お前のその考えは早計すぎる。その独断で南雲を死なせる気か？ 少しは落ち着いて物事を考える！」

「ぐつ…」

ノクティスは、流石に頭にきたようで1発やつたろうか。と考えたが、それよりも先に、滅多に怒鳴らないイグニスが声を荒らげた事により、勇者は何も言えなくなつた。小さくだけど、だの、南雲ばかり、だのとほざいているが、イグニスは聞く必要は無い、と判断した。

少しばかり雰囲気が悪くなつたが、アーデンの話が出たこのタイミングが好機、と踏んだ1人が、手を擧げる。

「あの、メルド団長、アーデン先生、愛ちゃん先生。少し言いたいことがあるんですけど、良いですか？」

優花は、昨日とは打つて変わつて氣合いの入つた目で、そう発言する。

「ああ、構わんぞ」

「ええ、俺？何かやつたつけ？」

「は、はい？何でしようか園部さん」

「皆も、もしかしたらそう思う人もいるかも知れないから聞いて欲しい」

やたらと重要な事を話す前の雰囲気を出し、皆の注目を集めれる。

「おっと、言うんだね。大丈夫。きっと上手くいくよ……！」

プロンプトの呟きに周りにいた生徒は、何が？と疑問の顔をする。やがて、優花が大きく、声をこの部屋一帯に響かせる。

「私は、戦争に参加せずに、出来ることを探したいです。だから、もし心の中で、同じ意見を持つてる人がいるなら、正直に声をあげてください！」

優花と愛子の想い

「それはどういう事かな？」

園部さん

まさに今、勇気をだして考えを伝えた優花に、これまた恒例行事の如く突つかかる勇者。プロンプトの後押しは、彼女にとつてどれほどまでに効果を発揮しているのかがわかる。昨日までの悩んでいた姿は一切感じられない。

「言葉通りよ。私は正直言つて、この戦争に参加する程の覚悟も何も無いし、責任だつてとれる自信が無い。

それに、本当は私のと同じ気持ちの人だつている筈よ。それを誰かさんが、無理矢理にでも潰したせいで、動けずにいるだけで」

何人かが心当たりがあるとばかりにびくりと体を跳ねさせる。ここまで来ればもう一押しだ、とばかりに、一気に畳み掛ける。

「いい？ 此処で私達が戦いを拒否しても、それは逃げじゃないと思うの。だつて、責任が取れないことを無理にでも進める方が、その方が余つ程カツコ悪い気がするわ」

愛子は、優花の演説にポカン、と口を開けていた。が、それは嬉しい誤算で、すぐに口の形をにつこりと笑いに変えた。

「だ、だが、この世界の人達はどうするんだ!? 皆で…」

「あなたは直ぐに、都合が悪くなるとこの世界の人達を引き合いに出すけど、それこそ脅しじゃないの?」

「は？」

「だつて、そうでしょ？ 本当は今にも人を殺す事を浮かべて、震える人だつて居るのに、口を開けばこの世界の人が、皆で力を合わせればつて。そんなの、一緒に戦わなければお前は卑怯者だつて言つてるような物じやない」

アーデンはこの言葉ににつこりとご満悦。あんだけ自分を悪者に仕立て上げたのに、まさかの勇者自身が脅してゐるじやないかと、そんな事を言われればアーデンの性格上、笑わずにはいられない。

「ち、違う！ 僕はそんな事…！ そ、そうだ！ アーデン！ お前だな！ まさかお前が園部さんを洗脳して、こんな事を言わせてるんだ

な！」

「ええ？　また俺？　嫌んなつちやうなあ。」

「惚けるな!!　皆を教え導く教師でありながら、なんて事をする!!」

「なんて事をしてるのはあんたでしようが!!」

勇者は怯むしか無かつた。自分はあれだけ園部さんを考えているつもりなのに、何故か悪いハズのアーデンではなく、自分に矛先が向けられてるのだから。

「アンタこそ何なのよ！　その教え導く教師の4人の意見を全く聞かずに、勝手に話を進めたくせに！愛ちゃんがどれだけ自分を責めたか分かってるの!?　こんな時ばっかり理想を口にするの止めてよ！お願いだからアンタは黙つてて！」

「うつ…」

完全に勇者は勢いを失った。だが、それでも反論しようと必死に言葉を考えていると、これまで何も言わなかつた零が、彼に向かつて意見を述べ始めた。

「光輝。もういいでしよう。園部さんの意見を通してあげても。：本當は貴方が決めるべき立場ではないけれどね」

「し、零。き、君はどうなんだ？　俺と一緒に、世界を救つてくれるだろ？」

「全く…また論点がズレてるわよ。

私は、そんな理由じやないわ。ただ、ある理由の為に強くなりたいだけよ。今のままだと、心も身体も弱すぎるから。それだけ」

自分と同じ様に考えてくれてると思つていた零にまで口を挟まれ、今度こそ、勇者は沈黙した。と言うよりも、これ以上余計な口を挟むならタダじや置かねえ、といつたグラディオラスの鋭い視線に気圧されたのであるので、させられたといつた方が良いだろう。

やがて、優花の言葉に背中を押された何人かが、手を上げる。

その人物は、宮崎奈々、菅原妙子の2名だった。彼女達も、愛子のあの状態を見て、自分達は果たしてこのまま行動を進めても良いのだろうか、と思い返し、このような決断をしたのだつた。

「そう、取り敢えずは2人：か。今まがいいつて言うなら私は何

も言わない。けれど、まだ潔く言いたい事を言えないままにしているなら、包み隠さずに申し出て欲しい」

愛子も、自分で中で言いたい事が纏まつた様で、優花に続いて自分の想いを語る。

「言いたい事は殆ど園部さんが言つてくれましたけど、私からもお願ひです。多分、私が何を言つても、意見は変わらない人達もいるかもしません。」

ですが、後からでもこの戦争に参加したくない、と考え始めたら、迷わず先生を頼つてください。私は生徒を見捨てるなんてことは絶対にしません」

結局これ以上動く人は現れなかつたが、この時の愛子の発言は、後にある生徒達の心に届く事になるのだが、この時はまだ何も知らずにいた。

「あー、すっかり討論になつてしまつたが、最後にお前さんたちのプレートも見せてもらつて構わないか?」

「ああ、その点についてこちらも聞きたいことがある」

一悶着が着いた後、ノクティス達はプレートの異常についてをメルドに相談したが、結局分からぬで終わつてしまい、自分達で少しづつ解明していくしか道は無くなつてしまつた。

それからは、トントン拍子で日が過ぎていった。参加組は、教官の教えを参考に訓練をハキハキとこなし、非参加の3人と愛子は、それぞれ王国で何やら情報収集や、人助け等を行っているようだつた。

また、イグニスと愛子はそれぞれの日程が終了した後、情報交換や、現時点のそれぞれの生徒達の様子について話していた。参加側の生徒達の話を聞く度に、胸を痛める様な表情を浮かべる愛子を、イグニスは決して見放すことなく、再び元気が戻るまで励ましながら話し合つた。

ある日の図書館にて、訓練の休憩時間を利用しハジメは、この世界の事や、鍊成師について、魔物の特徴など、様々な事についての知識を身につけようとしていた。

そんな様子に何も知らない人達は批判的な視線を浴びせるものもいたが、決まって特定の人物が登場すると、顔を引き攣りながら知らないふりをする。その人物とは、4人の事だが。

「よ、ハジメ。熱心だな」

「あ、先輩方。お疲れ様です」

「この本の量は…。すげえな南雲。学校でのやる気のなさはどこに行つたんだ?」

「いやあ、あの時とは状況が違いますから。少しでも知識を身に付けておけば、何かあつた時に役に立てると思ったので」

感心したようにハジメを褒めたたえ、

「誰かさんも同じ位になつてくれねえもんかねえ。な？ ノクト」
「うつせえな。最低限はやつてんだろうが」

同時に訓練中も無気力に行う事が多いノクトへの皮肉を言い出した。それをよそ目に、ここに来た本題を話し始めるイグニス。

「それで、南雲。頼んでいた物の状況はどうだ？」

「あ、はい。大体の形は出来上がつてます。後は、実戦で使えるように調節すれば完成しますよ。プロンプト先輩にも手伝つていただいたお陰で、予定よりも速いですね」

「いやあ、俺とハジメが力を合わせればそのうちミサイルでも作れんじやないかなつて思つたよ！ あ、調子乗つたわゴメン」

4人は、ハジメに武器の生成をお願いしていた。彼等は、訓練時はそれ用の武器を使って行つているが、イマイチ馴染まず、このまま戦闘に向かつても上手く立ち回れるか不安を感じていたのだった。

そこで、鍊成師であるハジメに、自分達の武器を頼みに来たのであつた。流石に1人だけに任せるのはと、技能に武器精製特化も言うものが備わっていたプロンプトを助手に入れ、なるべく性能の良い物を作ろうとしていた。

「それはそうと皆さん、良いんですか？ 貴重な休憩時間を潰してまで

⋮

「あ？ 何言つてんだよ。後輩の為にその休憩時間を使って何が悪いんだよ」

「そうそう、俺達がここに来たいからここに來てるんだよ。折角だから一緒に情報収集しない？ 1人よりも皆でやつた方が捲ると思うけど」

「…本当にいつもお世話になつてます…」

それから、次の訓練時間が来るまで、5人で役割分担をしながら、情報を集めていた。

そして、更に何日かが経過したある日。ハジメはまた休憩時間を活用して、情報収集の為に図書館へと向かっている道中、日頃の鬱憤を晴らすようにタイミングを見計らつて現れた檜山達が、行く先を阻もうと立ち塞がつた。

「よお、南雲、どこ行く気?」

「まさか、ヲタクは1人寂しくエロ小説でも読み漁りに行くんですか!?

「うわ、キモー。いくら発散出来ないからってそれはないわー」

「せめて休憩時間くらい俺らみたいに有効活用しててさねえと。なあ?
?」

また絡まれるのか、と呆れてため息をつきながら、素通りしようと早歩きで横を通りうとする。

「おいおい、無視すんじゃねえ、よ!」

「グツ!!」

思い切り横から蹴りを入れられ、その場にうずくまるハジメ。何が可笑しいのか、気持ち悪い笑い声を浮かべながら嘲笑う彼等。

「うわ弱ー! 弱すぎて話にならねえんだけどー!」

「なあ、厄介なノクティス達もいねえし、ここで南雲に稽古つけてやろうぜ!」

「良いじやねえか! お優しい俺達が直々に教えてやれるんだ、感謝しろよー?」

「じゃあ、やろうぜ!」

それをきっかけに、ハジメをリンチにしようとそれぞれが攻撃や魔

法の詠唱を始める。

が、それも直前に彼らに地獄が訪れる。

「おい、何やつてんだ？」

いつものように図書館に居るであろうハジメの所に行こうとしたノクティス達が、運良くその場に現れたお陰で、ハジメはそれ以上の攻撃を受けることが無かつた。

「ゲエ!? ノクティス先輩!?

「それだけじやねえ、プロンプト先輩とグラディオラス先生とイグニス先生もいやがる！」

「ねえ、俺達が居ることの事実確認なんてどうでもいいよ。何をしてるのって聞いてるんだけど？」

「イグニス。南雲にポーションを使つてやれ」

「了解した。南雲、口を開けれるか？」

イグニスはすぐさま技能、ポーションボックスにより何処からか取り出した謎の形の飲料水を取り出し、ハジメの口へと注ぐ。すると、ハジメを襲つていた蹴りによる痛みは自然と引いていき、すっかり回復した。

「あ、ありがとうございます。イグニス先生」

「話は後だ。とりあえず下がつていろ」

イグニスに再び軽く礼を言い、彼らの迷惑にならない位のところまで下がる。

「い、いや勘違いしないで欲しいんですよ。俺達は南雲に特訓させてあげようとしただけで…」

「特訓？ にしては南雲がうずくまつているにも関わらず多勢で攻撃しようとしてたじやねえか。あれのどこが特訓だと言いやがる？」

言ひ逃れ出来なくなつた檜山達は、苦し紛れに逆ギレする。

「い、いちいちうるせえんだよ!! 事ある事に俺達の邪魔しやがつて !! お前らやつちまえ!! どうせ強くなつた俺達には先生だろうと適わねえだろ!!」

そう言つて4人は、ノクティス達を捻り潰そと襲いかかつてきた。だが、彼等は物怖じすらせ、プロンプトですら怯えた様子を見

せない。余程に頭にきているようだ。

「流石にもうキレたわ。消してやる…!!」

「俺の友達に手を出した事、後悔させてやるよ…!!」

「テメエら見てえなガキは本当に世話がやける…。来いよ。その腐つた根性ぶつ壊してやるからよお！」

「本来なら貴様らの様な奴等は相手するに値しないが、今回ばかりは例外だ。今晚の料理のメインディッシュにしてやろう…!!」

ここで、檜山達の血祭りレースが開催されたのだった。

やがて、騒ぎを聞きつけた香織達が、その場へと血相を変えて走つてきた。

「何やつてるの!?

香織達が到着すると、そこはもう悲惨な状態であった。

暴走を起こした檜山達が、傷一つ付けること出来ずにノクティス達に完膚無きまでに叩きのめされ、地に伏せていた。

「南雲くん!? 何があつたの!?

香織や零はすぐ様、檜山達が原因で事が起こつたという事を理解し、近くにいたハジメに説明を求める。そして起こつた事を全て話し終えると、檜山達を鋭い眼光で睨みつけた。が、空気を読まない1人が、全く別の人物を責め立てる。

「先生方! どういうつもりですか!! 檜山達をここまで痛めつける

なんて！」

「あ？ 何言つてやがんだテメエ。南雲の話を聞いてなかつたのかよ。先に喧嘩を売つてきたのはそつちだぞ？」

「だとしても、教師や先輩である貴方方が暴力でねじ伏せるなんてどうかしているにも程がある！」

明らかに場違いな意見だつた。確かに、暴力はいけないものだし、教師が生徒に奮う事などあれば体罰となる。

だが、そもそもそれはこの世界では通用など全くしないのである事を勇者は理解などしていなかつた。しかも、彼等は身にかかる火の粉を振り落としたに過ぎないと言うのに。

「いい加減にしなよ。何度君は俺達を悪者にすれば気が済むわけ？ もう少しその頭で状況を上手く整理しようと考えられなかつたの？」

俺達よりも先に手を出したのはあつち。その前にハジメにイチャモンをつけて襲いかかつたのもあつちだよ？」

「それは…。檜山達は南雲をどうにかしようとしていたんだろう。訓練すら真面目に行わぬ、図書館にばかり籠つて読書に耽つているそうじやないか。休みの時間であつても強くなるために訓練をするべきなのに、南雲は努力すらせずに急げてばかりいるから、それを檜山達は直そうとしていたのかもしれないでしょう？ それを止める方が可笑しいですよ！」

「ちよつと光輝！ それはあんまりにもじや…」

「霁は黙つていってくれ！ 僕は今南雲達と…」

止めに入つた霁を振り払い、また説教に入ろうとした勇者だつたが、それ以降は続かなかつた。ノクティスが、とても目に捕えることが出来ない速さで勇者の顔面をぶん殴つたからである。

そのまま彼はゴロゴロとすつ飛んでいき、壁にぶつかつた。

「な、何をするんですかノクティス先輩…」

「黙れ」

批判すらあげれなかつた。それは周りも同じで、ノクティスの発言以降何故か誰も口を開けることすら出来なくなつていた。まるで、王の様な威厳に…。

「全てを知った様な素振りでハジメを語つてんじやねえよ。サボつて
いる？ 急け？ ふざけんな。ハジメはな、俺の数倍努力してんだよ
!!」

『認めちやつたじやねえか!!』

思わずの自虐ネタにツッコミを入れてしまう仲間御一行。
「いいか？お前はまた忘れちまつてる様だから、もう1回説明してや
る。

ハジメは、俺達が戦いやすい様に、後ろから支えろつてメルド団長
にも言われてた筈だ。だから、ハジメが無理して前に出る必要は
ねえ

「な、何を言つて…」

「それにハジメは、現時点で判明している魔物の弱点とか、様々な事を
調べてくれてんだ。これを努力と言わず、なんて言えばいいんだよ？
悪いけど、俺はお前よりも、何を言われても自分のやるべき事を見
つけて、胸張つて生きているハジメの方が何倍も評価されるべきだと
思う」

「なあ!?」

「おいノクト。その辺にしておけ。明らかにオーバーキルだ」

止めると同時に、言いたいことを全て言いきつたのか、ノクティス
は勇者に背を向け、ハジメを連れて図書館へと向かった。

「お前にはハジメを責める資格はねえ。悔しいなら責めるよりもその
考え方を改めやがれ」

最後にそう言い放ち、真っ直ぐ歩み始めた。

「…クッ!!」

悔しさで何も言えないのか、納得がいかないのか、勇者は不機嫌な
足取りで何処かへ向かつてしまつた。残された3人は、先程のノク
ティスについて疑問を浮かべていた。

「あれは…ヤベえなんて物じやなかつたな」

「ええ。私も、立つているのがやつとなくらいだつた」

「怖かつたあ…。イグニス先生達も少し辛そうな顔してたもんね」

実はあれは口を閉ざせるだけには留まらず、怯んでその場にへた

りこんでしまう程の圧を感じたのだ。

今その当人は、ハジメと共に気楽そうに喋りながら情報収集しているのだが。

だが、異変はそれだけではなかつた。

先程のノクティスの謎の圧が発動すると同時に、一瞬、グラディオラス達3人はありもしない記憶が頭の中を駆け巡つた。

謎の化け物を相手に死闘する自分達、階段を登つていく一人の男を死守すべくなぎ倒して行く自分達。

役目を終え、眠つた様に椅子に座る王、ノクティスを悲壮な顔付きで見つめることしか出来ない自分達。

どれもあつた事の無い記憶の筈なのに、本当にそれを見届けたような感覚がしてしまう自分達を押さえ付け、ハジメを気遣いながら歩いて行くノクティスをすぐ様追つていくのだつた。

王の復活は近い…。

友の誓い

「にしてもさ、急すぎない？ いきなり明日つて言われても困るでしょー」

「仕方ねえだろ。言われちまつたもんはどうしようもねえし」

何時もと同じ様に、また訓練終わりの夜がやつてきた。

それぞれ疲れきった身体を休め、不安と新しい事への期待を込めて早くに眠りにつく者もいたが、某4人はその中の一人の部屋に集まり、明日に向けての会議を始めていた。

というのも、今回の訓練終了後そのすぐ後に、メルドから「明日から自主訓練の一環として、オルクス大迷宮へと遠征に向かう。まあ、明日頑張れるだけの気合いは補充しておけってことだな！ てことで、今日はゆつくり休めよ！」

と言われたことをきっかけに、この4人はこの様な集まりをしなければならなくなつたわけなのだ。

何故か。それはもう、一部を除く生徒達を思い浮かべればすぐに分かるであろう。

「ね、イグニスはどうだつた。やつぱりここに集まる前、他の子達の様子とか気になつたでしょ」

「…ああ。皆が皆、特に天之河を中心に浮かれている様子だつたな。それ以外は不安で押しつぶされそうな表情だつたりと、喝を入れたくなる程に好ましくは無かつたな」

簡単な話だ。冷静に判断して対処出来る者が自分達位しかいないのである。

勿論、自分達の全てを過信している訳では無い。

只、周りが不安定な状況の中、判断を全て彼らに任せ、

ただ従つて動くのには余りにも危険過ぎる。

今の生徒達の様子は、丸腰で火の海へと飛び込む阿呆のよう、飛ぶ羽をなくした鷹のようだと、危なつかしく、又、脆く感じたのだ。

「どうする？ 僕達で化物共を薙ぎ払つて危険から遠ざけるか？」

「いや、それは得策とは言えない。過度な突撃は命の危険もある。そ

れに、これは訓練だとメルド団長殿が言つた筈だ。ある程度獲物を残しておかなければ、あの子達の成長にもならない」「じゃあ、いつその事後方で待機とか？」

「そりやお前の願望だろうが！」

「うっさいな！　怖いものは怖いんだよ！」

「じゃ、大剣使いの1番強い俺が難ぎ払つてくるつてのはどうよ」「人数がお前だけになつただけで、根本的な案は先程と変わつていないだろう。そもそも、俊敏性の低い上に大剣で立ち回ると言うのは、囮まれて袋叩きにされても文句は言えな」

「ああ分かつた俺が悪かつた！　いちいち言い過ぎだらうがお前は！　気にすること刺してきやがつて！」

「やつぱりグラディオは脳筋なんだねえ」

「ああ？　お前のひ弱思考よりマシだらうが」

「慎重つて言つてくれないかなあ!?　脳筋ゴリラより柔らかい思考回路ですか！」

「誰がゴリラだヒヨコ頭！」

「うっさいゴーリラ！」

「…頼むから、そういう会話は、他所でやつてくれ…。恥ずかしい…」

「あー、えつと、気にすんなイグニス。俺らではいつも通りの展開だろ」

「それはそれで胃が持たないんだ。お前に分かるか？」

1番まともだという理由で騒ぎの原因全て押し付けられた時の俺の気持ちが…！」

「…あー、すまん。ちょっと何も言えねーわ」

しかし、後々になつてくると、会議とは名ばかりのただの提案会になつてしまつているのは、気とめない方向で行く事を推奨する。この会話だけを聞くと、少し真面目さが感じられないが、本人たちは至つて真剣である。誤解はしないで欲しい。多分。

「んじや、四方に散らばつて、各場所の応戦を行つてのはどうよ」

そんな締まらない雰囲気の中、ノクティスが仕切り直しだとばかりに注目を集め、この様な案を出した。

「四方、か。だがそれだと、明らかに戦力にばらつきが出る。それに、もし1人でも苦戦した場合、援護に向かうのにもかなりの労力が必要ではないか？」

「ああ。だからこそ、密かに練習してきたシフトを使う」

『シフト?』

聞きなれない単語に、3人はそのまま聞き返す。

「ほら、俺の技能の所にあつたやつだよ。何だかこれだけ異様に存在感があつたから、何よりも早く習得しようとしたら出来るようになつた」

そう言うと、ノクティスは立ち上がり、どこからが取り出した短剣を持った。

次から次へと謎が増えていく様子に、プロンプト達は戸惑うばかりであつたが、次の途端に、血相を変え始めた。

ノクティスが、短剣を前に飛ばしたのである。

「ちょ！ ノクトオ!？」

「お前、何やつて…ん？」

絶叫するプロンプトをよそに、目の前では、青い残像を残した空間と、いつの間にか短剣を拾い、新しいおもちゃを買い与えられた子供のような表情をしたノクティスが、こちらの反応を伺おうとしている光景があつた。

「…ノクト、今のそれはどうやつたんだ？」

「ん？まー、簡単に言えば、瞬間移動、的なやつか？」

武器を投げて、その方向に自分も素早く移動出来る、みたいなやつなんだわ。で、どうよ、かつけえだろ!？」

「あー、うん。カッコイイんだけど、何だろう。素直に喜べない」

「ハア？ 何でだよ。そこは素直に褒めたままで終わらしつけよ」

「…いやあ、なんていうかねえ。ちょっと今のやつがあんまり俺達には歓迎出来ないって言うか…」

「…お前ら、大丈夫か？」

ノクティスは不審と不満を抱えた。自分の新しく習得した力を披露したそのすぐ後に、仲間達の様子が急によそよそしくなつた事が、

今彼には凄く不快な反応であった。

彼の心境を無視するかのように、イグニスは自分達の疑問をぶつけ
るかの如く、ノクティスに詰めより、質問を投げた。

「ノクト。そのシフトという能力なんだが、本当に今初めて使つたも
のなのか？」

「は？ んなもん嘘ついてどーすんだよ。ここに来て初めて使つた力

だよ。：まあ、でも、この力を使えば、確実に動きやすくなつてい
いと思うんだけどな。俺は」

「いや、その、ノクト。その力を使うのは、やめにしないか？」

ノクティスは更に奇怪だとばかりに表情を歪ませる。

段々と謎に焦り始めている3人を見て、本氣で医者に見てもらつた
方がいいのではないかと考え始めているようだ。

「は？ お前らマジでどうした？ この力があるとじやないとじや、
全然違うと思うんだが」

「いいから使わないでくれ!!」

「…っ？ イグニス？」

体がピタリと止まる感覚がした。今のノクティスは、今自分の前で
大声を上げた彼の顔を直視することしか出来なかつた。

それ程までに今のイグニスの顔は、普段の冷静さが見当たらず、暴
走しかねない程に必死な様子だつたからである。

「つ、すまない。少し、訓練の疲れと明日の事で、少し気が動転してい
たようだ」

咄嗟に今の発言を取り消そうと、誤魔化しを行つてゐる事など分
かつてしまつたが、敢えてノクティスは声を喉の奥へとしまい込ん
だ。

何故だか分からぬが、今それを聞けば、イグニスが更に追い詰め
られる様な気がしたからだ。

だからといって、他の2人に尋ねるという氣にもなりはしなかつ
た。同じ結果になる事が目に見えたからだ。

何故こんなにも、彼等が焦つてゐるか。

それは以前、ノクティスが天之河に對して怒りをあらわにした時、王のような厳格な威圧を放つた時に原因がある。

ノクティスがそれを發揮している時、同時に彼等の頭に、起こつたことの無いはずの出来事が、一瞬のうちに次々と流れ込んでくる現象が起きた。

その中に、先程のシフト、と呼ばれる能力を駆使し、敵だと思われるモンスター達を圧倒しているノクティスの場面もはつきりと映し出されていた。

本来ならば、偶に勝手に頭に浮かんでくる様なものだ。とそこまで気にする事はないのだが、何故かこの出来事だけは、頭の中から出す事が出来なかつたのだ。

頭をよぎる度に、何故かは分からぬが、ノクティスがそのまま何処かに消えてしまうような気がして。

映像の一つ一つが、とても印象深く、儂く、そして悲しく。彼等の記憶へと刻み込まれたのだ。

だからこそ、彼等はノクティスに、その一つであるシフトを使って欲しくなかつたのである。

無論、そんな事をノクティス本人に打ち明けられる筈もない。

これがきっかけで、どうにかなつた、等と想像したくもない出来事が実現してしまつたら、と。

「…悪い、イグニス。その頼みは聞けねえ」

「…ノクト…！」

「お前らが何を思つたか、なんて分からねえさ。何で止めてくんのかも意味不明だし。

けどよ、お前らが束で、しかもイグニスがこんなになつてまで止めてくるつてことは、俺にこの力を使つて欲しくないつて事なんだろうなつてのは分かる

「…なら、そのまま使わないで良いじゃねえか」

「ばーか。そんなんでアイツらの事を死なせちまつたら意味ねーだろうが」

そこまでノクティスが言うと、急に体が浮くような感覚がして、直

ぐに胸ぐらを掴まれたのだと理解した。

それも、今1番混乱しているであろう、イグニスが、だ。

「それでも！俺達はお前にあの力を使って欲しくないんだ！」

…決められた使命だつたとしても、もうあんな思いをするのは!!」

「…決められた使命？」

咄嗟に出てきた言葉を思い返し、イグニスは自分が今、如何にされている発言をしたかを思い出す。

まるで、自分のようで自分ではない誰かが、自分の体を操つて言葉が出てきた様に、するり、と彼の口から身に覚えのない言葉が出てきていた。

「つ？俺は何を…」

掴んでいる手を離し、ノクティスを楽な様にする。

彼が怒っている様子はなく、しつかりとイグニスの目を見たまま、口を開いた。

「…何を言つてるのかはさっぱりだ。でも、俺の事を心配してくれてるつてのは分かるわ。

…サンキュな。イグニス」

「…」

「でもよ、お前らが訳わからんねえ事言つてるのと同じでよ。何故だか知らないけど、使える力を全て使つて、今度こそ俺の手でつて、この間からそう思うようになつてきてるんだよな。

自分に力が無かつたから、とか、

もつと早く強くなられないと、とか、

最近はずつと、気が付くと頭の中でそればっかり考えちまつてさ。主に訓練の時

「…そうか。力の事ではないが、お前も…」

「…何でかは知らねえさ。そんな出来事あつたつけとしか思えねえし。けど、何かしら意味があんじやねえかつて思うんだわ。もしかしたら、前世でやり遂げられなかつたことでもあんじやねえのか、とかな。

…お前らに辛い思いをさせてるつてのは理解してる。

けど、ここで俺が使える力を使わなかつたら、きつとこの頭に浮かぶ事が現実になるんじやねえかつて思うと、俺は、これを使わずに思えられねえ」

「…ノクト…」

少し、部屋に沈黙が流れる。外から吹き付ける風が伝わるほどに静かで、ノクティス達の決断の行く末を見守つているかのようにも思えた。

「…はあ…。相変わらずノクトは自分勝手だよねえ。こつちの気持ちも少しほは受け取つてくんないかなあ」

「うつせえな。カツコつけてたんだから素直に、はいかいいえで終わりにしてくれよ」

完全に、とは言わないが、少しだけ緊張が解け、いつものおどけた雰囲気が戻つてきていた。

しかし、イグニスは未だに険しい顔のままで、そのおどけた中に混じることは出来なかつた。

どうやら、とても根強くトラウマになつてしまつているのは、イグニスの様だ。

「…なあ、覚えてるか？俺達が4人で山登りに行つた時の事」

「あれさあ、ほんとにヒヤヒヤしたからね！？ 俺が死にかけたわ！」

それは、転移前の出来事。ある日の夏に山登りに出かけた4人は、頂上の手前のところの険しい坂道を登つっていた時の事。よく周りを見すに足を前に運んでいたノクティスが、ストレスの所で体制を崩し、絶体絶命な状況になつたことがあつたのだ。

「あの後不注意だつたお前を3人でこれでもかと言うほど怒鳴り散らしたな。全く、俺も心臓が縮んだぜ」

「悪かつたつての…。でもよ、あん時イグニスが真っ先に手を出して、俺の事を引つ張り上げてくれようとしてくれてたよな」

「あん時のイグニスカツコよかつたよねー。頭脳だけじゃない、アニキみたいな感じだつたし！」

「…それは俺がひ弱だと言いたいのか？」

「痛い痛い痛い!! こめかみをグリグリしないでえアダダダダダ

ダダダダダダ!!

プロンプトの何気ない一言に、頭にきた様子のイグニスがオカンの一撃をくらわす。

プロンプトはここまでで2人にボコボコにされている。

ドンマイというか、自業自得というか。

「…もし、まだ俺のことが心配ならよ。

…手を差し伸べてくれねえかな。あの時みたいによ」

「…手を…」

「そうだね。ノクトは1人で突っ走る癖があるから、しつかりと手綱を握つておいた方がいいかもね！」

「おい、俺はペツトか!?」

「まあ、危ない事仕出かしそうになつたら、血祭りにでもしてやろうか」

「お前がやるとシャレになんねえから止めろ！」

…安心しろよ。お前らが手を離さねえ限り、俺はお前らを置いて消えたりしねえよ

「ノクト…」

分かつた。お前を見失わないように、俺はお前の手を離さずに、お前を救うことを誓おう

「ああ。よろしく頼むな」

この後、ノクティスの四方に分散の案で決まり、

明日に向けて更に4人の絆を固くし、それぞれ自分の疲れを癒すために、それぞれの部屋へと戻つて言つた。

会議が終わった後のイグニスは、そのまま自分の部屋へと帰った。部屋の前で立ち止まり、そつと扉を2回叩く。

そうすると、可愛らしい返事が聞こえ、トトトトと足音が近づいてくる。

やがて扉が開かれると、そこには、イグニスの妻（非公認）の愛子が姿を現した。

「あ、イグニス先生、夜遅くまでどこに行つてたんですか？　あまり夜更かしはメツ！　ですよ！」

「すまない、愛子先生。少し、明日の事でノクト達と話し込んでしまつて。」

すらっと話が進んでいるが、実はこの2人、同室であり、もうこの光景も何度目なのかと言うくらいである。

話から察した愛子は、直ぐにイグニスを中に入れ、

一息を着くために椅子へと座らせた。

「すみません。とんだ勘違いな事をしてしまつて…」「いや、誰だつてこんな遅くに帰つてくれれば心配する。俺の方こそ、すまない」

お互いがお互いに律儀である為、こういう風になると1歩も譲らない、という、真面目同士のイベントのようなものが発生した。

まあ、いつかどちらかが諦めて、話を変えるのだが。

「あの、先生。少し、お願ひがあるのでですが」

「どうした？愛子先生」

「…もう…」

「…？」

「…」

「…君だつて俺の事を先生と呼ぶだろう」

「わ、私はまだ良いんです!! その、多分言つたら、心臓が持たないの
で／＼／＼」

「…はあ、我儘過ぎるのもどうかと思うが?」

「わ、私のことはいいので、名前で呼んでください…！」

「…」

「…」

「…愛子」

「…！」

「…保てていないので…」

我儘発言をした挙句、願いを叶えてもらつても悶絶する、お茶目と
いうか、天然というか。

それとも、イグニスという男の前だからできる行動なのか。
「しょ、しょれより、本題に戻りましょう…」

「…そうだな。それで、話とは?」

愛子は一旦息を吸い直し、そして、イグニスの目をじっと見たまま、
口を開く。

「イグニス先生。明日、オルクス大迷宮へと遠征に行くと言う話を聞
きました。それも、園部さん達以外の全員が」

「…ああ」

「知つての通り、私は、教師です。生徒達が傷付く事や、犠牲になる事
は、耐えられません。

…私、畠山愛子という教師としてのお願いです。

どうか、あの子達を危険から守つて頂けませんか?」

「…それは勿論だ。あの子達の誰かがもしも、ということがならない
ように、死力を尽くそう」

そう答えると、愛子は少し満足そうな表情をした後、
イグニスに近づき、そのままひしつと抱きしめた。

「…ですが、私は、畠山愛子という女としては、貴方を大迷宮には行かせたくないかもしれません。本當なら、貴方をここで引き留めて、一緒に逃げたいです」

「…！愛子…」

「ですが、それは私の我儘。それは生徒達を見捨ててくださいと言つているようなもの。でも、先生としての願いを突き通せば、貴方を見捨てるという決断になつてしまふ」

「…いや、それは…」

「私は、とても悔しいです…。自分の手では生徒は愚か、貴方までも助ける事が出来ないなんて…」

愛子の震える声を聞きながら、イグニスは無意識に、先程の自分と愛子を照らし合わせていた。

ノクティスの意見を尊重したい自分と、危険な目にあつて欲しくない自分。

それと同じように、彼女も同じように苦しんでいたのだと。

「…でも、今まで貴方は、私に寄り添つてくれた。

私が教師としてどうすればいいか分からぬ時も、道を照らしてくれた。生徒が事故に巻き込まれそうになつて、貴方が助けに行つた時も、どちらも無事に帰つてきてくれた…。だから…」

一度、愛子の身体がブルッと震える。きっと、色々な事をはきだすのを我慢し、イグニスを送り出す覚悟を決めたのだろう。

「私は、あなたを信じます。だから、最後には、絶対無事に、帰つてきて下さいね！」

その言葉を聞くと、イグニスは愛子を抱き返した。

その抱擁には、約束する、という意味が込められていた。

大迷宮オルクス

不安渦巻く月下も過ぎ去り、時は翌日。生徒一行はついに目的地であるオルクス大迷宮へとつながる入口付近の広場まで来ていた。

完全武装で来ている彼等を他所に、周辺の様子はやけに明るげで、まあ察しはつくだろうが1部の生徒達はどことなく居心地の悪さを感じていた。

いや、むしろこのような状況でズカズカと迷宮に入つていけるというのがどうかしていると言った方がいいのかもしない。

「…にしても俺が先頭とか無いでしょお…」

そしてここにも周りの様子に気付かないほどに参つてゐる人が一人。プロンプトである。

昨夜、ノクティスの意見が通り、四方にそれぞれ1人ずつ派遣され、周りの援護をする事になつてゐる。

とはいゝ、実際はそんなに4間隔遠い訳では無いのだが、何時何処から狙われるか分からぬ為、この体制で行く事になつたのだ。

「ボヤいたつて仕方ないつスよ。先生方曰く、プロンプト先輩が加わる事で先頭の負傷リスクがなんちやらかんちやらくつて事らしいですし」

「いやー、そういう問題じやないんだよ坂上君。確かに武器的に先頭ら辺には欠かせなくなつてくるけどさあ…。フツーそこは先生じやないの？」

場を有利にする為には得策な考案であるが、司令塔が前では無いことに不満を持つてゐるプロンプトだが、グラディオラスに矛先を向ける素振りを見せると零に冷酷な眼差しで見られる為、当たり障りがないようにボヤいていた。

ただ、何も先頭が嫌な理由がそれだけならまだ良かつたのかもしれない。彼はもう一つだけ、

「少しほ反省したのか？ 皆をあんなに怯えさせた事に対して」「おつとお、お口の態度がなつてないなあ。そんなんじや、帰つた時に不良扱いされちやうんじやない？」

「話を逸らすな！　お前など教師でもなんでもない、ただの人殺しだ！」

「酷いなあ。何時俺が君達を犠牲にしたの？　人となりと言動だけで殺人鬼扱いしないで欲しいなあ。てか、君こそ論点がズレてるような気がしてならないんだけど…」

プロンプトの前では、この世界に来て険悪の仲になつた勇者とアーデンが揉め合つていた。

別にただ争つているだけなら五月蠅いだけなので放つておけばいい。

ただ、せめて状況を考えて欲しい。ここは何処だ？　今は何をしに行つている？　出発前に一悶着して置けばすむものを懃々ここにまで来てやるな。と、口には出さないものの、周りに引かれるくらいに顔に出てきてしまつっていた。

「プロンプト先輩も！　グラディオラス先生方が不真面目な貴方を特別評価してまで危険な位置に貴方をおいたのですから、もつと取り組む姿勢を考えたらどうなのですか！」

（そんでの勇者くんもさあ、たまに俺にも矛先向けるの止めてくれないかなあ。恥ずかしいったらありやしないよ。ホホホ…）

どういう訳か、無理矢理先頭にされた事を勇者（笑）は、

プロンプトは先生のご厚意によつて先頭に組み込まれたのだから、不真面目な態度など許されるべきではないと解釈しているようで、何かとプロンプトの顔を目に入れては癪癪を起こして來ていた。

その様子を感じさせる顔にさせている1つの要因として自分が入つている事など、全く分かつていなかつた。

酷く言えば、自分こそ迷惑をかけているんだという事には、触れることもなかつたのであつた。

その様子にプロンプトは更に顔を沈ませると、番犬の如く吠えてくる。これに零は呆れを通り越して怒りが込み上げており、拳をわなわなと震わせ、勇者の親友である龍太郎できえ顔が死んでいた。

「お前達、いい加減にしろ。遠征訓練とはいえ、気を抜けば命を失いかねない場所だ。必要以上の言い合いは程々にしておけ！」

やがて、先程までは無視を続けていたメルドも痺れを切らし、強制的に黙らせる事でこのいざこざは幕を閉じた。ちなみにアーデンは元々煽る事だけしか目的に無いため、満足したのか勇者から距離を取りつていった。

漸く静かになつた所でふと後ろを振り返ると、後ろで苦笑いを浮かべながら手を縦に振るノクティスと、左(プロンプトから見ると右)には最高に殴りたくなる顔をしたグラディオラス、右にはやや申し訳なさげな顔で見るイグニスがいた。

(うわあすっごいなあ。その生意気なお顔に回し蹴りを喰らわしてやりたい。)

拠点に帰つたら、イグニス以外を清々しい程までにいたぶり尽くしてやることを決意したプロンプトは、前からかかる出発の声を聞き、前へと歩み始めた。

迷宮に入り暫く経つたが、最初から今現在まで生徒達の目に入つてくるのは、何かに照らされて緑色に輝く道中だつた。この迷宮は緑光石と呼ばれるその名の通りの鉱物が採れ、その光が漏れてこのような

光景になつてゐるのだと言う。

最初の内は綺麗だ、と感じていたが、ずつとこれを見続けていると目が疲れてくる。辺りを見渡せば、目をシバシバと開け閉じを繰り返している生徒がちらほらいた。

異常をきたす生徒が出る前に、この空間が終わればと考えた。

その願いが通じたのか、やがてドーム型の開けた空間に出た。ゲーム風にいえば、何か起こりそうな部屋、のようである。

それもまた予言の如く、所々に空いている隙間から、毛玉のような物体が、わさわさと湧き出てきており、

これにはプロンプト、血の気が引いてしまった。

想像して欲しい。いきなり無数の穴から、何かが一気に出でてくるなんて状況、おぞましい事この上がないだろう。例えは：いや、止めておこう。これで気分を害してしまつたら申し訳が立たない。

「よし、丁度いいのが出て來たな。あれはラットマンと言う魔物でな、すばしつこい奴だが、それに慣れれば大した奴らではない。今のお前らには肩慣らし程度だろうがな！ よし、まずは光輝達が相手をとれ！ 他は下がつて待機だ！ だが気を抜くなよ、後ろに回つてきた場合を考えて備えておけ！」

メルドにラットマンと紹介された魔物は、ネズミの擬人化と言つたような姿形をしており、それプラスボディビルダーと説明すれば、大体どんな奴なのかは想像出来るだろう。

可愛くもなければ、カツコイイとも言い難い、なんともむさ苦しい容姿に、流石の光輝ですら苦笑いである。

一方、零に至つてはグラディオラスとこの魔物を交互に見比べ、「先生の方が男らしいわ。鍛え方がなつてないわね」

などと言ひ残し見下す様な目を向けた。

初見の魔物が霞んで見えるとか、どんな鍛え方をしたらそうなる、とツッコめる者は誰もいなかつた。

「ん、んー…。なんとも始めにくいなあ…。…まあでも、出てきたからにはやるしかないか！」

「ウツス。後ろは任せましたよ、先輩！」

本来リーダーがかけるべきである戦闘の合図らしき掛け声を、無意識の内にやつてしまつたプロンプトを睨む実際の勇者がいたが、今は奴らを片付けるのが先だ、と、他の何名かを引き連れてラットマンへと突撃をかました。

先手を打つたのは勇者だった。勇者の剣だと自信を持つて言える程だと分かる剣を手に、纏めて数体を斬り飛ばし、バトンタツチだとばかりに前に出た龍太郎が、筆手を装備して相手を相殺する気満々となつた拳で、残す事無く敵を崩れさせていく。

その横で零が、刀に良く似た剣を計算された動きで使いこなし、一体、また一体と確実にラットマンを斬り伏せていく。

しかし、無双を繰り返す3人の背後に、隙を見つけたとばかりに接近した3体の魔物が飛びかかる。

少々対応が遅れ、なすがままに攻撃を受ける…。筈だつたが、

バーン、と、何かが破裂した様な音が立て続けに3回鳴らされると同時に、3体の脳天が綺麗にぶち抜かれ、そのまま地面と一体化する。3人が視線を向けると、銃のような物を持ったプロンプトが、それをクルクルと回しながら次の敵を捉えていた。

「ほら三人とも、ぼさつとしない！ 次が来るよ！」

ハツとした3人（1人だけは苦虫を潰したような表情）は、

呆けている間に周囲に群がつていた敵に再び視野を向け、無双パーティを再開した。

その一方でプロンプトは、怖氣付いて逃げようとした何体かを同じように銃撃し、逃げる事すら叶わない、と奴らに思い知らせた。

「4人とも、準備出来たよ！」

4人が戦っている後ろで、何やら準備を済ませた香織、谷口鈴、恵里の3人が合図をし、前衛はサツと身を引く。

『暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ――

――螺炎』

その詠唱を終えると、螺旋状の炎が敵全体を覆い尽くし、そしてその全てを燃え上がらせた。哀れなことに、ラットマンは悲鳴をあげることも出来ず、そのまま塵と化し、跡形もなく消え去つた。

背後を気にしていたメルドであつたが、この惨殺の光景を目の当たりにし、先程の勇者達よりも顔を引き攣らせて賞賛の声を上げた。

「あ、あー、よし、良くやつたぞ。流石なだけはある。だが加減はしろよ？」後に響いても仕方が無いからな。

それと、今回はいいが、魔石も回収する事を覚えておけよ？ 明らかにオーバーキルだからなあ…」

褒めると同時に、簡潔に言うとやりすぎだ、という事を伝え、頬を赤らめる生徒を見つめながら、仕方ねえな、と肩を竦めるメルドだった。

その一方で、プロンプトは自分が手に持つ銃を見つめ、その後に目線をハジメへと向ける。

(この武器、初めて使つては見たけど…チヨー使いやすいじやん！やつぱハジメに頼んで正解だつたなあ)

そう、この武器は、数日前にハジメとの打ち合わせで話に出た、製作依頼を出していた銃の完成品なのである。

本人曰く、今の自分に出来る限りの事をした、だと言うが、これは何処に出しても恥ずかしくない程の代物である。

彼に感謝の眼差しを向けていると、無自覚ながらも偉そうな振る舞いでこちらに近付いてきた勇者が、不服そうに口を開く。

「先輩、ここに来る時から思つてはいたんですが、そんな卑怯な武器を使つてているのですか？」

「…ワイ？」

「ちょっと光輝…！失礼な事言わないで。先輩はその銃を使いこなしで私達を援護してくれたのよ？」

今度はどう言うご都合解釈をしたのやら、再度ブレーキが壊れた勇者は、一気に畳み掛ける。

「黙つていてくれ雫。確かに先輩は敵を倒すだけの実力はある。けれど、それはその武器に頼りきつたものだろう？ 道具に頼りきつた戦い方では、何時か通用しなくなる。きちんと自分の力で戦わないと」一同、絶句。

嫌いな奴の行動は全て醜く見えるとは言うが、ここまで酷いのは流

石にないだろう。ましてやこの勇者は、それら全てが無自覚なのだから。それでこんなセリフが出てくる事にも驚きだが。

「それに…」

「ねえ勇者クン。君の言いたい事は大体分かったよ」

「…そうですか。ならその武器は」

「ここで捨てて下さい。とは言いきれなかつた。

その前に、プロンプトが吐き捨てる様に、ゴミを見る目で言い放つたから。

「それじゃ、ここに居る人達は全員卑怯って訳だね。じゃあ皆、自分の持つてる武器を捨てて先に行こうか」

「はつ!？」

メルドは、やれやれといった形で止めるタイミングを伺い始めた。どうやら、どちらかが言いくるめられるまで待ってくれるらしい。「み、みんなが卑怯なわけないでしよう。だつて、ここに居る皆は自分の力で戦つて」

「え？ 自分の口で言つたじやないか。武器を使つてるヤツらは卑怯だつてさ！」

「そ、そんな事は言つていません！ 何をおかしな事を言つているんですか！」

「いやだつてさ、自分の力で戦わなきゃ卑怯、なんでしょ？ 君の中では」

「そ、そうです！ それがなんで…」

「じゃあ、なんで皆その借り物の道具を手に取つて戦つてるのさ。君だつて、この世界で貰つた剣を手に取つて戦つてるでしょ？」
「うぐつ!？」

言い返す言葉が見つからないらしい。いつものテンプレの「とく、勇者は黙り込んだ。まあ、これは何かしら無理矢理反論を見つけて来るパターンなのだが。

「そ、それは自分の手で使つてるからです！だから自分の力で戦つてるじゃないですか！」

「へえ、なるほど。銃とかそーゆーのは手を汚さずに戦うから、卑怯

だつて言いたいんだ?」

「そ、そうです!」

「じゃあ、弓兵の方々や、白崎さん達に言わなきやね、君達が卑怯だから魔法とかそういうのは使うなつて」

「な、何でそうなるんだ!! 僕は、貴方のことを話してゐるのに何故そこで香織達が出てくる!!」

いよいよ建前であろう敬語すら崩れだした。彼の中で、プロンプトはアーデンと同じくらいに気に食わない存在になつてきたのだろう。「自分の力じゃないんでしょ? 自分の手を使つてないんでしょ? だったら、魔法使いや弓使いの人達は全員卑怯になるよね。だつて魔法や矢に頼りきつた戦い方をしてるんだからさ」

「ふ、巫山戯るな! 香織達は一生懸命努力してあの力を手に入れたんだ! お前のような卑怯者と一緒にするな!」

「うん、皆努力して手に入れた力だよね。知つてるよそりやあ。近くで見てたし。でもさ、銃は努力しないで使えるものじやなくない?」「な、何だと!?

もう傍から見てもどちらが有利に見えるかなんて分かつてゐるだろうが、まだ誰も止めない。まだ完全に決着が着いていないと察しているのだろう。

「君は銃は道具で、それに頼りきつたら強くならないって言うけどさ、じゃあ、最初から何もせずに銃を使って、この子に頼りきりで戦つたら、どうなると思う?」

「な、何の話を…」

「俺を含めた、この中の誰かが死ぬけど?」

「なつ…!」

「いや当たり前だよね。だつてなんの技術も身に付けずに銃を使うんだよ? そんな事したら、狙いが定まらずに暴発して最悪サヨウナラ…だよ? そうならない為に技術を身に付ける訳なんだからさ…。そ一ゆー点では他の武器も同じでしょ」

「まあ、そうね。剣とかだつて、上手く扱えなきや事故になるし…」「でしょ? だつて、そうならない為に訓練をしてきてる訳なんだか

らさ。それと同じ様に、俺だつて扱う為に色々勉強してきたんだから

ら」

「は…？銃なんてこの世界にはなかつただろう！ 出鱈目を言うな

！」

「いや、誰もこの世界でなんて言つてないからね？」

「…まさか、俺達の世界で…!?」

プロンプトは静かに首を縦に動かす。それはそれでまた勇者が騒ぎそつだが、面倒事になる前にさつさと片付けておく。

「まあ俺、射撃が趣味だつたからさ、資格なりなんなり取つて使つてたから、一応技術はあるんだけどね。…と、言う訳でさ、銃も刀もさ、ちゃんと努力して力を身に付けないと扱えない代物なんだよね。で、そうした点で考えると、君はそれらを含めた物を自分の力ではない、なのに白崎さん達は努力してるつて言つてる…矛盾してる事、分かる？」

「ぐつ…」

「まあ、簡単に言うとさ、君の方が彼女達を卑怯者つて言つてるんだよね」

「うつ!？」

「それにさあ…それら全てを作つてる人達に対してもない侮辱をしてるつて事にも気付きなよ。軽くなんの力にもならないつてのと同じくらいの事を言つてるからね？」

「うぐあ!？」

「あのさあ、大した結論も分からぬのに騒ぎ立てるのやめてくれないかな？ ただ迷惑をかけて終わつてるだけだからね？」

「ぐはあ!？」

お約束が終了した。いつも通りにボロボロにされ、勇者は何も言えずそのまま佇むだけとなつた。

ノクティス達は、普段よりも毒舌かつ、自分の意見をズバズバというプロンプトに素直に賞賛を送つていた。

「どうやら言いたい事は終わつたようだな。よし、進むぞ」

「メルド団長、でも…」

「いいか、光輝。戦いに卑怯も何もねえ。使える物を使つてその上で戦う、それが本質だ。てか、そんなモノにこだわつてたら、何も出来なくなつちまうだろうが」

「…」

「取り敢えずだ。俺達は武器に頼りきつて戦つてるんじやねえ。その武器を理解した上で技術を身に付けて、自分の一つの力とするんだ。その点で言つたら、その坊主は既にその段階にあるんじやねえのか？まあ、長年戦つてる身からすると、まだまだな部分はあるけどな」

「うわあー、手厳しいねえやつぱり」

「光輝。自分の体だけが力だと思うな。お前はまだ武器とは何なんか、よく分かつていない。武器は使うものでも、使わされるものでもなく、共に戦うパートナーの様なものだ。そのジュウを道具としか、頼りきる物としか見えていないようじゃ、それこそその先には進めねえぞ。：お前らも覚えておけよ！ よし、じゃあ先に進むぞ！」

各自が自分が持つ武器を見つめながら、今語られた全てを思い返しているようだ。だが直ぐに、今のままでいいか、と考えを放棄してしまうものも多数おり、このままでは成長できないだろうと感じながらも、皆を誘導するメルドだった。

それからの展開は、サクサクと進んだ。ローテーションし、任せられた生徒達が一体となつて敵を倒し、それぞれに散らばつているノクト一味がその援護を行う、といった形だ。

そうして進んでいくと、いつの間にか二十層へと辿り着いたのだった。この層は今回の遠征の目的ポイントであり、ここまで進むにはかなりの手馴れでなければ難しいとされている。いかに生徒達の初期

ステータスがこの世界では異常だつたかが分かる結果である。

まあ、何はともあれ、此処での戦闘を終えれば、今回の訓練は終了なので、と浮かれている様子を見れば、これが本当に世界を救う任務を任せられた人達なのか？と不安になつてしまふ。

そんな不安も他所に、本日最後の戦闘相手であろう者が、どこかでその闘志を燃やしている。

一擬態しているぞ。よく周りを注意しておけ！」

メルドがそう忠告すると、壁と同化していたなにかが肌の色を変え始め、褐色色のゴリラのような魔物が姿を現した。

一本の腕に注意しろよ！

「馬鹿力…。先生とどちらが強いのかしら…。まあ、先生でしそうけ
ど」

と信者と言われても仕方の無いような支持力を感じさせる発言をして、龍太郎からそこまで比べんな、とばかりの呆れた視線を向けられていた。

口ツクマウントが肉体系とだけあって、龍太郎が先手を繰り出し、奴の拳と自分の拳を力強くぶつけ合い、相打ちとなつて両方の手が弾き飛ばされた。

それを好機と見たプロンプトが、素早く銃を向け、急所に向けて連弾を放つ。

が、敵はそれを素早く手でなき払い、そのまま息を吸い込んでそれ

巨大生物が姿を現した、と説明されても信じられるような咆哮が、空間全体を襲う。

果たしているだろうか。

攻撃と判断して吹き飛ばされる例もある。だがやはり、大きな例としてあげれば、相手を怯ませたり、行動を制限させたりといった目的

で使われる事が多いだろう。そして、このゴリラの咆哮は後者。つまり、

「ぐう！」

「きやあ!?」

「うお!?」

「ひええ!!」

これを喰らつてしまつた前方4人の動きが封じられてしまつた。

邪魔者を捉えたとばかりに走り出すロックマウントは、彼らを横切り、後ろで迎撃しようとする香織達の頭上付近へと飛び立つた。

その際、飛び立つ前に持ち上げた岩を思い切り香織へとぶん投げたのだつた。

しかし、忘れないで欲しい。ロックマウントとは擬態能力を持つた魔物。

その岩がみるみる褐色となり、腕と足を出してこちらへと向かつてくる。

もうお分かりだろう。これもゴリラだつたのだ。

そのまま奴は香織達へと変態の如く飛びかかるとダイブする。どこかのアニメの主人公が女性に飛び付く時に上げそうな声が聞こえてくるかのような状態だ。

そして目も血走り、鼻息も荒い。本物の変態のようだ。いや、変態だ。

恵里を除く2名が悲鳴を漏らしてしまい、そのままゴリラは3人へと激突し：

「ちよつとオイタがすぎるんじゃねえの？」

かけたその巨体はいつの間にか回り込んでいた誰かによつて貫かれ、絶命した。

「おーっす。お前ら、ひでえ面してんな」

「ノクティス先輩！」

巨体を地に伏せ、怯えた様子の2人を気遣うように屈んだその顔

は、ノクティスであつた。

「で、でもどうして…先輩は後方の人達を守つてるんじゃ…」

「いやまあ、俺らも状況に応じて作戦を変更しなきゃならねえからな。それに、恵里、お前にとつてはこつちの方が良いんじゃねえのか？」

「え？ てことは…」

「んじゃ、後は頼んだぜ、アーデンのおっさん」

「ハア…守るなんて柄じや無いんだけど、あの勇者君と話す事になるよりはマシ、か」

ノクティスがプロンプト達を助けに走り出すと、背後からぬつとアーデンが現れた。

それを確認した恵里の表情がみるみる柔らかく、そして狂気的になつた。

「えへへえ♪ 先生、僕の事助けに来ててくれたんだあ♪ 嬉しいなあ♪ ちゅーする?」

「はいはい、そーゆーのは後ね。ゴリラさんが大人しくなるまでは君も大人しくしてなさい」

「ええー、先生つてば照れ屋なんだからさあ♪」

「…ハア。なーんでこうも好かれてしまつたのだが。あ、君達も早く建て直しなよ? まあ、もう終わるとは思うんだけど…」

「はい! ありがとうございます!」

「ありがとね! アーくん先生!」

「…キミさあ…もう少しそのネーミングどうにかしない?」

奇抜なあだ名で人を呼ぶ鈴のその余りにもかけ離れたセンスに、アーデンは心底困惑してしまつていた。

一方、4人の援護に向かつたノクティスは、もう1匹のゴリラと対面しながら彼らを案じていた。

「ごめんノクト、しくつた!」

「おう、分かつたら働け。そして助けた分の借りは返せよ」

「いや辛辣過ぎない!? 借りは払うけど!!」

「払うんだ…とのツッコミは敢えて口に出さなかつた何名か。

その気持ちとは逆に、ゴリラは今度こそ、ともう一度吠える準備を

する為、1歩後ろへ下がる。だが、

「2度も食らうかつての！」

素早くノクトが剣を投げて奴の腕へと剣を刺し、シフトの能力で一
気に間合いを詰めた。

「アガアアアアアアア！」

「そら、暴れん、な！」

そうしてゴリラの腕へとしがみついたノクティスは、さらに無力化
させようと、その剣を深く突き刺す。

これには流石のゴリラも思つたように動けず、ただ痛みに苦しむばかり。

完全に片腕を仕留めたと踏んだノクティスは、もう片方の腕へと器
用に移る。

「ほらよ、もう一本の腕も頂く、ぜ！」

そしてそのまま、同じ様にもう片方の腕にも突き刺し、最早ゴリラ
は叫ぶどころか、許しを乞うために悲鳴をあげる他打つ手がなかつ
た。

「…いやあ、やつぱノクト強オ！」

「…すげえな…。あんな細かい動き、俺には到底無理だぜ」

「いやあれ、細かいつて言うのかしら…？ 確かに上手く立ち回れて
るのは分かるけど…」

圧倒するノクティスを見て、それぞれ3人は学ぶ生徒のような眼差
しでノクティスの戦い振りを拝見していた。

しかし、その横で、完全に周りが見えていない勇者がまた問題行動
を起こし始めた。

「貴様、よくも香織達を…許さない！」

「え！」

「ちょ！ 何やつてんのお！」

この勇者は、ノクティスが抑えている事も視野に入つてないのか、
自分の力だけで消し飛ばさんと剣を高く掲げ、剣に光を纏わせて攻撃
準備へと入る。

「天翔羽ばたき…天へと至れ… 天翔閃!!」

「あ！ こら、馬鹿者!!」

「光輝ストップ!! あれが見えてないの!?」

「ノクトおおおおおお!! 全力で避けろおおおお!!」

誰の声も届かないのか、怒りに身を任せた勇者の一撃が、斬撃となつてゴリラへと向かつていく。

その光の一撃は、無慈悲な程に真っ直ぐゴリラへと向かつて行く。

「ん？ やべえ!!」

やがて後ろから近づく音と光に気がついたノクティスは、急いで剣を抜き、ゴリラから離れる。

取り残されたゴリラは、その無慈悲な光によつて綺麗に両断され、その奥の壁さえも巻き添えを喰らう。

断末魔を上げることさえ許されないまま、2つにスライスされたゴリラだつたものは、そのまま他と同じように地と同化した。

一仕事を終え、ふう、と安堵の息を吐きながら、自分を暖かく迎えてくれるはずの香織達へと顔を向け、大丈夫か、と声をかけようとする。しかし、

「このお、大馬鹿者がア!!」

「ヘブオア?!?」

声を掛ける前に、メルドの拳骨、雲の溝打ち、プロンプトのアッパー カットの3連コンボが決まり、うずくまる。

「な、何を…」

「何を、では無いわ!! お前は何を見ていたんだ！ ロックマウント を食い止めて いるノクティスの姿が見えんかったのか!!」

「い、いやだつて香織達が…」

「貴方は本当にそれしか頭にないの!! 香織達が救えればノクティス 先輩を巻き添えにしてもいいの!!」

「うぐつ…」

「勇者クン…」

「な、何だ…」

「偽善者つてレツテルを貼られるのと、今ここで脳天撃ち抜かれるの、

どつちがいい？」

「なあ!?」

怒り心頭、それどころでは済まされない程に声を荒らげた3人が、勇者をこれでもかと怒り倒す。

まるで勇者が子鹿のように震えている。余程怖かつたのだろう。だが自業自得なので同情はせん。

「あー、死ぬかと思ったわ！」

「ノクト!? 大丈夫!? 怪我はない!? 半身消し飛ばされてたりしない!？」

「しねえわ!! ジヤあどうやつて歩いてきたんだよ！」

無事に生還したノクティスを労りながらも、怒りが収まらない3人は更に何分かと勇者を説教し続けた。

流石にこれはいけないと感じたのか、すべて終わつたあとにノクティスは彼から謝罪を貰つた。ただし、香織達を、救おうとしたのに…と納得はいつてないようであつた。

「あ、あれ、何かな? キラキラしてる…」

そして、勇者達を心配した香織が前へと進むと、不意に壊れた壁の方へと視線を向ける。そこには、青白く発光する鉱石のような物が、こちらを誘うように輝いていた。

「ほお、あれはグランツ鉱石だなあ」

「ん? 団長、グランツ鉱石つてのは?」

「おお、坊主達は知らなかつたな。あれは、特に特殊な効果はないが、その美しい輝きから、貴族に受けが良くてな、求婚の際によく使われる鉱石らしい」

その言葉を聞いた刹那、零の眼が怪しく輝き、ジロつとその相手となる男を見つめて、知人には見せられないような顔を浮かべていた。

それに加え、ここにはいないであろう2人の視線を何故か感じた、と、後にプロンプトとイグニスは恐怖体験として語っている。

「綺麗…」

加えて香織も、そんなことを口にしながらハジメをこれまた逃げ出したくなるような眼力で見つめていた。

ハジメは恐怖を通り越して受け入れる姿勢に入つたようだ。だが、思考回路がやられている。

「だつたら、俺たちで回収しようぜ！」

女子陣に気を向けてばかりいると、小悪党筆頭の檜山が、その鉱石を目掛けて壁を昇つっていく。

「待て！ 迂闊に行動するな！ 安全確認すら出来てないんだぞ!!」

慌ててメルドが止めるも、それをうざく感じた檜山は無視し、お目当ての鉱石へと手を伸ばす。

「うへへ、これで香織に…」

「おい！ 待て！」

ノクティスが慌ててシフトを発動し、檜山を止めようと接近するが、遅すぎた。

檜山を捕まえ、振り投げる前に、既に彼は鉱石に触れていたのだ。刹那、部屋全体が魔法陣に包まれ、あの時と同じような光景になつていた。

「これは…転移魔法か!?」

「撤退だ！ 総員、撤退しろ！」

メルドが全員に避難を呼びかけるが、それも虚しく、

光が彼らを包み込む方が早かつた。

そのまま謎の浮遊感をプラスされ、どこかへと転移される。

やがて浮遊感が終わると、次の瞬間には床に叩きつけられる生徒が多数いた。

ノクティスは辛うじて着地する事が出来たが、それでも足にダメージを受けたようだ。

「ど、こだよ、こ、こは…」

ノクティス達が辺りを見渡すと、そこは大きく開けた洞窟のような場所で、自分達を乗せた大きな橋が、ドスンと構えていた。

ひよいと顔を出して、下を覗いてみると、そこには川などはなく、下へ、下へと暗黒が広がっているだけだった。

すぐさまメルドが橋の先端の階段へと向かう様に指示を出したが、そうはさせないとばかりに、小さな魔物がうじやうじやと出てきて、

彼らを待ち構えんとする。

更に、通路にも大きな魔法陣が展開され、そこから出てくる魔物を見て、メルドが驚愕する。

「ま、まさか、あれは…」

ベヒモス…なのか…

そして闇へと

ベヒモス。

その名から分かる程に、生徒達の目の前に構える獣は圧倒的強者のオーラを身に纏っていた。

つまり、こいつには勝てないと身をもつて感じる程の脅威。その様にして恐れを感じ始めている生徒達を休ませるつもりもないのか、ベヒモスから逃がさんとも感じる立ち位置に散らばっている骨共が、ゆっくりと此方へ進撃を開始している。獣と骸骨の挟み撃ちなど、誰が興味あろうか。

「チツ！ ベヒモスだけでは飽き足らず、トラウムソルジャーまで仕向けてくるとは…!! 何と趣味の悪い…！」

余りにも絶体絶命な状況に、思わずメルドは舌を打つてしまう。それもそのはず、自分達でさえ倒せるかどうか分からぬレベルの危険性を持つ魔物に対し、戦闘経験も人生経験も浅い生徒達を率いて行動するなど、無謀にも程があるのである。

まさに詰み。その一言で全てが片付いた。

「…つ、覚悟は決めなければならぬいか。アラン！ コイツらを率いてトラウムソルジャーを蹴散らしながら出口へ迎え！ カイル、イヴエン、ペイル！ 障壁の用意をしろ！ 全力でだ！ そして光輝！ お前達も早くアラン達に着いて行け!!」

「待つてくださいメルドさん!! 僕達もります！ あの巨大な化け物の方がヤバいでしよう！」

「馬鹿野郎が!! 勇気と無謀をはき違えるのはやめろ！ あれは最強と謳われた冒險者達が束になつて挑んでも適わなかつた恐ろしい奴なんだぞ!! さつさと行け!!」

「つ、それでも、貴方を見捨てて行く事なんてできない！」

傍から見れば仲間を大切にする勇敢な戦士に見えるだろうが、彼のあり方をよく知っているものからすれば、その正義に振り回されていいる赤子のように見えた。

要するに、良く状況も考えられずにそんなことが言えたものだとい

うことである。

「ねえ、勇者クン。そんなこと言つてる場合じゃないんじゃないの？」
「な、何を言つてるんだ。メルドさんがピンチなんだぞ？」見捨てられるわけないだろう！」

「それは分かってるよ。俺だつてあの人には死なれたら困るけどさ、ここで俺達が助けに行くのは間違つてるだろ？」

「な!? 見捨てるつて言うのか!?

「違うつての。無闇矢鱈に動けば命取りになる。だからこそ慎重に動くべきだ。一旦ここは団長達に任せて、体制を整えるんだよ」

「つ、体制なんて建て直して暇ないだろう！ それよりも、俺がここで奴をくいとめれば…」

「だから良く状況を考えろつて言つてるんだよ！ 後ろをよく見る！ あんな状態の生徒達を放つておいて死に行くのか!? 勇者ならもつと周りに気を配れよ!!」

「グッ!?」

勇者はその言葉を聞き一瞬迷いを見せるが、皆を安心させるにはコイツをどうにかしなければならないと結論付け、その提案には応じなかつた。

「それでも、俺は残らなければならぬ！ 僕がやつを倒さなければならぬんだ！」

「っここの、ここまで話の通用しない馬鹿、初めてだよホント！」

勇者が残ると発言した以上、尚更置いて後退する事が出来なくなつた3人は、何とかこの頭の固い視野狭男をどうにかしようと説得を試みた。

「オルア!!」

大剣を振り回しながら、道を塞ぐトラウムソルジャー達を蹴散らしていくグラディオラス。大剣に削がれていく骨達は次々にぶつ飛ばされていくが、やはりレベルの差とでもいうのだろう。以前までの魔物のように、簡単には消滅してくれない。

「チツ、コイツら数が多いしタフだし、厄介じやねえか？」

「取り敢えずは道を開けるのが最優先だろう。そのまま継続してくれ」

「アイツらはまだ来てねえのか？」

「ノクトは恐らくパニックになつた生徒のケア、及び戦闘のバックアップだろう。プロンプトは：天之河の説得だろうな」

「へつ、こんな時今まで話が通じねえたア、逆に尊敬に値する、なア!!」
生徒達を導きながら、湧き出る敵に立ち向かつていた2人は、悪態をつきながらも着々と階段へと進んでいた。

大方グラディオラスが難ぎ払い、飛ばし損ねた敵をイグニスが徹底的に攻撃しているが、守りながら戦うというのは余りにもこの場合と相まつて最悪を極めていた。

元々四方に分担したのはそれぞれでバランスよくサポートする為。それが今となつては、戦力どころか、騎士達の誘導も無視して我先にと逃げゆく者ばかり。

「お前ら、考え無しに突つ走んな！ それが今1番の悪手なんだぞ！」
グラディオラスが騎士達と共にそう皆に冷静さを取り戻せと呼びかけるが、誰も聞く耳を持ともしない。

寧ろ今にも殺されると考える事にしか頭が働いていないようだ。
「チツ、これが召喚時に意気込んでたヤツらの顔かよ。かけ離れすぎじやねえか」

「怒りを抑えろグラディオ。この状況で叱りつけても余計に混乱を生むだけだ。機会を見計らえ」

「…ああ、分かつてらア。んな真似するかよ」

そう言い返すものの、グラディオラスの表情はどんどんと修羅の鬼の様に鋭く、恐ろしく変化して行つた。

グラディオラスは憤慨していた。あれだけイグニスや愛子、更にはあの基本的には他人の意見に口を出さないアーデンでさえもが反対し、危険性を脅す形になつてまで伝えた。

それでもと言う事を聞かずにここまでやつてきたと言うのに、それが見せかけの勇気だつたと証明されるかのような今のこの状況だ。

グラディオラスはこの状況を作つてしまつた止めきれなかつた自分に腹が立ち、余りにも情けがない生徒達にも、行き場のない怒りを抱えていた。

「キヤアアアアアアアア!?」

怒りとの葛藤に苛まれながら剣を奮つてゐると、自分達より前に出てしまつていた生徒の1人がトラウムソルジャーに襲われている様子が目に入った。

危ねえ、と声を大にして、全速力でその生徒の元まで向かう。

しかし、それよりも早く、突如として謎の隆起によつてトラウムソルジャーが突き飛ばされ、傷を負わされずにすんだ。

何事かと周囲を見渡すと、おそらくそれを発動させたかのように腕を前に押し出したまま、生徒の元へと向かう初めの姿があつた。

「大丈夫!? 怪我はない?」

ハジメはやけに冷静さだと思われるような素振りで順次に対応していく。ゆっくりと立ち上がりせ、理性を保つように呼びかける。

「怖いと思うけど、ここを乗り切れば絶対に生きて帰れる! だから頑張ろう。自信もつてよ。だつて僕の何倍もチートなんだか、ら!」

傍から見れば少しばかり嫌味にも聞こえるが、ハジメなりの精一杯の声援であり、今の彼女にとつては勿体ないほどでもあつたので良しとしよう。エールを送りながら、また1人襲おうとしている骸をせり

出して彼方へ飛ばす。

「南雲、良い対応だな。鍊成で敵をぶつ飛ばすなんてよ！」

「アハハ…でもあんまり効かないの、実戦ではあまり使えないと思つてたんですが…」

「何言つてやがんだ。お手柄もお手柄、超お手柄だろうが！」

グラディオラスの褒め言葉に、ハジメは少し顔を綻ばせる。やがてトラウムソルジャーの数が減り、一方向に集中的に集まる形になつたため、比較的守りながら戦う事が樂になつた。

すると、あちこち動き回りながら行動していたノクティス、その場にへたりこんだ生徒を雑に担ぎながら回収していくアーデンが合流し始めた。

「やあ、この通り、足が動かなくなつちやつた子達は俺が回収してきたよ。最も、勇者様一行はあそこで固まつてるらしいけど」

「全く学習しねえのな。アイツも」

「二応敵の数も減つてきてはいるが、そもそも此処全てが未知の領域だ。何時何がやつて来てもおかしくはあるまい。その為、今の生徒達の状態は極めて最悪であると判断している」

イグニスの解説に、戦いながら耳を傾ける5人は、アーデン以外がかなり険しい表情をしている。

実質、トラップの全貌が明らかになつてているとも限らない可能性もある。何故ならば、こういつた急なトラップには変化球というものが存在する事もあるからだ。

「じゃあ、やっぱ勇者とか団長も早くこっち側に来てもらわねえとじやないか？」

「ああ。だが、呼びに行つた道中でやられてしまうことも考えると、こちらで待機している方が良いのかもしれんが…」

「変化球、だろ？」

「ああ。どちらにせよ、賭けになつてしまふだろうが…」

「なら、最悪の場合を見越して合流を急いだ方がいいんじやねえか？」

指揮をとれる奴は多い方がいいからな」

「でも、問題は誰があつちに向かうか、じゃない？ 行くなら、それな

りに足止めにも力を注がなきやならないだろうし」

アーデンの言いたい事はこうだ。つまり、呼びに行くとなるとベヒモスを食い止める力が弱まってしまう。その為、一瞬でも奴を封じ込める手立てが欲しいのだ。

無論、ただの攻撃ではそれは不可能だ。いくらチートと呼ばれる生徒達や4人でも、流石にあそこまでだと良くてかすり傷を与えられるかどうかだ。

「…僕が行きます」

ハジメの立候補に、全員が驚きを含むが、イグニスがすぐさま意思確認をする。

「…本気か？ 南雲」

「…はい。僕は、確かに後方でしか役に立てないかもしませんけど、そんな僕でも、何かしら出来ることがあるかもしれません」

「ふむ、確かに鍊成師は戦闘力が低い反面、技術的な面ではトップクラスと言えるだろう。つまり、それを利用するんだな？」

「はい。肝心の天之河君を説得できるかは分かりませんけど、やるだけやってみる価値はあると思います」

「…」

実際、ハジメが適任だと言うのはイグニスも承知していた。試しに、一度だけグラディオラスが先程ベヒモスに向かつて1振りかましたのだが、弾かれてしまう程に奴の防御力は高かつた。

だが、流石に1人だけ行かせるというのはそれこそ無謀すぎる。かといって戦力を外すとこちらがやられてしまう可能性がある。

「なら、俺が行こうじゃねえか」

「待て、ノクト。お前は…」

「逆に教師のお前らが抜けたら余計にパニックになると思うが？ 一応、お前らがいるおかげで正気を保つてられるヤツもいるんだぜ？」

「…しかし」

「安心しろ。死に行くわけじやねえ。ちよいと道を切り開きに行くだけだ。」

「…それに、約束したじやねえか。な？」

「…分かつた。だが無理はするなよ？ 2人とも。駄目だと思つたら直ぐに撤退しろ」

「「了解」」

イグニスの言葉に2人が頷くと、それぞれ行動に移した。

「…シャキッとしろテメエら!!」

グラディオラスは、まず、天之河が来る前でも少しほは正気を取り戻せるように喝を入れる。

「オイオイ、あん時とは全く違え、ひでえ面してんな。そんなんで、世界救えんのかよ。え？」

「で、でも、あんなヤツに勝てるわけないじやないですか!! 僕こんなのが聞いてないですよ!!」

「…聞いてないですよ。じゃねえだろうが」

「…え？」

「戦争、それも魔人族とかいう、未知の領域との戦いなんだろ？ なら、これぐらいの戦闘なんざいくらでもあると予測できたりうが。俺達は前に言つたはずだが？ その場限りの覚悟なんだつたらいらねえつて」

「…！」

「戦争つてのはな。おまま」とじやねえんだよ。それぞれが死ぬかもしけねえ中で、必死に策を考えながら場を有利に進めようとするのが戦争なんだよ。それは魔物でも同じだ。そうやつてへたれこむぐらいなら、一丁前に覚悟決めたような面してんじやねえよ!!!

グラディオラスの怒号に、生徒達は身体を震わせる。恐怖からの人もいれば、はつと気がついての人もいる。

「いいか、お前らは自らこの道を選んだんだろうが！ だつたら危ない時まで守つてもらおうとか考えんなよ？ 自分の身くらい自分で守れ！ それが出来なきや、ただのイキリになつちまうぞ？」

そう言うと、流石に全員とは行かないが、少しばかりの生徒達が足を震えながらも立たせ、それぞれ己の武器を取り、トラウムソルジャーからの攻撃を防ごうとする。

「それでも実際には守つちやうのに、カツコイイ事言うねえ。グラディオ君？」

「うつせえな。人をツンデレみてえに言うな」

「違うのか？事実ではないか」

「イグニスまでうるせえぞ！　いいからさつさと援護にまわれ！」

一方、ベヒモスを食い止めているメルド達は、障壁を展開しながら奴の猛攻を防いでいた。

ベヒモスの突進はそれはそれは強烈なもので、1回1回の攻撃の振動で橋にまでダメージがあり、崩れ始めていた。

「ぐつ！　もう持たんぞ！！　光輝！　早く撤退しろ！！」

「嫌です！　貴方を置いていく訳には行きません！　みんなで生き残るんです！」

「く、こんな時にまでワガママを…」

メルドは後悔していた。何故なら、この頑固を作つてしまつたのは自分だと思つてゐるからだ。

と言うのも、まだまだ経験の浅い若者とすることもあり、褒めて伸ばそうとした事により、勇者は自分の力を過信してしまつようになつてしまつたのだ。

まあ、実際には元からなんだが。

「光輝！　団長さんの言う通りにして撤退しましょう！」

「そうだよ！　早く皆の所に行こう！」

「光輝、流石にヤベえだろ。脳筋の俺でもわかるぜ！」

状況が分かっている2人はともかく、頭の固い龍太郎でさえも、撤退するように呼びかける。

が、全くの聞く耳を持たない。

「いや、それはダメだ！ みんなを助ける為にはこいつを倒すしかな
い！ メルドさんも助けて皆で帰るんだ!!」

「…光輝…お前…」

「状況に酔つてんじやないわよ！ この馬鹿！」

「うーん、このままだと不味いなー…」

「零ちゃん…先輩…」

香織達も万が一のために残つてはいるが、これ以上の待機は無理だと本能的に分かっているのか、自然と体が後ろへと下がつている。勇者の説得が不可能だと、皆が諦めかけた時。

「天之河君！」

「お前ら！」

「な、南雲とノクティス先輩!?」

突如として自分達の前に現れた2人にそれぞれ顔を驚愕に染めるが、時間が無いと分かっているハジメはすぐさまに勇者に指示を出す。

「早く撤退を！ 皆の所に行くんだ！ 君がいないとこのままじゃ！」

「いきなりなんだ？ それよりも、なんでこんな所にいるんだ。ここは君がいていい場所じやない。ここは俺に任せて、君は」

「そんなこと言つてる場合じやないでしょ!?」

「!?

ハジメはどうとう勇者の言い分に腹を立てたのか、思い切り胸ぐらを掴み、必死の形相で怒鳴る。

「あれが見えないの!? 皆パニックになつてる!! 先生達が気を戻そ
うしてくれてるけど、この状況じやもつとリーダーがいないと間に
合わない!!」

勇者はまたもや悩み始める。しかし、それでも考えが変わらず、ハ

ジメに抗議しようとするが、それよりも早くハジメがまくしたてる。

「皆の不安を消し飛ばせるのは天之河君の特権でしょ!?　皆の事を助けるつもりなら、君は撤退するべきだ!!　もつとよく周りを考えて!!」

そしてようやく、みんなの悲鳴や苦痛な表情で我に返った天之河は、頭を勢い良く左右に振ると、力強く領き返した。

「わかった。直ぐに行く！　すいません、メルドさん、先に」

「下がれ!!」

メルドへ断りを入れようとした途端、限界を迎えた障壁が壊され、苦痛の声と共に吹き飛ばされる。

辺りを包む暴風に身動きがとれない中前を見ると、至近距離まで接近したベヒモスが、漸く貴様らを食い潰せる、と言わんばかりの憎たらしい笑みを浮かべ、勇者達を見下ろす。

その顔を確認した途端、青白い光に包まれた剣がベヒモスの左目付近まで飛んでいくのがわかつた。

「チツ、ハジメ！　足を捕らえてくれ！　俺は時間を稼ぐ!!　その後に奴を動けねえようにしてくれ！」

「分かりました！　鍊成!!」

ハジメが唱えると同時に、先程の謎の隆起したもののがベヒモスの足の邪魔をし、少しだけ奴がよろける。

その隙にノクティスが奴の目に向かってシフトブレイクをお見舞させようとする。

だが、足をよろけさせようとも、ノクティスの接近に気がついていたベヒモスは、彼に向かってロックマウントの2倍近くある咆哮を浴びさせる。

「グアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオ！」

「があ!?」

その圧になすすべもなく、ノクティスは咆哮が飛ばされる向きへと流されてしまう。

ベヒモスはそんな彼を嘲笑うように見つめ続ける。そして、ハジメが作った鍊成物を容易に蹴飛ばし、さらに進撃せんと足を進める。

「クツ、やつぱり足を止める為には無理か。だつたら、埋めることが出来んなら！」

そう言つてハジメは、先程よりも大きく力を込め、ベヒモスの足を埋め尽くさんほどの鍊成物を作り始めた。

それにより再びベヒモスは歩みを止められ、ようやくハジメを厄介な敵だと認識したと同時に、彼に向かつて吠え始める。が、当たる寸前でハジメの姿が一瞬で消えた。一瞬目を疑うが、自分が攻撃した場所よりも少しだけ左に南雲とノクティスがいる光景が入つてくる。

「オイオイ、疲れて狙いが定まつてないんじゃねえか？ 今だハジメ！」

「鍊成！」

お察しの通り、ノクティスが地面に着地したと同時にハジメの所へシフトで飛んでいき、ベヒモスの攻撃が着弾するよりも早く再びシフトで着弾を防いだのだ。

そして、再び隙ができたと踏んだハジメは、もう片方の足を埋め始める。耐久性は少ないものの、足止めをするには充分過ぎる手だった。その為、前両足を封じ込められたベヒモスは、アホの子のように見え、先程までの威圧感は何処へやら、となつていた。

「今のうちに撤退しよう！ もうこの橋もいつ崩れるか分からない！」

今度は彼の指示通り、全員が従い、ハジメ達の奮闘中に香織の治癒によつて回復したメルド達と共に交代し始めた。

いつベヒモスが再度立ち上がるかは分からぬが、このまま行けば全員辛うじて助かる。そう思つていた。

が、イグニスの鋭い考察は時に頼りになるのだろう。

安堵したのも束の間、ハジメが進行していく通路の先で、先程の魔法陣とは少し違つた紋章のような物が現れ、そこから2本の角のよう

なものが現れる。

「…ハア⁈ 今度はなんだよ⁈」

龍太郎が悪態をつくが、その姿が段々とあらわになると、再び絶望する。

「ハ、ハハ…嘘、でしよう…？」

秉が思わず膝を着きそうになるが、何とか堪えているのがわかる。彼女達だけではない。香織も、ハジメも、あの恵里でさえもが恐怖の顔つきになつていてる。

そして、ノクトは…。

「…つ、何だ、ありやあ…。…グア!?」

奴の全貌が明らかになると同時に、猛烈な頭痛に襲われ、その場に膝をついてしまう。

「ノクティス先輩!! どうしたんですか⁈」

「グッ…！ なんだコイツ…。俺は、コイツを知つている…⁈」

ノクティスを頭痛へと追い込んだ張本人は、大きく傷をつけられた片目を見せつけるように顔を振るい、お前達が俺の相手か、と戦意を見せる。

ちなみに、ノクティスだけではない。遠くで戦つているグラディオラスやイグニスも、こちらで共に戦つていたプロンプトも同じように頭を抑え、信じられない様子でこの者を捉える。

「会つたこともねえ、のに…こいつの名前が分かる…！ なんでこんな所にいやがる…」

「スモークアイ…⁈」

記憶が混雑しているためにこんな言い方になつていてるが、それでも意外だとばかりに目を向けるノクティス達の前には…：

先程とは違い、少しだけスマートな姿をしたベヒモスのような、スモーケアイと呼ばれた獣が、ノクテイス達を襲わんとしていた。

「グツ、この、道を開けやがれえ!!」

何とか頭痛を抱えながらも剣をとつたノクテイスは、プロンプトと連携してスマートアイをどかそうとする。

トブレイクで痛めつけようとする。

が、全く効いていない様子で、そのまま突進を受けてしまう。

「ウワアアアアアアアア!!」

呆気もなくやられてしまう先輩二人を見て、勇者達は強ばつてしまふが、ハジメはそれでも進まなければならぬと、再び鍊成を使い始める。

「ここで諦めたら…一生僕は笑い物だよ!!! 錬成!!!」

ベヒモスと同じように足を覆い尽くす。そして少しだけ行動を制限させたかのように思えたが、先程の戦闘を見ていたのか、そう来ることが分かっていたかのようにスマーケアイは足を素早く上に持ち上げ、鍊成物を思い切り踏みつける。そしてそのまま、啞然とする皆を凄まじい頭突きでぶつ飛ばす。

その際、咄嗟にハジメが自分達の前に鍊成を行つた事で、最悪の事態は免れたが、悲しいかな。後ろから怒りのこもつた咆哮が響き渡る。

まさか、と振り返ると、ハジメの鍊成から抜け出したベヒモスが、こちらへと歩みを再開しているのがわかつた。

「いくら何でも早すぎでしょ!! 一体、どうすれば…!」

悪あがきだとばかりに勇者がベヒモスへ光の一撃を、雲がスマートクアイに一閃を繰り出すも、やはり体には通らず、どんどん距離が詰められる。

「…くつ、まずいな。この状況を開拓できる策が全く思いつかない…！」

「つこの、道を開けろ！俺達は皆の所へ向かわなきやならないんだ!!」「あ…嫌…先生…！」

雲が微かに怯えだし、香織はなんとかしてハジメだけでも守ろうと、震えながら彼の前に立つ。

「ハジメ君だけは…私が守る…!!」

普段ならここで勇者の嫌味が飛んでくるだろうが、生憎勇者にもそんな余裕はない。

誰もが、これはもう駄目だ。と諦めかけた。

そして、そのままスマートクアイの最後の突進が、勇者達を巻き込んでいく…。

「…失せろ」

その刹那、無数の青白く光り輝く何かがスマートクアイを横から突き刺さり、それより後から1本の剣がそれを貫通し、スマートクアイは橋のギリギリの所まで飛ばされる。

余程効いたのか、呻き声を上げながら必死に痛みを逃そうともがき、それを放つた奴を睨む。が、余りにも痛みが強いのか、何もする

ことが出来ず、またもがき始める。

それに啞然としている仲間達を含め、同じ顔をしているように見えたベヒモスが、はつとして直ぐに、その犯人のところまで駆け出そうとする。しかし、またしてもどこかへと消え、あちらこちらを見渡すと、急に目の前に殺氣のこもった目で自分を睨む、無表情のノクティスが手をこちらにかざしてくるのを最後に、目の前が真っ暗になつた。

「グアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオ!!!」

威嚇のものとは違う、悲鳴からなる声を上げるベヒモスは、スマーケアイと同じようにその場でもがき始める。

どうやら、先程の攻撃が最悪な事に目に刺され、激痛で何も見えなくなつてしまつたようだ。

一方、2体を圧倒したノクティスは、2体が撃沈しているのを確認すると、ストッと地面に足をつけ、糸が切れたように一瞬体をよろめかせる。

「…今の力は…」

無意識に力を使つていて、我に返つた時には何か懐かしい力が戻つてきただような感覚があつた。

初めて見たようなものなのに、どこかで使いこなしていた記憶があるような…。

そんなノクティスに疑問の込められた視線を向けるプロンプトは、香織に治療してもらつたあと直ぐに皆にお手製ポーションを配り、その回復性能の良さに皆が驚いていた。

「皆！ 考え込むのは後！ それよりも、アイツらが復活する前に早く！」

ハジメの再びの指示に、今度こそと勇者達は皆の元へ向かう。流石にもう、起きないでくれよと思うが、そんな思いも叶わず、スマーケトイを通り過ぎた所で、何とか痛みに打ち勝つた2体がゆっくりと起き上がつたのだ。

「…あのさあ、もういい加減倒してくれないかなあ!?」

ここまでくると、恐れよりも怒りが込み上げてくるが、今この状態

で再び突進を繰り出されると、それこそ全員まとめてお陀仏となる。ノクティスは完全にあの猛攻を覚えていないようで、さつきまでのあの眼差しが嘘のように、焦りを滲み出している。

「仕方ないが、やるしかねえか」

「…先輩、僕もやります」

「コイツらの相手はかなりキツイぞ？ 踏ん張れるか？」

「先輩だけに重荷を背負わせる訳には行きませんから！」

メルドは止めようとするが、何も策がない訳では無い事を察したのか、イグニスと同じように踏みどまり、

「…やれるんだな？」

「勿論」

「…まさか、お前達に任せっきりなるとはな。直ぐに助けに来る！ それまで踏ん張れよ！」

「ああ！」

「はい！」

メルドは、今度こそ生徒達の場所へと向かい、2人は、再び殺さんとばかりに唸る2体の獣を睨みつける。

「…先程と同じ威力を出せますか？」 先輩

「どうだか。もしかしたらスタン取らせるくらいしか無理かもしんねえ」

「充分です。そしたらアイツらの様々な所を埋めるので、直ぐに離脱しましよう。後は、団結した皆で一斉攻撃を決めれば…」

「俺達は無事に生還つてこだな。よし、もう一丁頑張つてやるか!!」

「はい！」

ハジメの返事を合図に、ノクティスが勢い良くスマートアイの頭上へとシフトで飛んでいき、お前だけはと殺意満点の頭突きを繰り出そうとした奴の頭を上手い具合にかわしながら頭上よりも上へ飛び、一度2体が重なる視点まで来た所で、無数の残像剣をヤツらに再び浴びせ、狙いをスマートアイの足へとずらしたノクティスはそのまま一直線で突き刺す。

一方、目を失ったベヒモスはあの斬撃に恐れを感じているようで、

顔を庇うべく足を出してしまったことが悪手となり、そこに剣が集中的に刺さつてしまい、スマートクアイと同じように転倒した。

「やっぱ、さつきみてえにヤベえくらいの威力は出てねえな…」

一見はとても効いているように見えるが、さつきのあの攻撃では、肉を貫通し、骨スレスレまで届くくらいには威力があった。が、現在は肉を斬る位までになっている。それどころか、段々と力が入らなくなってきたているのがわかる。

持つてあと十分かそのくらいだな、とノクティスは考えた。

「先輩！ 離れて下さい！」

「！ 分かつた！」

考え込みそうになる頭を後退へとしつし、バトンタツチのように前へと出たハジメが、両手を前に掲げて鍊成を始める。

まず、地面についている両者の頭部を固め、その後に右前、左前、胴体と順々に体を埋めていく。

何度も言うが、耐久力はそんなにある訳では無いので、少し力を加えようとすれば簡単に壊されてしまう。

だが、ノクティスが弱まらせたお陰で抵抗力が少しだけ下がった事により、鍊成物を壊すスピードも格段と下がり、すぐさま直せるようになつた。

本当ならここでノクティスにトドメをさしてもらう展開だが、ハジメはそれが無理だと分かり、撤退する寸前のメルドに一斉攻撃という提案をした。

ハジメはオタクである。それ故に、異世界の力の使い方や展開については詳しいのだ。ハジメから見ると、ノクティスは一時的に力を取り戻した戦士のようであると考え、それはつまり、継続して力の維持を行うのは無理な状態だと分かつた。それに、そろそろ橋の方も変なぐらつき方を始めている。ここで完膚なきまでに叩き潰すよりは、撤退して相殺した方が早いと踏んだのだった。

「！ ハジメ！ 準備が整つたみたいだ！」

「分かりました！ 直ぐに行きましょう！」

2人は踵を返すように後ろを向き、メルド達の元へと全速力で走り

出した。

一足先に生徒達の所へ着いた勇者達は、残りわずかとなつたトラウムソルジャーを両断する。

「皆！立ち上がるんだ！俺達はこれまで数々の特訓で鍛えてきたはずだ！ 皆なら絶対に生きて帰れる！」

流石は皆を纏める（チ洗脳氣味）事が上手い勇者と言つたところか。それにつられるように、今までへこたれていた生徒たちも立ち上がる。

それを確認したメルドが、すぐさまハジメの作戦を話始める。
「お前達、よく聞け！ 今、向こうで2体の化け物共を相手にしている奴らが最後の足止めを成功させた時、一斉に魔法で攻撃を行う！ それで脅威は収まるはずだ！」

「待つてください！ 私も行きます！」

「坊主達の作戦だ！ それに、アイツらは必ず成功させると約束した！」

「でも！ それだとハジメとノクトが！」

「坊主達の頑張りを無駄にするつもりか!?」

香織とプロンプトが猛抗議するも、メルドの気迫に何も言えなくなつてしまふ。

「直ぐに発射準備をしろ！ いいな!?」

その言葉を合図に、皆が列となつてベヒモス目掛けて魔法を放つ為の詠唱を始める。

「…信じるぞ」

「グラディオ、でも」

「アイツらが無茶してまで作った機会だ。これを逃したらもう勝ち目はねえ。それに…約束したじやねえか。だから、帰ってきたらボコボ

コにしてやろうぜ?」

「それグラディオラスがしたいだけだよね!? 趣旨もちよつと変わつてるし!!」

そうグラディオラスが励まそうとするが、イグニスは何時ものように冷静な表情をしておらず、ただひたすらに無事を祈つてるように見えた。

それから少し経ち、遂にハジメ達がこちらへ撤退を始めた。それと同時に、メルドが声を大にして、指示を出す。

「よし、お前ら! 一斉に放て!!」

メルドの声と同時に、それぞれが現在最高出力の適正魔法を放ち、ベヒモス目掛けて飛ばしていく。

それを確認したハジメとノクティスは、安堵しながらも更に速度を上げ、こちらに向かつてきているのが遠くからでもわかつた。

彼等はハジメ達の帰還を信じ、中には申し訳なさを出しながら魔法に集中した。

⋮ただ1人を覗いては。

「おー、やっぱ威力高そうだなこりや。あと少しだ、気合い入れろよ！」

「勿論です!」

ベヒモス達からかなりの距離を離した2人は、ただひたすらに走つた。後ろでどのような動きを見せているのかは分からないが、立ち止まればベヒモスか魔法の餌食となる。そのため、足に力を入れることだけに集中した。

やがて魔法がそれぞれ後ろへと飛んでいき、耳が壊れるような爆音とともに風が巻き起こったのを感じた。どうやら着弾したのだろう。ベヒモスの断末魔も聞こえてくる。

それに、なにやらミシミシと下から音がしてくる。どうやら、橋も限界を迎えたようで、少し足で踏むと亀裂が入っているのが分かる。内心ヤバいと思うが、それを足を速めることに繋げた。

「危ねえなあ！ よし、ここでシフトでも使うか。じゃねえと間に合うか」

「ノクト！ ハジメ！ 避けろおおおおおお！」

「…え？」

ノクティスが力を使おうと前に手をつき出そうとした次の瞬間、プロンプトの怒号が飛び、ふと上を見上げると…。

そこには、誰が放ったか分からぬが確実にこちらを狙つた火炎弾が近づいており、対処できなかつた2人はまんまと喰らってしまう。

「熱あ！！」

「つちイ!!」

そこで2人の足は止まつてしまい、その場で倒れ込んでしまう。前から悲鳴や叫び声が聞こえてくるが、それよりも、橋にヒビがはいる音の方が大きかつた。いや、もう橋は崩れていた。それも、2人も巻き込んで。

「グッ！ は、ハジメ！ 僕の手に捕まれ！ 何とかアイツらの所まで！」

「は、はい!!」

崩れゆく橋の上でも、諦める事をしない2人は、何とか手を掴み合ひ、力を振り絞つて皆の所へと向かう。

「ノクト!! 後ろだアア!!」

しかし、珍しくイグニスの張り裂けそうな声がこちらへ飛んでくる。

そこで、後ろを見る前に頭に衝撃が走る。

「がア!?」

ノクティスはその衝撃で、前に突き出していた手が自然と下へ降り

てきまう。要するに、意識を失いかけてしまった。

「先輩!! 何で…!?

ハジメが恐る恐る後ろを向くと、そこにはなんと、あそこまでの状況からどうやって抜け出したのか、スマートクアイがノクティスの頭を狙つて手を突き出した光景があつた。

そういえば、とハジメは考える。

(さつきの断末魔、1つしか聞こえなかつたように感じる…。まさか、あの身体で振り切つたのか!?)

スマートクアイは、グルルと嬉しそうに喉を鳴らし、ハジメにももう片方の手で意識を奪おうとする。

まるでその態度は、

『自分達だけでは済ません。貴様らも道連れにしてくれる』と言つた驚異的な執念が込められていくように感じた。

ハジメはなすすべなく意識を刈り取られ、そのまま橋の一部と化し、抵抗することはなくなつた。

それに満足したのかスマートクアイは、崩れるがままに己の体を任せた。何とか必死に抜け出そうとするベヒモスとは違い、王者のような貫禄を見せている。

「いやあ!! 南雲くん!! いやああああああああ!!」

ハジメは微かに聞こえる絶叫に、申し訳なさを感じながら、(ごめん、しら、さき、さん…)

と心の中で謝罪し、完全に意識を闇へと閉じられる。

一方、ノクティスは失いかけの意識でハジメの手を握り返し、最後の力と言わんばかりにシフトを使い、イグニス達が待つてゐる場所まで飛んでいこうとする。

が、やはり此処はノクティス達を逃がしはしないらしい。自分達の場所よりも後から崩れだした橋の一部が、ノクティスを巻き込み、途中で力尽きてしまつたノクティスを飲み込みながら崩壊していく。(すま、ねえ…おま…えら…)

ノクティスは、途切れゆく意識の中でやはり叫び、泣き喚くような声を聞きながら…

「ノクトおおおおおおおおおおおおおお!!!」

段々と近づいてくる声を不思議に思いながら、ハジメと同じように闇へと意識を手放した。

CHAPTER 2 王の目覚め

目覚め

『ここは……どこ……だ?』

深い深い、闇の中。

意識さえも飲み込まれそうな程の、暗い・闇。

いつか味わったような、孤独。

それら全ての感覚が、今の彼を覆い尽くしていた。

『俺は……何してたんだつけ……。誰かを誰かの所へ、連れてつて……確かに……デカブツに……』

誰かつて……誰だ……? デカブツつて……なんだつけ……?

違う……俺は世界の闇を……世界に……光を取り戻すために……

世界の…何を取り戻すつて…？ そんな記憶…無い筈…なのに…
な…』

なにかすべき事があつた気がする。だが、それすらも思い出せない。

あるのは、頭に走る微かな痛み、それだけ。

ただひたすらに彼は…ノクテイスは闇に身を任せんとしていた。

『め よ お ス』

『……なんだ……?』

《めざ——よ——しん——お——ノク——ス——》

『……しん、お……? 何の……話を……』

《めざ——めよ——しんの——おう——ノク——ティイス》

『……王……俺が……』

『めざめよ——しんのおう——ノクティス——』

『……そうだ……俺は……既に世界を……そして……俺は……』

——無いよなあ……ええ？　ノクティス王子？　——

——ノクト。薬類の買い出しは、忘れずにな——

——ノークト！　あのさあのさ、何か写真撮つて欲しいリクエスト
ない？　——

「どうする？」

（

「んー…。行つてみて」

「やばけりや戻る」

「俺、本当はニフルハイムの人間なんだ」

「どこの世界にこんなだらしねえ王様がいる」

「ノクト。王とは、決して逃げ出さない者の事だ

（

ー 僕はノクトの右腕になるつて決めたんだ。だから何時までも
グズグズしてられない。じゃないと、またアラネアに怒られるから
ねつー

ー 僕はお前の剣だ。だから、お前が最後までやり通すつてんなら、シガイだろうがなんだろうが難ぎ払つてやる。それが、俺に出来るせめてもの助けだからなー

ー 例え眼が見えなくなつたとしても、俺はお前を支え続けると誓つた。：逃げ出さないというのならば、俺は俺の使命を全うして、お前を全力で支えよう。

ー ノクト！ー

ー ノクトー

ー ノークト！ー

ー 常に 胸を張れー

ーさあ、目覚めよ 真の王 ノクティス・ルシス・チエラム ー

仲間達と共に…!!

何時の間にか痛みが引き、ゆっくりと瞼を開けると、ふよふよと時空の歪んだような場所が目にうつった。

それと共に、巨大な甲冑に身を包んだ存在が、こちらに近づいて来るのもわかつた。

『漸く再起を果たしたようだな。ノクティスよ』

「あんたは…夜叉王か…」

ノクティスが夜叉王と呼んだ甲冑の存在は、彼の前へと接近し、話

がしやすいように位置を変えて言葉を発し始めた。

『その様子であると、記憶は蘇つてゐるようだな…ならば話が早く済む…』

「と言つてもかなり強引にだけどな。まだ曖昧な所は何ヶ所がある。…ところで…」

『承知している。ルシスの事であろう』

「ああ。やっぱ、最後は見届けられなかつたからな…。気になるんだよ」

ノクティスの純粋な疑問に、表情の見えない夜叉王が少しだけ安らぎを纏つたように感じた。

『何も案じることは無い。そなたが命をかけて守り抜いたルシスの民は、無事太陽の光の下に照られ、今を生きている』

「…そか」

それ以上ノクティスは何も口を開くことは無かつた。満足した訳ではないのは目に見えているが、失望した様子も感じられない。

ただひたすらに、達成感と安堵、そしてどこからともなくの喪失感を感じていたのだった。

それを感じ取ったのか、夜叉王は口を開かず、静かに静観していた。

「…悪いな。待つてもらつて」

『構わぬ。再びあの時の記憶を取り戻して直ぐなのだ。故に、何も言わぬ』

座り込み、少しだけ体を震わせていたノクティスが冷静を取り戻した所で、彼は今置かれている状況を確認し始める。

「ここは…クリスタル…か？」

『その間に答えるのであれば、否だ。ここは剣神が住まう場所等では無い。いわゆる、そなたの精神空間、と言つた方が早いな』

「精神空間…まさか、スマートクライに頭ぶん殴られうんぬんの拍子に氣い失つちまつたのが原因か…?」

『左様。加えるのであれば、それに力と記憶の解放が偶然にも重なつたと言うのが、今の現状と言えよう』

夜叉王の言うところによると、氣を失つたのが原因ではあるが、それと同時に力と記憶を取り戻す時期が来たのがもうひとつ的原因であり、その条件が合致することによつて精神空間での対話が可能になつたとの事である。

「にしても、何で俺は別の世界に俺のままで居たんだ？ グラーディオもイグニスもプロンプトも、アーデンまで一緒にいるだなんてよ…」「…それも踏まえ、我々が把握していることは全て教えよう。まずは状況を整理しなくては、本題にも入れぬのでな』

「なら、頼むわ。早めに動きさえ所だが、何も知らないままじゃな」

『良かろう。

先ず、そなたの身に何が起こつたのか、だが…。確かにあの時そなたの身も魂も消え、そなたの犠牲によつて世界から闇は消し去られた…筈だった。

だが、何の因果か消えたと思われたそなたの魂は、姿形をそのままに別の世界へと行き着き、今に至るという訳だ』

「…てことは俺がルシスからハジメ達の世界に来た根本的な理由は分からぬ…てことか」

静かに首を縦に振る夜叉王は、『だが』と言葉を続ける。

『何か意図的な力が加わつてゐる、と言うのは確かだ。微かだが、何やらの力で無理やりあの世界に引きずり込まれた感覚があつたのでな』

意図的な力。

その一言だけでこの出来事が偶然や確率で起きた事ではないことが証明される。寧ろ、偶然だと断定できる方がおかしい状況だ。

あの戦いにて命を失った者達と、それに付き従つた者達が綺麗に同じ世界にちようどいい年齢で過ごしてきたのも、当然のようと一緒にいたのも、運命様のささやかな贈り物で済まされればそれで纏まるかもしれない。

だが、だとするのであれば突如としての転移はどう説明する？ 戦争に巻き込まれることが贈り物とは大したものになる。

それになによりも、突如として現れたルシスからの使者とも取れるスマートクアイが現れたのが何よりも決定打だ。まるで、手を加えられた自分達が苦しむ姿を楽しむかのように…。

『続けるぞ。恐らくそなたは、なぜ我らもここに存在しているのかそして、なぜ力が再び使えるようになつたかが知りたいであろう』

「まあな。言っちゃなんだが、あんたらも俺が役目を終えると同時に消滅したはず…だが」

『ああ。だが我等は消えず、そなたの精神の内に宿り、王が真に覚醒するその時を待つていたのだ』

「我等？ てことは他にも…？」

『ああ。だが他の者達との対話はまたの機会にして欲しい。日を改めて言葉を重ねたいと言う者も居てな』

夜叉王は言葉を続ける。

『力が復活したのはそれ自体がそなたと深く結びついている為である。そして、何よりも歴代の王達が力の復活を望んだから…というのもある』

普通であれば酷な使命を背負わされ、命さえも捧げる事になつてしまつた者に望むべきことでは無いが、そうする事には何かしらの理由があるのだとの場合は考える。実際、ノクティスもそうであると確信し、夜叉王もその通りに言葉を述べ始めた。

『我々も万能ではない。それ故に、確定された事実を述べることも、知る事も不可能だ。だが、そなたが別世界へと生をうけ、我々がそなたの中に宿つたという以上、そしてなによりも王の力がそなたから消え

てなかつたこと…。それら全てが、我々がそなたに力の完全復活を望む理由なのだ』

「…要するに何かが起ころるからこうなつたつてのは胸張つて言えるつてことか…。結局振り出しじやねえか…。でも、望むつてことは、きっとルシスを生き抜いてきたあんた達にとつても、俺達にとつても、打破すべきことが起きるつてことなんだよな」

それを聞くと、どこか納得したような面持ちで、すつと足を立ち上がらせる。

「…一つ質問がある。この件に、六神は関わつてると思うか?」

『…述べるのであれば、何かしらの形で干渉はしているだろう。でなければ、あの獣を説明する事が出来ぬ』

「…だろうな。俺は正直、エヒトつてやつとグルなんじやねえかな…なんて気がしてきたわ。いや、流石に…」

…ないで終わらせられねえのがつれえわ』

『…有り得ぬ話では無いのが恐ろしいな。特に2名程』

隨分と自分達の世界を見守る立ち位置であつた存在に手厳しい様子の2人。いや、他の歴代王達も同様だと彼は話した。

というのもなんも不思議なことは無く、エヒトの同胞の可能性が高いと思われる程に疑われる行いをした者が実際にいるのだから。

「なあ、夜叉王」

『何用か。ノクティスよ』

「これつて詰んでないか?」

『…何とも言えぬな。そなたの仲間達の中には話の通じぬ者が幾度となくおり、後ろ盾となつてゐる組織の連中も信用がならぬ…。更にはルシスの化け物が乱入に加え、現在置かれている状態は救援が困難な何処か…。ルシスからの刺客とこの世界での刺客に用心しながら歩み続けなければならぬ…。』

いや、訂正しよう。最早これ程までに最悪な状況は無いであろう「んだこのクソゲー。キングスナイトの劣化版なんてもんじやねえぞ全く」

『…そなた、まだあの遊戯を手放してなかつたのか。ルシスの頃からそうであつたな。試練の最中だと言うのにそのうんぬんナイトとやらの職業しかり素材しかりで訳の分からぬ御託を並べていつまでもいつまでも訳の分からぬ話を…』

「なんでそこまで言われなきやなんねえんだよ！　てか何？　見てたの!?　俺あんたに見られてた自覚ねえんだけど!?」

本人達は漫才の如く言い争いを繰り広げているが、事態は発言通りかなりの悪状況である。下手に行動すれば、上げられるもの全てから狙われる可能性が高い。かつて水の都へ向かう道中よ時も、この様な状況になつた事があつたような気がする。

『…それはさておき、どう判断するノクティス・ルシス・チエラム。最悪な状況に変わりはないが、手はあるのか』

「別に、どんな状況であれやることは一つだ。ハジメを見つけて上のヤツらの所へ戻る。先ずはそうして準備を整える事だな」

『…上に戻つたところで、状況が変わるとは思えんぞ？　むしろあのイシュタルとやらとで挟み撃ち等にされる危険性もあるう』

「…でもな、どつちみち何処を選ぼうがやべえ時はやべえだろうし。

何より、約束したからな。俺の手を取ってくれって。

姿をくらましたままどつか行つたなんて、そんな薄情な真似、出来つかよ。

まーそれに、俺はアイツらの初々しい物を最後まで見届けなきやな
んねーしな

友人や後輩の晴れ舞台を見るまではどこも行けねえよ。なんつてなと付け加え、膝に勢いを付けて立ち上がる。その眼は、かつての父親や恋人を失つた時とは真反対の決意の固い眼だった。

『…成長したようだな。ルシスの頃であれば、仲間の指示を待つか立ちすくむだけだったと言うのに。色恋沙汰にも興味が無いようであつたのに』

「うつせえな！ それなりに俺だつて考えは変わんだよ!!」

夜叉王に対してもツッコミを入れると同時に、ノクティスの身体がぽわぽわと光を出しながら輝いていく。

どうやら、現実世界での目覚めが近いようだ。

『…時間か。最後に伝えておこう。力が戻つたとはいへ、全ての力を一気に再生できた訳では無い。もしそうなつていれば、お主は負担に耐えれなかつたであろうからな。戦いを続ける中で、かつての力までに戻るであろう』

「…まじかよ。俺TUREEが出来ねえとか…。異世界つつたら定番だろが…」

『…良いか。ノクティスよ。』

「あ、無視なんだな」

『これは、聖石からの掲示でも、我々からの指示でもない。ただひたすらにそなたは、己の描いた未来を手に掴むために尽力せよ。それが、新たな世界でのそなたの目標となるう』

「…元よりそのつもりだわ。寧ろ、アンタがそれを言うと違和感しかねえけどな」

その言葉に夜叉王は苦笑するように肩を震わせた。

そして、その言葉がトリガーになつたのか、頼みがある、ヒノクティスに伝える。

『どうかーーを、よろしく頼む…』

「…あんたは反抗期の子持ちかよ…。俺たちの問題は俺達が解決するけどよ…。あんたも自分の問題は片付けられるようには整えとけよ」

夜叉王は小さく感謝すると口にし、今度こそ意識が完全に戻る頃であるノクティスは、粒子となつて舞い上がつていつた。

『…願わくば、そなたにも添い遂げる者の物語があらんことを』

「…ん…」

深い深い闇から這い上がるような感覚とともに、ノクティスはその眼をパチリと音が聞こえてきそうな程に直ぐ様開ける。すると、目の前にはベヒモス階や、トラップ階よりも真っ暗な世界が広がっていた。

「戻ってきたか…。にしても、い、たくない？　あれほど衝撃があつたにも関わらず、時間が経っているとはいへこんなにも回復してるものなのか…？」

ならなぜ、と思考を巡らせるることは出来なかつた。

魔物が出たわけでもなく、誰かと再会した訳でもない。ただ一つ、有り得る可能性が低い事が嗅覚を通して伝わつたからである。

鼻をくすぐるような美味溢れる匂い、即ち料理。そのような匂いが漂つてきた。

「…こんな所でなんで料理の匂いが…」

「ふむ、目覚めたか。いつもいつも心配ばかりかけさせるなお前は」「つ！」

その匂いを頼りにしていると、更にありえない声が聞こえ、その匂いと声の発生源であろう背後を振り返る。

そこには、彼が目的の一つとして掲げた物のうちの一つが、少し潤みを見せながらこちらを凝視している者がいた。

「約束通り、お前の手を離すことなく助けることができた。今度こそ、

いや、今度は真にお前を支え抜く事を改めて誓おう。ノクト
「お前…やっぱり1番情熱的なのはお前だろ絶対…」

イグニス

王の軍師が、彼の手を取つた。

軍師は決意する

不気味な程に静まり返った室内。その中に、凛とした表情を浮かべる少女と場に合わない巨漢な男、

そして、純新無垢に見える少女が苦しげにベッドへと横たわっていた。

とてもその室内の雰囲気は良いとは言えず、重苦し過ぎると言つてもいい程には沈みきつていた。

「…」

凛とした少女は、手繕り寄せるようにそして、力強く横たわる少女の手を握り、目覚めを今か今かと待ち望んでいた。それを男は何も言わず、看病を続ける少女の肩に手を置き、労いをかけていた。

「…頼むぜ、イグニス」

やがて男は、少女達にも聞こえるか否かの小さな声で、ここにはいない一人の男に思いを託していた。

時は遡り、オルクス大迷宮。

生徒達の放つた魔法によつて大橋は崩壊して行き、それに連なつて彼等に牙を剥いたベヒモス達も巻き込まれて奈落へと消えていく。筈だつた。

しかし、何の因果か放たれた魔法の中に、団を買ってたノクティスとハジメを明らかに巻き添えにする為に放たれた炎の球が、たつた一つだけの球がそれら全てを巻き込んだ。

勿論の事、何も知らない生徒諸君は頭が真っ白となつてゐる。

「待つて香織！ 早まらないで！ 落ち着いて！」

「嫌あ！ 離して！ 私が行かないと！ 南雲君があ!!」

「止せ香織！ 君まで死ぬ気か!?」

「今までって何？ 南雲君は死んでない！ きっとあの瓦礫の中で助けを求めてる!!」

崩れ行く橋を前にしても、決してハジメの命を諦めない、いや、諦める事が出来ない香織は身を犠牲にしてでも助けに行かんと発狂する。

でなければ、交わした約束さえ守れずに最愛の人を失つてしまう。南雲君が死んでしまう。そんな激情にかられ、完全に我を失つていた。

その一方で、ノクティスの戦闘不能を察知してしまった友人3人は、彼女等同様に取り乱していた。

「プロンプト待て!! 早まるんじゃない!!」

「離せよグラディオ!! そんなこと言つてる場合じや無いだろ!? ノクトが死んじゃうよ!!!」

「そんな無防備に飛び込んで助けられんのか!? 頭冷やせ!!」

此方はプロンプトが香織の様に取り乱しており、グラディオの羽交い締めで何とか留まっているが、このままでは何時混乱が悪化してしまうか分からぬ。

それぞれが混沌とする中、イグニスはただ、崩れ行く橋を呆ける様に眺めていた。

いや、正確には失念と後悔に駆られ、途方に暮れる事しか出来ない様子だ。

彼の手からは、ハジメが作つた彼専用の武器が零れ落ち、脱力する様に膝から崩れ落ちた。

(…つ、オレは…何をしていた…!?)

考えれば考える程に、後悔の渦は濃くなつていく。

2人の友の罵倒し合う声が響いてゐるが、最早何を言つてゐるのかすらも頭に入つてこない。

水中の中のように周りの音がこもつて聞こえる。

今自分の頭の中にあるのは、ノクティスを救う事の出来なかつた失意のみ。

（俺は…ノクトを守ると誓つていながら…結局…!!）

聴覚と共に、視覚にも影響が出始めている。眼の下に水が溜まつていく様な感覚がして、周りがぼやけ始めていく。

取り乱していない生徒が居たのなら、この様なイグニスを見る事は滅多にないと思う。それ程までに、普段とは掛け離れるほどに彼は取り乱していた。

ただただ橋と同じように自分も地に崩れるしかなく、彼は地に振動を送りながら悔やみ続けた。

だが、それがトリガーとなつたのか、この世界に来てからイグニスを悩ませていた知らない記憶が、再び彼の頭に流れ込んできていた。

しかしこれまでと違い、映し出される情景全てがかつて自分が体験した全てだと実感されていく感覚がイグニスを支配していた。

策の全てを駆使し、自らが仕える王の為に奮闘した記憶。

『ノクト。街を占領している帝国兵だが』

『ああ。一筋縄では行かなそうだな。策はあるか？』

『勿論だ。やはり頭が准将と言うのもあり、妨害に対しての対処もかなり頭を使つたそうだ。ただ突つ込んでも袋叩きにされるのがオチだろう。』

だが、俺達がお世話になつた人達からの情報では、この街の地下にはいくつもの入り組んだ水道があるらしい。上手く使えば、帝国の監視を通り抜けられるかもしれない。それを利用して頭を潰そうと思う』

『成程な…ただ、万が一地上に出た時に見つかつたらどうするんだ?』

『帝国兵が気付かない程の隙間から外を覗いて、相手が背後を見せた瞬間にお前のシフトの力で一気に仕留める。そうして数を減らしていけば、正確に、確実に仕留められる筈だ』

『…なるほどなあ。ん？ グラディオとプロンプトは何処に行つたんだ？』

『既にあの二人には潜入して貰つて、彼等は高所からの奇襲を任せている。そろそろ半分近くの帝国兵が削られている筈だ』

『りよーかい。じゃあ、10倍返しくらいでやるか』

『100倍返しを期待しておけ』

我儘な王を厳しく見守り、その最後の一瞬まで王を見捨てる事をしなかつた記憶。

『ノクト…また肉のみを平らげるとは…。いい加減改善しなければ、健康状態に支障が出るぞ』

『ノクト、服のボタンが外れている。直ぐに縫うから、直ぐに貸せ』
『ノクト、夜明けが来る前に早く就寝しろ。何時までも夜更かししようとするな』

『だアアアア!! いい加減ちまちまとしつこいわ!! お前どんだけ俺に制限かけるつもりだよ!!』

『元はと言えばだらしがない生活を送っているからのがいけないのでろう。だからこうして口うるさくしているんだ』

『お前は俺の母親かつての…！ だからって何も旅までそうしなくたつていいだろ…！』

『だからこそだ。お前は婚約してからもルナフレーナ様にそのだらしなさっぷりを晒すつもりか？』

『うぐつ…』

『…ノクト。複雑になる気持ちは分かる。様々な出来事を経て、そのようにだらけきってしまうことも。だが、俺はお前の配下として、何

より1人の友として、お前に何一つ不便無く過ごして欲しいんだ。だから面倒だとしても、今だけは従つて欲しい』

『つ、そう言わると俺が強く出れないの狙つて言つてんだろ…?』

『バレたか。だが紛れもない事実だ。

そうだな…それでもお前が改善してくれそういうにないからな…。ならこうしよう。今から俺と勝負をして、もし俺が買つたら野菜尽くしのフルコース料理を食べてもらう』

『はあ!? ゼつてえ負けらんねえし…!』

『ふつ…なら俺を捩じ伏せてみろ…。どちらにせよ俺に負けているようでは話にならないからな…』

『言つてろ…なら俺が勝つたら暫くは俺の好きな料理を出し続けてもらうわ!』

『いつも通りだろう…。まあいい。行くぞ…!!』

王を守る為に禁断の力を使用し、力の代償に視力を失い、眼が見えなくなるとも、王の頭脳としてその身を支え続けようと決心した記憶。

『最初から決めていた…!! ノクトは…俺の全てを掛けて、最後まで守り抜くと…!!

指輪の力は…王でなければ使いこなせないと聞く…だが、王の剣達が、自らを犠牲にしてまで力を得、王の為に戦つたとも聞いた…!!

ならば…俺にも!!』

『ぐあああああああああああああああ!!』

『…イグニス。やつぱり眼は…』

『良くなる兆しは見えない。少しの光も射し込む気すらない。

…だが、その代わりに少しづつだが周りの気配や感覚に鋭くなるようになつた。

以前のようには鬪えないが…その代わり今出来ることで皆の…ノクトのサポートをしていきたい…そう考えている』

『ノクト…王とは、決して立ち止まつてはならないものだ。

そして…お前がその足を止めずに歩み続けるというのなら…俺も足を止めたくはない。

だから…最後までお前の頭脳として、隣で戦わせて欲しい』

使命通りに王に辛い人生を歩ませ、促し、平和な世界を、取り戻した反面、己を責め続けた辛く悲しい…記憶。

『ノクト。俺は…お前の使命を知っていた』

『お前の苦悩を知っていた』

『お前の葛藤を知っていた』

『お前の…最期を…知っていた』

『…そか』

『俺は軍師として、お前の頭脳として、お前の臣下として、使命を全うすることを選んだ。

…だが、心の底では…お前の仲間としては…

お前の親友として…お前には幸せな道を歩んで欲しかった…つ！

本当はあの時、心のどこかで、逃げたいと言つて欲しかった自分がいた…！』

『…』

『許されない事は分かっている。

俺はお前の自由を尊重できる立場でありながらも、
王としてのお前を支える立場であつた俺は…

後者を優先した…。

俺は…お前の友人を名乗る資格は『

『イグニス』

『…?』

『確かに、逃げたら…俺は長い時間を生きることが出来ただろうよ。

だけどな…

全ての救える命を見なかつたことにして…

俺が逃げ続けて得た幸せなんて…

そんなの幸せなんて言えんのかよ』

『…ノクト』

『…自分で言うのもなんだが、そりや親友が死ぬの分かつてゐるのを…
はいそうですかつて言えるわけねえよ。

俺の立場だつたら当たり散らかして終わりじやねえかと思うしな

でもよ、お前は…俺の幸せを見て見ぬふりしたなんて事、1つもしてねえんだよ』

『何…?』

『誰だつけな？ 未熟な俺の為に、嫌いな物全部食わせようとして決闘申し込んできた堅物は？

誰だつけな？ 頼んでもねえのに、俺を危険から遠ざけながら作戦を立て続けた堅物は？

『誰だつけな？ そんな理不尽な理由叩きつけられても、尚俺のことを考え続けてくれた奴は？』

『…』

『全てを知つてたとしても、少しでも俺の幸せを願つてこれからの方に色々とお前はしてくれただろ？』

『そうしてお前が、お前らが作ってくれたバカみてえな、くだらねえ日常一つ一つが：』

『それだけで、俺の幸せを作ってくれたんだ』

『つ…！』

『それによ…』

『俺に着いてきてくれたお前らの生きていける未来を作れるなら…』

『俺達に良くしてくれた人々が救われる未来を作れるのなら…』

『俺が使命を果たすことによつて、こんなにもの奴らが救えるつてんなら…』

『俺は…自らの全てをかけて世界を救う価値があると思うんだわ』

『…！ ノクト…』

『だからイグニス

『どうか自分を責めるのは止めてくれ。』

最後なんだ

笑つて終わらせようぜ』

『…ああ』

その日、軍師はまた一つ嘘をついた。

だつて、仕方の無いことなんだ。

他でもない自らが仕える王が、嘘をついたから。

嘘なんだ。全てをかけてでも世界を救うのが本望だなんて。

嘘なんだ。最愛の女性を失った王に、親を失った王に自分達だけで幸せが満たされたことも。

けれど、それでも、イグニスが嘘を重ねてしまつたのは

：

たつた一つだけ王が、何の迷いも出さなかつた理由が、イグニスが嘘をつかせる理由となつたのだ。

それは…

長く、そして一瞬の様にイグニスにかつての記憶が戻る。吐きそうな感覚と共に、目にぼんやりと淡い何かが宿り始める。

(…これは…そうか…違和感の正体はこれだつたのか。

ははつ…道理でノクトに危険な道を避けて欲しいわけだな…

あんな：俺達との友情で塗り上げた日常を糧にやり遂げて終わらせるなんて…お前は何処まで俺達を引っ張り回す事しかしないんだ…

イグニスはノクティスに密かに恨み言を述べると、自分の中に渦巻いていた負の感情を潰す様に手を握り締める。

ノクティスが最後まで突き通したもの。それは友情と日常。

あの時ノクティスが語った覚悟の言葉の中に、一つだけ真の王として覚醒する前からノクトを支え続けたその2つが、ノクティスは助けられるのと同時に、自らの心の支えとしていたのだ。

(…俺は、結局ノクトを最後まで辛い思いをさせてしまった…だからこそ俺達は、ノクトと共に幸せな世界を望んだ…)

だが、運命はそれを許す事はしなかった。現に今、ノクトは橋の崩壊によつて、また平穀を乱されようとしている。

俺はまた、後悔をしてしまつた。

あの世界で、ノクトを最期まで守り、ノクトの本心を護らずに過ごしたあの時のように…。

それで終わりにしていいのか。イグニス・スキエンティア。)

手に、足に、腰に、全てに力を入れていく。

それに連動するように、膝が、足が、重い全てが上げられていく。
(俺は守れない？ 今度も？)

違うだろう。あの山で、俺は何をした？ 自分の危険をさておいて

ノクトを守り抜いただろう。

それだけじゃない。だからこそ俺は約束をしたはずだ。あの誓いを)

『もし、まだ俺のことが心配ならよ。

：手を差し伸べてくれねえかな。あの時みたいによ』

（あれはその場限りの約束なんかじゃない。きっと、あの誓いは、俺の、ルシスの時からの俺の望んでいた事なんだ。

俺はもう、使命の通りの道は歩まない。

俺はもう、ノクトに悲しい結末を歩ませない。

俺はもう…友の手を離さない!!）

混乱する生徒達の中、また一つ、発狂と困惑が辺りを包み込む。あるひとりの男が、崩壊する橋へと歩み寄つていく光景を見てしまつたからだ。

当然、そんな光景を見れば仲間が、親友が黙つて見過ぎるわけが無い。

「おいイグニス！ お前まで何をするつもりだ！」

「何を？ 決まっている。ノクトを、ハジメを助けに行く」

「お前もなのかイグニス！ お前らしい加減落ち着け！」

ノクトが心配なのは分かるが、早まれば全員死ぬんだぞ!? お前は

4人の中で頭脳派なのは1番お前がよく知ってるはずだろうが！」

「分かっている!!」

「つ！ イグニス…!？」

普段は出さないようなイグニスの怒鳴り声に、グラディオラスは一瞬たじろぐ。そして、それで何かを察したのだろう。今までの罵声が嘘のように止んだ。が、何も察しない勇者や周囲は再び声を上げ始めてしまう。

「何を言つてるんですかイグニス先生！　もう南雲達は助からない。ここは2人の意志を受け継いで帰還すべきです」

「そ、そうだ。早く帰りてえよ！」

「先生は私達を守つて下さいよ！　だつて迷宮の最初もそうしてくれたじやないですか！」

「!!　お前ら…！　冷静じやねえからつて言つていいことと」

「止せ、グラディオラス」

「でも！」

「プロンプトもだ。そして八重樫も」

イグニスに制止された2人は黙り込む。そして、生徒達の余りにも身勝手な意見、グラディオラスをも罵倒するような発言に頭が沸騰してしまった零さえも、手に取つた刀を渋々と戻す。

「そうだ。俺は教師だ。だからこそ、お前達の事を守らなければならない」

「なら…！」

「だが、それ以前に、私は愛子先生と交わした願いがある。生徒全員の命を守るという事だ。

天之河。確かにあの瓦礫に飲まれてしまつたのならば、生存率は極めて低いだろう。

だが俺は、1割でも、いや、例え可能性が無かつたとしても彼等が生きて いるという事を信じる」

余りにも確証も何もない発言に、一同は再び沈黙してしまう。が、親友、そして零が、取り乱した過程で意識を失つた香織を抱き留めながらイグニスの言葉を耳に入れていく。

「グラディオ。確かに俺は冷静さを失った事を言っているのかもしれない。だが、救出する為に対策を立て直したところで、彼等が生きていたとするのならば立ち止まつて居るとするか？」

そうなつた場合、折角生き残つたとしても救助した先で見つけることができずに断念、または食糧不足に陥る可能性もある。」

「…お前にはその全てを打開できるといいてえのか？」

「俺のスキルに、料理保管と料理複製という物がある。戦闘には向かないが、充分に彼等を支援できるものではある」

「…お前が死ぬ事もあるかもしだれねえんだぞ？　お前には将来を決めた人もいる。それでも行くつてのか」

「…ああ。きっと俺は、自らを犠牲にして、あの人を悲しませる行動を取ろうとしているだろう。

だが、俺はあの夜誓つた。

ノクトの手を取ると。

生徒の命を守ると。

必ず、愛子の元まで帰つてくる。

今まで俺は守るつもりでいながら、ずっと逃げ続けていた。それしか方法がないんだ。

だが、もう俺はあの様な後悔はしない。

傲慢だろうと、何だろうと…

俺は全て成し遂げて帰つてくる」

恥を知らないような、狂つてしまつたような事を何の躊躇もなく、

ただ、覚悟を決めたように堂々と発言する。

もう最早、誰もイグニスの覚悟を、信念を止める言葉など残つていなかつた。

「…」

盾と、王の頭脳が互いの視線を交差する。やがて、折れたのは盾であつた。

「…はあ。つんでお前らは猪突猛進な馬鹿が多いんだろうなあ。お前でさえもんな事口走つたら、俺はもう止めらんねえだろうが…」

「…すまない。だが」

「謝んじやねえよ。どうせこれしか方法が無いのは俺も薄々は思つてた。だが、冷静であろうとして俺も大事な事を見落とす所だつた。ノクトは馬鹿だ。だが、瓦礫に飲まれてそのまま窒息する様な間抜けじやねえ。」

そこで、助けに行こうとするお前も、頭が固いだけの猪突猛進なアホだ。そんなヤツらが、手を離すなんて真似、する方が難しいだろうな」

苦笑いしながらイグニスを見るグラディオラスは、怒ったような、苦いような、でもどこか頼もしげに顔を綻ばせる。「正直途中、お前が何を言つてんのか分からねえ部分もあつた。が、お前が何も考えずにこんな事言う奴じやねえのは分かつてる事だ。

だから俺とも約束しろイグニス。

その傲慢な程に抱えてるもの…1つも落つことすんじやねえぞ。

必ず全て坦いで帰つてこい！」

「…当然だ。グラディオラス。俺は教師だ。アイツの、ノクティスの親友だ。

必ず全てをやり遂げて帰つてくる！」

その言葉とともに、イグニスは崩壊する橋へと続いて飛び込んでいく。悲鳴が上がるが、それでも止まらずに突き進んでいく。

「イグニスウ！ こつちの事は俺達に任せておけ！ 必ず合流してまた会おうぜエ！」

「あー！ イグニスー！ グラディオに馬鹿馬鹿言われたと思うけどー！ グラディオも相当な馬鹿だから絶対に任せられると思うよー！」

「最後の最後にぶち壊すんじやねえヒヨコ頭ア!!」

かくして、軍師は記憶を覚醒し、友との誓いを果たす為に手を伸ばす。

これは、かつて王を真の意味で救う事が出来なかつた軍師の、再決意が描かれた話。

少女の叫び

イグニスが自らを持つてノクテイス達を救出に向かつた直後、残された者たちは心の支えの1つを失った事により発狂と絶望に打ちひしがれていた。

メルドが必死に呼びかけ、勇者が鼓舞させようとするが誰も聞く耳を持たず、ただひたすらに叫びを上げて地獄絵図を生み出していく。その様子に何を思つたのか、アーデンは生徒達を置いて先に脱出路をスラスラと先に進んで行つてしまつた。

「…正に興醒め…だね。…」りや失敗だつたかな」

「な！ 何処に行く!!」

皆を見殺しにしたと解釈したのだろう。いち早く代表者の教師やメルドを差し置いて、アーデンに追いつき咎めていく。

此処でなら勇者に賛同する声を上げるブーリングが響くと思われたのだが、最早批判を上げる気力も失せたようだ。誰もそれに介入する様子は見られない。

「何処？ 決まつてるでしょ？ 帰るんだよ。イグニスセンセから言われたの、もう忘れちゃつた？」

「な…だつたら何故生徒達を見殺しにして自分だけ助かろうとしたんだ！！ お前のやつている事は大人として…いや、人間として最低な事だぞ！！」

「へえ。それは確かだね。じゃあ最低なままでどうぞ。俺も救う必要も無い子達を無理に気負わなくてすむしなあ」

「は…はあ!?」

何度目かの冷氣の様に包まれる空間。またしてもこの男は爆弾発言を残していくようだ。

だが、それを正論へとしてしまつているのも勇者一行の難点というものであろう。

彼を筆頭に項垂れていた人達も、自分を救つてくれない、教師なのに怨みに怨みが籠つた目をアーデンへとぶつける。

一方、お馴染みの2人と常識人2人、そしてアーデンの半身（自称）

だけは何も咎めずにただ愉快そうにほくそ笑む教師を見つめていた。

「はあ…そうやつて俺を責めれば何とかなると思つての、いい加減ウザイんだよねえ…。

じやあ聞くけど、そうやつてれば助けが来るの？ あれだけ武器を求めて戦いだーって意気込んでたヤツらが、仲間2人脱落しただけでこの世の終わりみたいな顔してさ…

ホント：君達何しに来たの？」

「だけ…だと？ 巫山戯るな!! 仲間が死んでるのにその言い草は何だ!! お前はそれでも」

「あー、もういいよ。今君達に何を言つても無駄だから。

精々そろやつてロクデナシの様に這いつくばつてなよ。偽善者共」
『!』

まるで亡者。何時ものヘラヘラしたアーデンからは考えられないような、恐ろしく低い、ドスの聞いた声を浴びせられた生徒達は、壊れたブリキ玩具のようにピタリと全ての動きを静止してしまった。

それに次こそ興味をなくしたアーデンは、イライラした様子で1人の少女を見ると、今度は呆れた顔をしながら、

「…来たいなら勝手に着いてくれば良いんじゃない？ そんなソワソワされてたら、コツチが困るんだよね」

「ホント!? ジャあ遠慮なく〜♡」

まるで呼ばれた子犬のようにドタドタと音をたてて、彼の半身（etc）中村恵里が当然のようすに彼の背中にしがみついた。それはもう聳え立つ丸太にがつつくように。

そして2人は、まるで後には誰も居なかつたのようすに振る舞いながら出口を歩いていつてしまつた。

「…アーデンちょっとこれ…収集つく？」

沈黙の後、呆れたようなプロンプトのツツコミが響くが、またもや誰も顔を上げることは無かつた。

その様に等々痺れを切らしたメルドが、腑抜けた皆に喝を入れ始め

る。

「お前らシャキつとしないか!! 本当に此処で死ぬ気か!? 魔物に挑んで勇敢に死ぬより、誰かを庇つて死ぬよりも、腑抜けて抜け殻のように情けなく死ぬのが望みなのか!?」

生徒達はその発言で漸く少しばかり、ほんの少しばかり体をびくつかせて重い体を上げ始める。

まだ正氣を失っている生徒にはグラディオラスが、一息入れの喝を入れ始める。

「どうやら、お前らは期待してた奴らにすらも泥を塗つて、裏切りてえらしいな。甘えが許されるとか思つんのか知らねえが：確かに甘えは大事だ。だかな…」

何時までも好き勝手やらかしたら、後は頼れる奴らが何とかしてくれると放棄すんのは止めにしやがれよテメエら」

その喝に、メルドとは違ひ顔を頃垂れさせ始める生徒達。

「奮起せんのに落ち込ませてどうすんのさグラディオ…」

「い、いや？ そうでもねえぞ？ 全員が今度は立ち上がった。何とかなつたじゃねえか」

「本当にイグニスはコイツに任せて大丈夫なのかなあ…パワードGORILLAだよ」

「いくら先輩でもそれ以上の発言はお分かりですね？」

「あ、なんでもないです。はい」

相も変わらずにグラディオラスの愚痴をすぐに察知して、凄く笑つてない笑みを見せつける零は最早はよ付き合えの具現化となつている。

余りにも場の明るさの度合いがくつきりと分断されてしまつている状況をして、メルドは困惑していた。

が、こうしている間にも危険が忍び寄らないとは限らないので、生徒達が僅かばかりの奮起を起こした今のうちにせつせと脱出をはかるのだった。

余談だが、ここでも余裕があるのか愚痴しかたまらないのか、恵里がアーデンに引っ付いていたのを面白く思わなかつた勇者が、恵里をあの悪魔から引き剥がすなどと騒いでいたのだが、どうせお約束で終わることは目に見えているので、何も言うまい。

結果的に皆は迷宮を脱出する事には成功した。

元の宿泊地であるホルアドに着くと、やつとこさ皆は全身の力が抜け、泣き出す者、崩れ出す者とそれぞれ居た。

勇者は真っ先にアーデンを血眼に探すが、彼は愚か恵里すらも見当たらない。

誘拐だと騒ごうとするが、何時もよりも冷静になつている龍太郎にまずすべき事を促され、渋々皆を宿まで誘導していた。

その一方で、

「…ふう。ホント、あんなのは二度どめんだよ」

「ああ。いらん筋肉使つちまつた…」

「その割にはあまり傷を負つていませんよね…。やつぱり実力なんでしょうか…？」

「いや真に受けない方がいいよ八重樫さん。コイツ力だけはレベチだからさ…いやなんでもないです。ハイ」

鈴、雲、気を失っている香織を含めた常識人組は

皆からほんの少しばかり離れた所で各自休憩を取つていた。

全体に比べ、冷静に物事を判断出来る2人は、常に状況を冷静に見極めている先生とプロンプトの話、意見を良く聞いた方がいいと判断したのだろう。

「あ、あの…グラディオラス先生…」

「ん、どうした谷口。…ああ。アイツらの事か」

「はい…3人とも…そんな事考えたくないけど、何かあつたらどうし

ようつて…」

と、鈴は物珍しく不安げにポツリと告げ出す。

やはり、救出が入ったとはいえ、未知の領域に崩れ去ってしまったクラスメイト達を目の当たりにしてしまったのは、かなり心に来てしまったのだろう。

もしここで一人ぼっちだつたとすれば、泣いてしまうのではないかと言うほどに。

そんな生徒を見ると、グラディオラスは自然と手を鈴の頭へ置き、安心させる為に行動する。

「心配すんな…とは言えねえ。どうなつているか俺達には何も分からねえからな。適当な事は言えねえ…」

だがな…俺はアイツらが、どうにかなつたんじやねえかなんては1つも思つてねえ。

そりや崩れた時は混乱したが…冷静になつた今なら、あそこまで窮地でも勇気を出して凹を買いでたアイツらが、簡単にくたばるとは思えねえんだよな…

それに、あの時約束したからな。必ずイグニスが2人の手を引っ張り上げてくれる。

そう考えたら、また2人と会えるのも難しい話じやねえと思えてこねえか？」

一見、何の根拠もないふわつとした意見に聞こえるが、グラディオラスにとつては一つ一つが信頼出来る理由であり、またそうやつて元気づけられるものだから、

不思議と鈴も不安な心が取り除かれていく。

「…そう、だよね。あの時だつて私を率先して助けてくれた2人だもん。なにより私達の頼れるイグニス先生が行つてくれるんだもん。根拠はないけど、きっと大丈夫だよね…！」

「少し元気になつたか？」

「うん！ ありがとうラー君先生!!」

「相も変わらずセンスを疑うあだ名だなお前…」

そもそも言うが、調子を取り戻した鈴に少し安堵した様子でグラディ

オラスははにかんだ。

「あー、嫉妬してる?」

「…いえ? だつてこの状況ですよ? それは先生だつて気を回しますから当然です。

ただ:分かっているのにすぐ納得のいかないだけです。それだけ。はい」

「…そつかー。でも、早めにグラディオのどこに行つた方がいいと思うよ。

多分、アイツも気付いてると思うけど…
君、大分心と表情の連携乱れてるよ?」

「…!」

本人達にしか分からぬ指摘に、あからさまに反応する零下を見て、プロンプトは目でグラディオラスに何かを合図した。
それに答えるように、彼もプロンプトに対しても承の合図をした。
親友になると高度なアイコンタクトも可能な様だ。

やがて、とうとう疲れの限界を超えた全員は、力無くそれぞれのベッドにて眠りにつき始めた。

翌日、王都行きの馬車が到着し、まだ完全に疲れの取れない体を揺らされる事数刻。

やつとこさ生徒達は王国へとつき、心の底から安心を迎えた。

また、昨日まで姿を消していたアーデンと恵里は、王国へ着くと何事も無かつたかのように混じっていたが、現状から騒がれる事は全く無かつた。

勇者は別だが、龍太郎の監視が厳重な為、動くことがままならなかつたらしい。

とはいってもあの状態で訓練を再開など出来るはずもなく、生徒達のメンタルケアも兼ねて宿泊地も飛ばし、王国へと戻ってきたのだ。

それと同時に、ノクティス、ハジメの奈落行き。そしてイグニスが救出に向かつた事の報告もしなくてはならない為、王国の帰還は絶対であったのだ。

とまあ、ここまででは綺麗事のように事が過ぎ去つて行つたのだが、問題はここからだつた。

「報告ですが…此度の迷宮訓練での緊急事態にて、2名の行方不明者、及び救出に向かつた者が1名おります」

王国の連中は失踪者と聞いてどよめいたものの、その人物がハジメ、ノクティスであると聞いた途端に、安堵の息を漏らしたからだ。「一人は南雲ハジメ。もう一人はノクティス・ルシス・チエラム。そして救出者がイグニス・скиエンティアであります」

「なんと…それは何よりであるな」

「…は？」

そこからは正に地獄絵図であった。

権力者達が口から漏らすのは労いの言葉なんて綺麗なものではなく、無能と決めつけられたハジメと、度々強力すぎる謎の力を発動させていたと断定され、不気味がられていたノクティスが失踪と聞いて安堵する声、そして彼等を罵倒する者ばかり。

ハジメには神の使徒でありながら才の無い事を罵られ、

ノクティスに至つてはそれだけの力を持つていながら味方一人も傷付けずに済ませられなかつた事を罵倒されるばかり。

いやはや、全くもつておかしい話である。

ハジメが無能。それは全くのお門違い。

彼の勇気ある行動。そして彼の機転の効く頭脳によつて、どれだけの人達が救われた事か。

彼の活躍は無能等ではなく、寧ろ英雄として讃えられるべきもの

だ。

ノクテイスの力不足。そもそも、転移者に戦闘を任せつきりにしている者が完璧を他者に求めるのもおかしな話である。

ノクテイスのあの力がなければ、今頃勇者一行は2体のベヒモスの餌となつて腹の中をさまようことになつていただろう。

メルドはその事を何度も説明した。今回の帰還は彼らの行動があつてこそものだと。

だが、まるでそれを認めるのを都合の悪いことだと、事実をねじ曲げる様に悉く意見を突きつけてくる。

ではなぜ勇者達の帰還がこんなにも遅れたのだやら。

活躍したのなら全員を守つて当然やら。

そもそも救出に指導者が出来ておる時点でお涙頂戴の芝居なのは無いか、とイグニスの行動さえも否定される始末。

好き放題言われ続け、零は思わず手を出してしまいそうになる。が、グラディオラスに拳を握られて横に首を振られた事により、行動を控えてじつと耐え始める。

最初は抗議をあげようとしたが、グラディオラスが愚痴を零していいた貴族の何人かを眼光で貫いて黙らせていた為、大人しく引き下がることにしたようだ。

また、偏見の正義感が今回は上手く働いたのか、その様子を面白く思わなかつた勇者はその事を激しく抗議する。

流石に勇者直々に激怒されると思わなかつた権力者達は、すぐ様謝罪及び罵倒を上げた者達の処罰を言い渡した。

しかし、グラディオラス達からすれば勇者の抗議にも不満があり、彼の脳内ではどうも、三人は死亡した扱いの様なのだ。

メルドが行方不明と救出と話したにも関わらず、

貴方方がそんなでは死んだ三人も報われないだとか、彼らの最後の意志を無駄にする気かとか。

咄嗟にそのねじ曲がった反論にまた反論を重ねようとするが、権力者達は此処でも小癪な抵抗を見せ始め、

突然勇者の事を失つた仲間、しかも無能等にも手を差し伸べる優し

き勇者と褒めちぎつて反論を無くさせ、

罵倒を撤回する素振りを見せつつハジメ達の評価は変わらないと
いう、勇者の口封じの為だけの暴挙に出始めたのだ。

この収集がつかくなり始めた状況にはグラディオラスも流石に
行動に移すしかなく、

先ず間違った情報を垂れ流す勇者（無自覚）を咎め、

その後に

「これ以上俺達の生徒の勇気、そして意味のある行動を汚そうとする
なら、生徒達のこれから行動を考えさせてもらう」

と行き過ぎずの脅しをかけたことによつて、やつとこさ権力者達の
不審な動きは終止符を迎えた。

神の使徒である以上、全ての使徒が行動不可になるのは避けたいの
だろう。かといって、彼らはエヒトが直々に召喚なされた偉大な使徒
だと考えている。

手荒な真似は出来ないのだろう。

個人的にグラディオラスを暗殺すれば済む問題だと考えた者も居
るのだろうが、雰囲気を見るに、グラディオラスとそれに連なる者達
を慕つている者も多い。

彼を殺せば多くの生徒達が離脱する事も考えたのだろう。

あまり相手側も下手に動く事が出来ない事を理解したグラディオ
ラスは、これから武器として扱おうと心に決め、最後に暫くの生徒
達の休暇を出す事を取り付けて発言を終わらせた。

尚、ここまで間に出た者以外の生徒達は一切口を開くこと
がなかつた。

鈴を含めた何人かはグラディオラスと零と同様に抗議をしようと
していたが、それ以外の生徒達は我ここに在らず、と言つたように現
実逃避を行つていたようだ。

また、彼等はノクティス達を奈落に追いやつた誤爆についても何も
口を出さなかつた。

メルドが報告の一環として、放つた魔法の中に1弾だけハジメ達へ
向かつた魔法弾がある事は知れ渡つた為、話題を切り出す必要は無

い。

にも関わらず、誰もその事について話そうとはしない。

あの時は魔法の嵐が巻き起こっていた為、誰の魔弾がそうなつたのかなど分かりもしない事だ。

だからここで下手に出れば、自分達が処罰の対象になる事を恐れたのだろう。

グラディオラス達は、これ以上下手に出ればノクティス達へも影響する事を考え、一旦は出しやばるのはよした方がいいとしてここで本当に報告会は終わりを迎えた。

「貴方が知つたら…なんて言うかしら…」

そして現在に戻る。今も眠り続ける香織の前にて、手を握りながらずっと目覚めを待ち続けている零。

そして、事の有様を知つたらこの眠り姫は何を思うのだろうか。その恐怖が拭えないでいた。

いや、きっと恐怖はそれだけでは無い。

プロンプトからも指摘されたのを含めた様々モノが渦巻いて、彼女を苦しめている。

握る手の逆手が拳をつくる。ワナワナと震えて恐怖を逃がそうと働いている。

1人で抱え込むようにしているその姿は、誰が見ても無理をしているように見えるだろう。

その彼女を前にして、グラディオラスは動搖すること無く、何時ものように零の肩を軽く叩く。

それだけで、彼女は気持ちが少し軽くなるような気がした。やはり、彼女にとつて彼は…。

「…ん…」

「かおり…？ 香織！ 私が分かる！ 香織！」

「…漸くお目覚めか」

握りしめて幾つ時間が過ぎただろう。

眠り姫はやつとその重い瞼を上げ、何も知らないような輝く瞳を顕にする。

「ん…しづく…ちゃん？」

「ええ、そうよ。零よ。香織、体調はどう？ 長い事眠りっぱなしだったから…何処か具合が悪かつたら言つてね」

「…うん。平気。それにしても、長い事眠つてたんだ…。どのくらい？ …いや、えつと…」

段々と思考を巡らせているその様子に、何処か零は焦つているみたいだつた。

そして、まるでひとつの結論が認められないように、香織の焦点が段々と合わなくなつてくる。

予想通りだと言わんばかりに、零は香織の思考回路に埋め尽くされてるであろう結論から逸らそと、会話を投げようとする。しかし、「そうだ…。私迷宮で…それで…あれ？ …南雲君は？」

「…っ！」

香織の結論が見出すまでの時間の方が圧倒的に速かつたようだ。そこから彼女は取り乱すように見渡し、焦点の合わない目をじつと雪に集中させて訪ね始める。

「零ちゃん。南雲君はど…？ 何処にいるの？」と。

まるで隠されたおもちゃを必死に探す子供のように。
まるで縋るものを見失した哀れな子のように。

「嘘…だよね？ そんなの嘘だよ。だつて約束したもん。絶対に私が守るつて。あの時化け物が2体も現れた時だつて、ちゃんと私が守つてたもん。だから南雲君は無事だよね？ ここに居るよね？ ねえ…なんとか言ってよ零ちゃん。訓練場かな？ 南雲君は。ノクティス先輩と一緒に訓練でもしてるのがな…。そうでしょ？ だつたらお礼…言わないと…」

「…香織!!」

どたつと鈍い音を立てて膝から崩れる。咄嗟に2人が支えるが、それでも香織の足は止まることをしない。

拘束を振り切る為に力を振り絞るが、2人に抑えられてはどうしようもない。

ただ赤子のように暴れるのみ。

「ねえ…香織。聞いて」

「嫌…」

「違うの香織。よく聞いて」

「嫌よ…何も聞きたくない…南雲君に会うまで何も聞かないもん」

「香織…！」

「嫌つたら嫌ア!! 違うもん！ 南雲君は絶対に居る！ だから違うの…!! 死んでなんか」

「落ち着け白崎!!」

ビクッと身体を震わせる香織。自身でかなり取り乱していた事を自覚した様だ。

グラディオラスの呼び掛けによつて、少しだけ話を聞ける状態になつた所で、零が再び香織に告げる。

「…」めんね。零ちゃん。少し…ううん。かなり取り乱しちやつた

⋮

「…いいえ。誰もそうなるわよ。

改めて言うわね。南雲君は奈落に落ちたわ。でも、イグニス先生が助けに向かつてくれる」

「…え？」

光を失いかけていた瞳に灯火がともり始める。

友人の口から聞きたくもない言葉が紡がれたかと思ひきや、それに対抗する希望をも話され、啞然としてしまう。

「お前と同じように、イグニスもアイツらの生存を信じて疑わなくてな。飯に困らないから」とかの理由をほざいて飛び込みやがつんだ。全く…友人ながら無茶する奴だぜ」

「…そう、なんですか。先生が…」

「ああ。なんでも、畠山先生と約束したらしい。全ての生徒を守るつ

ていうな。

だから、残りの生徒を俺達に任せて、アイツらを救いに行つたんだ」
そこまで言うと、香織は徐々に瞳を潤させ初め、頬に一筋の零をこぼし始めた。やがて滝のように流れ始め、心から安堵、そしてイグニスへの感謝の念でいっぱいになり、心のダムが決壊したようだ。

「そつ…か…よかつ…た…」

零はそつと抱きしめ、彼女が泣き止むまで背中をさすり続けた。

その日の夜。

またもや皆が寝静まつた訓練場にて、一つの素振りの音が木靈していた。

その正体は木刀。そしてそれを振るう人は零だつた。

彼女は、昼の泣き続ける香織の背中をさすり続けたそのあとの夕日。

その後の状況を話した時の香織の表情を思い出しながら刀を振つていた。

『そう…なんだ。王国の人も…誰も南雲君にそんな事を…』

『…許せないか？』

『…うん。だつて、南雲君達がああしてくれなければ、今私達は此処に居なかつた…。なのに…こんなのであまりにも酷すぎるよ…』

『…香織は、香織はどうしたいの？』

『…決まつてる。南雲君が帰つてくるまで、私も強くなる。それで…南雲くんが帰つてきた時に、今度こそ守れるように…そして…皆を見返してやるよう…だから2人共』

『なに？』

『なんだ』

『力を…貸して下さい』

『…勿論よ』

『おう。待つ者同士、協力し合おうじやねエか。 そんで、帰つて来たら
氣が済むまでぶん殴つてやろうぜ』

『あはは…それはやりすぎじゃないですか先生…』

でも…帰つてきた時は、いっぱい泣いて、いっぱい話して…

おかえりつて、言つてあげたいです』

最後の一言の香織の笑顔が頭に浮かんだ時、零はより一層鍛錬に力を
を入れた。

(あの時…香織は一切の迷いがなかつた…)

ただひたすらに、南雲君も信じた先での言葉を放つてた…)
その笑顔が、決意が眩しくて、

零は力む程に腹正しかつた。香織にでは無く、
それを黙つて見てることしか出来なかつた自分に。

(香織はあんなに弱つていたのに…それでも1つの信念を曲げる事は
無かつた…眩しかつた…。

それなのに私は…!)

更に身体に力が入る。最早振る以外に動作が働くかない。

ただ空間に力の籠りすぎた一撃を、やけに放つていくしかない。

その度にまた不甲斐なさを感じて、力が籠る。

その繰り返しをし続けた途端だつた。

「オイオイ…力み過ぎだ。そんなんじゃ鍛錬にもなんねえだろうが」

「…!!」

びたり、と刀が前へ動かなくなる。

手元を確認すると、丸太のような腕が刀を静止しており、辿るとグ
ラデイオラスが立つっていた。

「…すみません。起こしてしまつたでしようか」

「いや？ 丁度俺も手が空いた所だつたからな。丁度いい」

えつ…と言う言葉をあげる前に、なんの算段なのか自分の対面に訓練用の木製の大剣を携えながら立ちはだかり始める。

改めて立ちあうと巨大で、自分が三人は丸々埋まってしまうのでは無いかという感覚に包まれる。

「相手してやる。鬱憤が溜まつてんだろ？ だつたら発散、手伝つてやるよ」

「！ いえ、でも…」

「プロンプトにも言われたろ？ 今のお前、危なつかしいんだよ。て事で、少々手荒だが行くぜ！」

「ええ!? ちょっと!!」

問答無用という猛烈を必死に耐えたり躲したりしながら、突如として始まつた戦闘を乗り切ろうと始めていく。

大振りな得物のため、どうしても動きが重めになるのを知つてゐるからか、出来るだけ背後に回るように立ち回りながら攻撃を繰り出していく零。

だが、どういう訳かグラディオラスの立ち回りは尋常でなく、回り込んだつもりでもいつの間にか体を吹っ飛ばされており、中々一撃を当てるのすら難しかつた。

特に、今の零であれば。

どんなに連撃を繰り出しても、まるで歯が立たないようになつて打ち消されてしまう。これはもう、武器のせいには出来ない程に。

それに比べ、自分はグラディオラスの攻撃を嫌になるほどくらつてしまふ。飛んでは撃ち落とされ、回り込んでは吹っ飛ばされ、居合いになつてはねじ伏せられ、距離を取れば詰められてねじ伏せられ…。「どうした八重樫！ いつもの半分も力が出てないぞ！ そんな調子で白崎に力を貸せるのか!!」

「…！」

煽りによつてスイッチが入り始めたのか、先程よりも攻撃に腰が入るようになった。

簡単に弾かれた攻撃が押し返せるようになり、背後に回つた場合で

も背中付近までに刀を持つてけるようになり、相手の猛攻も防げるようになつていつた。

だが、そこからはその猛攻仕返しのリターンの連續だつた。

うち返せても、攻撃を逆に当てることは何時までも出来ず、模擬戦はグラディオラスの号令によつて終わりになつてしまつた。

そして、静まり返つた訓練場にて座り込んだ2人は、本題に入り始める。

「ふう…やっぱ体を動かすと汗ばむなあ…つてそれどころじやねえな」

「…」

「どうした。迷宮から帰つてきてから…いや、トータスに来てからか！ 気付いて…たんですね…」

「そりやあな。あんだけ人にしがみついてりや、検討もつくわな。そんで、南雲達が奈落に行つてからその不安に拍車がかかつたと」

図星、というように零は俯き始める。

途端に、零の作つてきたしつかり者としての顔が崩れ始めていく。「…本当は怖いのを我慢もしてたんです。

戦争に参加する事も…本当は逃げ出したかった。

だから、正直園部さんが別の道を作つてくれた時…そちらに行きたかった。

でも私は、光輝の幼馴染だから…彼の間違いを正しながら元の世界へ帰るために…そして…

貴方の背中を追いたくて、強くなりたくて戦う道を選びました…。だから状況を良く判断しようとしてたし、アイツらがバカやらかそうしたら…怒鳴つてでも止めようとした…。

けど、結局私の声は届く事がなくて…

それどころか…南雲君やノクティス先輩が行方不明になつてしまつた。

まつて…彼等の罵声にもただ怒鳴る対応しか思いつかなかつた…。

…結局私は臆病なだけだつたんです…。ただ強くなりたいだけのに、正当な理由を付けて…。

あの時、ベヒモスに挟まれた時も…刀を持ち上げる事も出来ずに絶望する事しか出来なくて…。

私も…皆と同じく現実逃避を繰り返して…自分はしつかりしていると自分自身に暗示をかけていたに過ぎないのだと…！

そう思つたら…心の中のモヤモヤがどんどん大きくなつて…。

それに比べて香織は…あんなに打ちのめされかけたのに、泣きじやくつて混乱していたのに…南雲君の無事を誰よりも信じていた…。私からしたら…眩しかつたんです…。

…不甲斐ないと笑いますか…？ 先生…」

「…」

グラディオラスは少女の叫びを静かに聞いていた。

常に強くあろうとしていた少女は、この迷宮の出来事で見るも無惨に叩きのめされてしまったのだ。

幼馴染の行いを正そうとするも叶わず、

しつかり者であろうとしても手を差し伸べることもままならず、慕う者の背中を追い求め強くなるとも、心の刃を折られてしま

い、友人の光り輝く姿と対照的に感じてしまつた自分を卑下していた

心に、とうとう限界が来てしまつたのだ。

止まらない叫びを伝え終え、オルゴールの終わりのようにピタツと語る事を止めた零は、虚ろな目で地面と睨み合う。

「…全く…何で俺の回りは抱え込む奴ばっかり何だろうな…」

「…え？ わ…!？」

それを聞いていた教師は、ガシガシと自らの頭をかき、少々乱暴に空いた手で零の頭を抱き寄せた。

「あのなあ…そーやつて1人でどーにかしようとすつから自爆しちまうんだろうが。

暴走勇者を抑えられねえ？ 少なくともお前の度々の説教があつたから行動を抑えられる部分もあると思うが？

誰にも手を差し伸べられなかつた？ 馬鹿言え、お前の存在はその光り輝いてる白崎からすれば居るだけで手を繋ぎあつてるもんなんだよ。

2人が行方不明になつてしまつたからつて卑屈すぎだテメエも。

憧れの背中を追つても強さが追いつかずに心が折れた？ 少なくとも自分を役立たずだと罵つてる内は強くなれねえよ。お前はその土台に立つてねえだけだ。

憧れを追い求める前に自分自身と向き合つてからにしどけせつかちが」

「え、あ、その、え…？」

厳しくも、自身を突き放さない言葉一つ一つに、狼狽してしまう零だが、耳だけはしつかりと、どんなに狼狽えても彼の言葉を受け入れ続けた。

「あのな…俺から言つちまえば…今のアイツらは全員大馬鹿野郎共だよ。

人の話は口クに聞かねえわ…反対意見を信念を持つて押し切つたフリして後になつて嘆き散らして考えを放棄しやがる奴ばつかだしよ…オマケにリーダーが猪突猛進型の阿呆と来た…。

頭痛まつしぐらだつつーの。

けどお前はよ、どんなに後悔しようが、折れそうになろうが、弱音を抱えながら必死に耐え抜いてきただろうが。まあ抱え込みすぎてこうなつてんだろうが…。

だから今度は、その溜め込んだ物を身近な奴らに吐き出しながら歩んで行けよ。

そうしたら、お前が悩んでいる物一つ一つが消化されて、背中にも追いつくんじやねえのか？」

辺りに甲高く短い声が木霊し始める。発生源はグラディオラスの

胸の中。

溜めてるもの吐き出せというグラディオラスの言葉に、本当に全てを、身体が勝手に出してしまおうと働きかけているようだ。

「つわた…しの…今までの…行動…は…無駄じやつ…なかつた…んです…か…?」

「寧ろどうやつたら無駄に感じたんだよ…。お前がいなかつたらあの

クラスの均衡感覚が一気に崩れてたんだぞ…? 良くやってるよ。

八重樫は

「…私は…! わた…しは…!!」

「おーおー、良く頑張ったな。気の済むまでそうしろ。頑張り屋」

もう、彼女を拒む壁は存在しなかつた。

昼間の香織のように、或いはそれ以上に声を震わせながら、彼に抱き寄せられた中で泣き続けた。

その日の夜は、いつもに増して、潤いを纏っていた。

ハジメを探して

時はイグニスがノクティスを救出した時まで遡る。

見事に合流した2人は、すぐ様腹ごしらえをして動ける準備を整えた。

腹が減ればなんとやら。それも未知の領域ともなれば尚更である。気も張り巡らさなければならない為、空腹では命の危険も増幅する。それに、奈落の脱出も含め、ハジメの搜索も進めなければならない。ちよつとした見落としは搜索の難航へと繋がる為、焦る気持ちも抑えて冷静に行動しなければならなかつた。

「一緒に瓦礫に飲まれたはずなのに、何で隣に居なかつたんだろうな…」

「恐らくだがその瓦礫の崩落の力が激しく、本人の意思とは関係なく離れ離れにしてしまつたのだろう。

それか…南雲もお前を探したもの、知らずに段々と離れてしまつたか…」

「クソつ…だつたら尚更早く見つけねえと…これで見つかんなかつたら呑氣に飯食つてた馬鹿野郎になつちまうしな…」

「ああ。早く見つけて、アイツの腹を満たしてやろう。相当空腹も進んでいる筈だ。

だが焦り過ぎるな。その点はルシスの頃からのお前の欠点だからな」

わあつてる、と少々苛立ちながら応答するが直ぐに冷静さを取り戻す辺り、やはり王としての人生を歩んだ経験が身に染みていると感じさせる。

そしてそんな成長した姿を見て、イグニスも何処か嬉しそうに鼻を鳴らす。

(合流して俺が記憶を取り戻したと知った時は…大変だつたな。俺の視力がちゃんとある事を再確認してノクトが泣いて、ノクトが全ての記憶を取り戻した上で折れずに立ち上がつた事を知つて俺が泣いて

⋮。

そして悲劇を繰り返さないと暑苦しく誓いあつて⋮。

今度は、何も悲劇を勧める事も無くお前を見守る事が出来るのを、この上なく嬉しく思つてしまふのは…あのルシスでの日々があつたからこそなのだろうな)

まだ己の鼻には、男泣きを繰り返した証拠が貯まつてしまつてゐるなど苦笑する。

それを伝えればキシヨイ。と一蹴されてしまつたが、そういうノクティスでさえも、目には垂れ流しの跡がくつきりと付いている。

正にお互い様という言葉にふさわしい状況だ。

緑光石が辺り一面を照らしている影響もあつてか、何処かが見えないという状況はない。

しかし、くまなく探してそれでも見つからないということは、やはり先に何処かの奥へと進んでしまつたのでは無いかと推測する。

かといって手分けして探すのは危険すぎるので、少しづつ可能性のありそうな所から捜索していく事にした。

その際、どこから湧き出たか分からぬ、未知のモンスターが飛び出してくる事態が起きた。

レベルや能力的にも、ベヒモスを苦戦まで追い込んだとはいえ、明らかにレベルが高いであろう敵を果たして仕留められるのかとイグニスは慎重に思考する。

此処は相手の出方によつて対応を変えて行こう、と指示を出すが、途中まで言いかけた所でモンスター達が一斉にノクティスに向かつて進撃を開始する。

まるで弾丸の様な高速な距離の詰め方に圧巻されてしまい、咄嗟に叫びを上げてしまう。

ノクティスも彼なりに応戦し、先程の戦闘の感覚を思い出し、右手に武器を召喚するイメージを強くし、

やがてその手を相対する的に向かつて伸ばして一気にイメージの剣を相手に向かつて突き出す！

すると弾丸が血飛沫を上げて急停止を行い、動搖を上げる周りを差し置いて、急所近くに刺さつた剣を抜こうともがく姿が出来上がった。

しかし王は気を緩めない。すぐ様シフトによつて刺さつている剣へと移動してトドメの押し突きをして倒した後、驚き戸惑つてゐる残りの敵を大振りの大剣を召喚して一気に切斷する。

気持ちのいい程にスパッと切り落として行くその異様な光景に、警戒のし過ぎだつたかと、これにはイグニスも失笑するしか無かつた。「どうなつてゐるんだ…まさかと思うが、ルシスの時の経験値がそのまま今の体に全てのしかかつた訳では無いよな…？」

「んや？ 歴代の王が言うには、力の一端を少しづつ取り戻していくらしい。本来の力に戻るには暫く時間がかかるらしいけど、巨神の前辺りの俺までは力が戻つてゐんじやねえかな」

「それにしては都合が良すぎる程に順調過ぎないか…つ…！」

「あ、やつぱりな。後ろは任せたぜ、イグニス」

進みが良すぎるという予感に的中したのか、ノクティスの背後の気配を瞬時に捉えた軍師は、同じく召喚した双剣を構え、確実に一体一体に致命傷を追わせる程の連撃をしていく。

その嵐のような斬撃に元々疲労困憊だつたモンスター達は為す術もなく、踊りを踊るように暴れながら今度こそ消滅した。

「ゆーでお前も感覺戻つてるんじやいだだだだだ!! はにほっぺはひつぱつへんわ!!（何ほつぺた引つ張つてんだ!!）

「何ででは無い！ 当然のように自分の残したものを見に押し付けるな!! 油断するなとあれほど言つてゐるだらう！」

「わーつは!! わーつはから!! いはいいはい!!」

残党を屠つた軍師は激昂しながら王の頬を捻り、観念するまで捻り続けた。

やはり心配をかけさせる事が連續していたからだろう。知らず知らずのうちに彼の過保護の度合いが増していた。

「悪いって…次からは油断しねえから」

「全く…手分けさなくて正解だつたと心から思う」

滯在していた空間から、距離も時間もだいぶ経つたことだろう。
訓練の時に訪れた場の何倍にも入り乱れている複雑な地形を、2人はひよいひよいと軽い身のこなしでアスレチックのように進んで行く。

それもやはり、ルシスでの記憶が戻った事により冒険での経験が身体に再び染み込み始めているのだろう。

時々あの時よりも大分軽い、のような余裕の口振りを見せつつ、されど神経を張り巡らせて奥へ、奥へと身体を進ませた。

「そういうや、お前嫁さんが居るだろ？」

置いてきて大丈夫なのかよ？ 行く事も伝えてねえ感じだけど「よ…まだ婚約はしていないとあれほど…」

…そうだな。あの時、2人でその事を話したとはいえ、本当にこの緊急事態が起きたとなれば：彼女はどう思うだろうか…」

「そりやそりや。その様子じや、行かせたくないって言われた様だしな。ある程度はな」

進行を止めずに進み続ける彼等だが、気になつた事や伝えておきたい事は口に出しながら搜索を続けていた。

ノクティスは、イグニスが愛子としばしの別れをしてここに来た事を気にしている様で、またイグニスも、実際の所彼女はどうしているのだろうかと不安にもなつっていた。

「…必ず帰つてくるとは約束したんだろ？ だつたら元気な顔を見せれば良いだけだと思うが…分かつても申し訳なさがあるのか？」

「…そうだな。だが、お前の言う通りだ。開き直りの様にも感じてしまうだろうが…それでも、悲しませてしまつた分も帰つた時に彼女の隣に居ようと思う。

…我儘だとは思うが…俺はお前との友情も、彼女との日々も、どちら

らも手放したくないからな」

「…はあ!? だからそういう事を面と向かつて言うんじやねえつづーの!! //

恥ずいんだよ全く…!

…まあ、それが分かつてゐなら大丈夫なんじやねえの? 帰つた時、先生の我儘沢山聞いてやれよ?

…泣かせたりなんてしたらどうなるかは分かつてゐよな?』

「お前は愛子先生の父か何かなのか!?

…安心しろ。愛子先生を泣かせるつもりは無い。生涯を尽くして愛すつもりだ」

「ほお〜? 愛子 先 生 ね? それにどのぐらい愛すつもりなん

d

「べらべら喋つてないでとつと歩け腑抜け王!!」

羞恥心を、羞恥心を煽る発言で対抗していくノクティスに耳まで赤くし、我慢の限界に達したイグニスは勢い良く王を蹴飛ばす。

これが臣下達の前であつたら即斬首刑なのだろうが、生憎と今は王の責務から開放された親友である為、何より人の目が無いため喧嘩に発展するだけで終わつた。

「…おいイグニス」

「…なんだノクト。もう冷やかしは受け付けんぞ」

「ちげえよ。…なんか水の音が聞こえねえか?」

「水…? …確認だ。前に進むぞ」

ノクティスのふとした注意により、水のようなぴちゃん、ぴちゃんと鳴る音を察知した2人。

その音はどうやら前からしていた様だが、怒り声を上げながら進んで行くうちにどんどん大きくなつていつたようだ。

その音だけを頼りに前へ前へと進むと、そこは2人が拠点としていた所のよう開けており、その奥には小さな水の滝が姿を見せた。

そこから染みた水が天井少しだけ這い、先程の音をしていたようなのである。

「…ふう…また振り出しか」

「…進んでいるだけマシだと思え。まだまだ道のりは長そうだ。気を抜くなよ」

そういうものの、少しだけ緊張が解けた2人は、少々その場に座り込んでしまう。いくら先頭の経験が馴染んできたと言つても、此処での彼等はただの学生がいきなり力を貰つた状態。

身体がまだ全ての力を制御できるまで育つていないので。これこそが正に、夜叉王がノクテイスに忠告した理由。

「…それにしても、此処は大分広いな」

「ああ。所々傷のようなものがあつたり、何かが強引に空間を広げたようにも感じるが…」

「…傷？」

「…!! イグニス、伏せろ!!」

そして、イグニスが空間の違和感に疑問を感じた直後だった。ノクテイスの怒号と共に繰り出されたシフト攻撃が、イグニス：の背後へと飛んでいく。

鉱石に弾かれたような、鈍い音が響き渡る。

『グルウ…グアアアアアアアアアアアアアア!!』

獲物としていた人間に初手を持つてかれたのが余程頭にきたのか、怒り狂った様に雄叫びを上げる恐竜の様な怪物が、爛々とした眼で食糧を見据える。

「スマートアイが現れた時点でこうなる事は分かつていたが…やはり何故ルシスの怪物が姿を表しているのかを調べる必要がありそうだな」

「ああ…にしても最悪だ。こんな所でバンダースナッチに出くわすなんてな…」

「バンダースナッチ。巨大な双牙を用いて、怒りによつて戦闘力を倍加させるまさに凶暴な猛者。

かつてノクテイス達の前に3度も立ちはだかり、骨を折らせ続けて来た厄介極まりない相手である。

本来の力が覚醒したノクテイス達にはもう到底及ばない相手ではあるものの、現在の不完全な状態での戦闘はかなりの劣勢を強いられ

るだろう。

「…イグニス。俺が引き付ける。その隙に足を狙え」

「了解だ。残りの必要な指示は俺が出す」

「っしゃ！ 来いや牙野郎!! 俺が相手だ！」

ノクティスが孤立したのを確認したバンダースナッチは、好機とばかりに喰らい尽くそうと突進を始める。

突進しか頭がない馬鹿しかいねえのか、と悪態を付きつつ、接近してきた頭を剣で叩きつける…ということはせず、攻撃を受け止める形で凌いだ。

1つの剣を持つ青年に怪物が気をとられていると、背後から接近する気配を感じ、下半身の神経に力を入れ始め、自らの尾を振るう。

「…そこだ！」

その猛威に背後の気配、イグニスは直撃する数距離手前で体を極限まで屈め、魔の尾を躊躇目的の足を捉え、交わる2つの剣の斬撃を擊ち込む。

が、

「…ぐつ!?

が、鉄鉱石に一撃を加えたような鈍い音が響き渡り、イグニスは両手の危険を察知していち早く退却した。

「どうやら、ルシスの頃よりも外殻が発達しているようだな。前ではこんな事は有り得なかつた」

「堅くて刃が通らねえとか、詰んでんじやねえか！」

冷静に分析を立てているが、イグニスはかなり動搖を見せていた。

親友の仲で無ければ気が付かない些細な余裕の変化だが、それでも状況的に最悪なのは確かである。

連續で攻撃を加えるにしても、傷一つつかないのならどう対処せよとの事だ。

味方は焦るばかりだが、一方の敵は一切の妥協も容赦も無いようだ。

隻眼の悪魔 スモークアイのようにグルグルと嬉しそうに喉を鳴

らしながら、彼等が苦戦する姿を愉悦する様に反撃を仕出していく。

「！ イグニス！ 背面に飛べ!!」

「！」

ノクティスの助言に操られると、パツクリと咥えられてしまうのでは無いか
へと後退していく。

前に焦点を合わせると、パツクリと咥えられてしまうのでは無いか
と言われる程に口をあんぐりと開けたバンダースナツチが急接近し
ていた。

ノクティスの指示によつて捕食を免れたイグニスだったが、咄嗟に
反応してしまつた為に背中を地面に打ち付けてしまう。それにより、
少しばかり動きが鈍くなつてしまつた。

「…っ！」

すぐに捕食しても逃げられると判断したのか、バンダースナツチは
器用な足を軽々と持ち上げ、イグニスを潰そうと一気にスタンプを繰
り出していく。

「させねえ、ぞ!!」

その魔の手はノクティスの剣戟によつてまたもや阻まれる。足に
向かつて懇親の力を込めた突きを放たれ、その威力は通らずとも狙い
を不安定にするには充分すぎたのだ。

が、その代償を寄越せと言わんばかりに、スタンプに失敗した足を
中心として、大きな回転を起こし再びの尾による攻撃をし、ノクティ
スを怒りのままに吹き飛ばしていく。

「ぐああああああああ!!」

力のかかる方に吹つ飛ばされていくノクティスは、やがて壁に激突
しイグニスとは比べ物にならない衝撃を喰らい崩れてしまう。

ガラガラと音を立てる壁の残骸に埋もれ、その光景に愉悦感を上昇
していくスナツチは、その有様を見た後に喰らつてやろうとの様
に崩落した壁の一部へと接近する。

「グルアアアア…」

「グル？」

自慢の牙を使い、岩をせつせとどかしていくが、そこに目に映つた

のは、もぬけの殻となつた崩落した岩のみ。

呆けた様に佇むことしかできないスナツチ。

その少し離れた所にて。

「…ふう。助かつたぜイグニス。お前のスキルのお陰だな」

「ああ。ルシスの時から仕組みは分からないが、便利なのは変わらないな。これは」

かなりの距離を開けられたはずの2人が、丁度スナツチから見えない位置に合流していたのだ。

その原因是、イグニスの1つのスキルにある。

その名は、ギヤザリング。

そのスキルは、一定範囲内であれば、どれだけ仲間が離れても呼びかけ1つで集合させる事が出来る隠れチートの様なスキルであり、軍師である彼にとつてはうつてつけなのだ。

「…だが、どうする。攻撃が通らない現状で、これ以上の戦闘はかなり危険だ。こんな所でくたばる訳には行かないぞ」

「そりやコツチも同じだ。まだまだやりてえ事いっぞいあんのに、こんな所で無情に殺されてたまるかよ」

絶体絶命の時の奮起の言葉なのであろうが、その言葉はイグニスの胸にはしつかりと刺さつた。

ノクティスは確かに王の使命を全うしたが、それは聞こえの良い部分ではそうなのかもしれないが、

悪く捉えて考えると、星の病を抹消する為の生贊として理不尽な運命に左右され、運命に殺されたと言つても過言では無いのだから。

そしてそこまで思い浮かべた上でイグニスは再思考する。これ以上、理不尽な猛威にノクトを晒してたまるか。と。その為にここまでやつてきたのだ。泣き言を言うよりも、力を奮え！ と。

不安に駆られていた自信を奮い立たせ、状況を冷静に判断しようとしている王に、即座に考えた作戦を話す。

「…ノクト。魔法精製は使えるか？」

「あ？ …まあ、今の俺にどれくらいの威力が作れるか分からねえが、魔力が続く限りは出来る」

「ああ。それなら大丈夫だ。…少し頼めるか？ それまでお前の安全は俺が守ろう」

「はつ。今更何くせえ事言つてんだ。俺はお前の親友だ。地獄の果まで付き合うつての」

隠れ、闘志を掲げ始めた2人は、反撃の狼煙を上げる。

やがて、とうとう2人の気配を察知したスナツチが、見つけたぞと威圧をかけて今度こそはと暴れ回る。

今までとは比べ物にならない程に怒り狂つてゐるようで、今までの遊びのようでは無く本気で殺しに來てることが見て判断できる。

「…数秒だけ遊び相手を努めよう。わいてこい！」

『ガルルアアアアアアアアアアアア!!!!』

もう遊びは充分だ。殺してやる。確かにそう聞こえた。
が、イグニスは恐れない。

もう恐怖を感じ、不安で押しつぶされるのは嫌という程味わつた。
ならば、どのような策であろうと、生きる為に尽力する。

「南雲。…お前の武器、最大限に活かさせてもらうぞ。

⋮雷よ纏え!!」

瞬間、イグニスの装備していた双剣が、緑黄の光を灯し始める。
まるでイグニスと共に鳴している様にバチバチと音を立てるその剣は、彼等を痛めつけた獲物を灰にせんと、その電力の放出量をあげている。

それだけで終わればいいものの、イグニスの身体も悲鳴をあげる。
ガクガクと膝が笑いだし、今にも地面と一体化しそうな程にくらくらしている。

「…つ、やはりまだ今の俺には強力過ぎる…か…！」

自らにも負荷がかかっている…！」

突如として現れた雷に少し怯えた様子だつたバンダースナツチだが、敵の弱つた様子を見て一切の怯えを無くしてしまう。喰らつてしまえばいいと、ひき肉にしてしまおうとその牙を向ける。

しかし、その判断は数分後直ぐに相応しくないと知る事になる。

「ハア!!」

雷の力を持った剣から放たれる一撃一撃は、やはり通じる事は無いのだがそれでも、直撃する度に呻き声を上げている事から、バンダースナツチは雷に弱いのだろう。

しかし、決定的な破壊力が足りず、どうしても倒すまでは至らない。が、そんな事は百も承知のかの如く。

イグニスは雷の舞を止める事をしない。

もはやがむしやらに攻撃を出すスナツチをギリギリの位置で全て躰し、そのお返しに一つ一つの電撃を手、足、背、顔、牙、尾全てに確実に当てるいく。

するとどうだろう。堅く、攻撃が通らないはずのバンダースナツチの外殻が段々と剥がれ始めたでは無いか。

どうやらあの外殻は雷に滅法弱いのだろう。だから雷を察知した時、怯えを見せたのだ。

「…今が好機と見た！」

イグニスは隙を逃さない。剥がれ始めた外殻に集中し皮を剥いでいく様に、周辺の外殻をひつぺがしていく。

その度にバンダースナツチは悲鳴のような唸り声をあげ、もう先程の愉悦を出す姿はどこにも見られなかつた。

(だが、やはり決め手には欠ける。

：頼んでいて勝手だが、早く完成しろと思つてしまるのは…俺達が平和を慣れ親しんだせいなのかもな)

「イグニス！　出来たぞ！　受け取れえええええ！」

タイミングを見計らつた様に叫びを上げたノクティス方向から、何かを投げられる。それは正にイグニスが頼んだものその物だつた。

「でかしたノクト！」

…さあ、仕上げだ！」

「巻き込まれんなよ！ それは今上げられるだけ威力を上げたサン
ダー・サンダラだからな！」

舐めてるとお前まで丸焦げになるぞ！」

ああ、そんなへマをするつもりはない!」

イグニスはその忠告を聞き入れたと同時に、そのサンダラが封じ込められている瓶を全力投球で獲物へと投げる。

くらいの雷が漏れだして いるその瓶に、

先程の忠告の意味をすぐさま理解した

そして全体力を行使して体勢を崩すことなく、今度は倒れる事もなく退避を成功させる。

そして、相手の外殻に激突したその瞬間。

!

漫画によくある骨まで見えるような感電を起こし、バンダースナップ

升か雷の力に翻弄される姿の出来上かりである

す術もない様だ。

卷之三

やがて、抵抗を止めたバンダースナツチは恨みの視線を一人に向け、静かに倒れ伏した。もうスナツチには暴れる力も残つておらず、そのまま意識を永遠の闇の中に彷徨わせたのだった。

「ああ。手強い奴だつたぜ全く」

再び合流した2人は、自然な流れで手を掴み合う。

記憶を戻して再会してすぐとは思えない協力を見せた2人は握り合った。

戦闘を終えた2人はすべきことを済ませ、滝のように流れる小さな

水の正体を突き止めた。

この滝は先程ノクテイス達がいた場所と繋がっており、更に下へも続いているということだ。

此処から下へ行くものなら、最短ショートカットが出来そうであるが、あまりおすすめが出来ない事は承知の上である。

先ず、次こそ絶対的な安全があるとは限らない。死ぬ事は無いだろうが、無事に辿り着くとも難しいのだ。

もう1つは、仮にハジメがどの段階まで潜ってしまつたかによつて、この行動が無謀か最善かが変わるのだ。

するにしても、選択は慎重にしなければならない。
「んー…下へ続いてるかもしれないけどなあ…：アイツが何処まで言つてるかが分からねえと…」

「…!! ノクト!!」

彼等を休ませる術はこの迷宮には無いらしい。

バンダースナッチの消息を知らせたのか、それとも野生の性なのか。先程のバンダースナッチの群れが押し寄せてきていた。

「…はあ!? なんでこんな時ばっかり群がるんだよテメエら!!」

「此処は言わば敵の巣窟のようなものだ。俺達のような異分子が休める場所は無いのだろう」

そうだ。お前達はおれ達の獲物だ。大人しく喰われる。

先程のバンダースナッチの様な獰猛な姿勢の大群が、そう言つてゐかのように2人を追い詰め始める。

「どうする。サンダラを酷使して来た道を振り切るか?」

「それでもいいが、俺達が巻き込まれるぞ? あの威力じや、この場が持つとも限らねえ。

シフトを使つたとしても…切り抜けた先で先制されたらタダじや済まないかもな…」

もう、選択肢はたつたひとつしか残されてないようだ。

強行突破しても、自滅を辿るだけ。

そもそも、この数は無謀ともなる。

「……なあ。ノクト。此処で言うのも何だが、この階層に南雲がいると
考えられるか？」

「いや、この階層は…気配も微塵もなかつたからな…よく良く考えれば…。

「でもよ、もしも降りた先よりも上に居たとしたら、かなりの痛手じゃないか？」

「だがノクト。此処で死ねば、救えるはずの南雲にも手が届かない。ならば、手段は限られるだろう」

… そうがよ！」

ノクテイスはおもむろに立ち上がり、イグニスの手を取つて水場へと走り込む。

「イグニス！ 此処から飛び降りたら、上も下もなく捜索するからな。もしかしたら今よりも過酷な状況になるかもしけねえ。それでもちゃんと着いてくれんのか？」

「当然だ！」お前の暴走に幾らでも付き合ってやるぞ。

「おやじ」

彼等は意を決して、水の中へと飛び込む。

が、その落ちる先に僅かな希望をのせ、最前の選択へとなるように。

「イグニスううう!!」

水の勢いが強いのと、落下速度が早すぎるのダブルパンチにより、絶賛もがき苦しみ中だつた。

：果たして無事に辿り着くのやら。

「…ハアツ…ハアツ…」

大きな球体の結晶の光に照らされた一人の男が、今にも消えてしまいそうな息を上げながら苦しみと戦っていた。

その姿は見るも無惨で、左肩から先が無くなつており余程の何かに襲われたようだ。

その表情は怯えに染まつており、絶望しか映さない瞳で結晶を見つめるだけだった。

「この…まま…死ぬのかな…？　まだやりたい事とか…いっぱいあつたのに…」

しら、さきさん…イグ、ニスせん…せい…グラ、デイオラスせんせい…プロ…ンプト…せんぱ…い…

ノク…ティス…せん…ぱい…

誰か…助けて…」

『見るも無惨だな？お前』

(…誰？　それに…あれ？　此処は…僕はさつきまで洞窟の穴の中にいたはず…じゃあこのふわふわしたオーロラみたいな場所は…あれ…？　あの姿は…僕？)

『ああ。僕の姿は確かにお前だ。

さあ、狂つてもらうぞ？ それがお前の運命なのだから。 南雲ハジメ

メ』

焦燥と月

「…まだ頭がグラグラしやがる…」

「調子に乗り過ぎたな…まさか真っ逆さまに落下するとは…。あれだけの高さから落ちても無事だとは俺も驚いたが…」

水の滝を辿つて見事な程に落下した2人は、逆さまに落ちたというにまるで石頭が役立つた様に目立つた外傷は無かつた。頭にヒビ所では済まない筈なのに、頭のぐらつきを訴える他はケロツとしている。

見るからに不思議だが、無事だつたのなら何も言う事は無いだろう。

それに彼等は、立ち止まる事など許せないのである。これは人の救出がかかっている賭けに買ったのだ。何時までも痛みと戦っている暇などない。

「いつつ…こんな事をしてる時でもハジメは苦しんでるかもしけねえ。先を急ぐぞ」

「…」

「おい。何泣いてんだよイグニス。もう泣くのは止めるつて言つただろ」

「いや、違う。これはそうだ。お前の貫禄の出る成長に脳が追いつかず、目頭が熱くなっているだけだ。そう、容量不足と言うやつだ」

「御自慢の頭脳はどうしたテメエ!? 見苦しい言い訳にしか聞こえねえよ!! つたく…この世界に来てから過保護だと思つたら、涙脆弱くなつてんのかよ…。」

…まあ、俺が逃げてたらこんな気持ちも味わえなかつたと思うと、新鮮な気もするか」

しみじみする気持ちをそれくらいに抑え、また前のように進むべきと思う道をひたすら進み続ける。歩みを止めないことによつて、常に景色が移り変わり移り変わりを繰り返していく。それはもう目眩を

引き起こす程に。

歩み続けるその先は飽きる程の洞窟続きで、時々現れる兎の様な魔物を、シフトや連携を駆使した戦法で軽く捻りながら急げに前に進む。

時々何かを見落としそうになる様にこの風景に影響を受けると、その心情を察した様に隠し扉だというよう口を開ける穴が現れる。

誘い込まれる様に入つてみると、液体の入つた瓶の様な物が一つ転がっているだけの空間のみで、他に目を引かれる様な物はなかつた。

「ん？ これは…魔道ブースト剤か…？」

ノクティスが瓶を手に取つて発した言葉は、この瓶の名称と思わしき名前。魔道ブースト剤というものだと言う。

その名の通り、この薬は魔力の上限を一時的に無限にまで引き上げ、服用者の魔力スキルを極限にまで引き出すアイテムなのだが、これは元々ルシスに存在していたアイテムでトータスに存在する事は有り得ないに等しい代物なのだ。

では何故こんな所にあるのだろうか。

「…あのスマートアイと言い、バンダースナッチと言い…このアイテム…明らかに空間的に何か異常が起きている事は確定だろう。でなければ此処まで続けての転移など説明が付かない」

「待てよ。その説が正しいってことは、あの時の鳥とかモルボルとかが召喚される可能性もあるって事が…？」

「…否定は出来ない。だが逆も考えると、俺達を助けて来たアイテムもこちら側に来ている可能性もある。ポーションの精製は出来るが、そんな状態でも役に立つアイテムが手に入るかもしれない。良く詮索してみよう」

「ああ。取り敢えずこのアイテムはお前に預けとく」

拾つたアイテムをイグニスに投げ渡すと、ノクティスは穴から出て再び洞窟の世界へと舞い戻る。それからも幾つか目立つ穴が見つかり、そこから様々なるシステムのアイテムが手に入ったのだが、手に入れば手に入る程、謎は増していくばかりだった。

そしてその疑問は、やがて刻々と大きなモノへと変わり始める事

は、今の彼等にはまだ必要のない話。

休息を挟みつつ探索を進め続けて早3日が経った。

3日前から大分道も進み、行く手を阻む敵の数も増え、更に微かに耐久力も強くなっている感覚があつた。

その感覚さえも僅かという時点で、ノクティス達が今どのくらいまで力をつけているのかが分かつてしまふのだから、恐ろしい物だ。因みに今のノクティス達のステータスはこの様になつていてる。

ノクティス・ルシス・チエラム 18歳（30）

男 レベル5（35）

天職 真の王

筋力	250	（1000）
体力	300	（1500）
耐性	160	（800）
敏捷	160	（800）
魔力	800	（3000）
耐魔	120	（600）

技能 言語理解 武器召喚 武器収納 魔法精製 ポーション
ボックス シフト シフトブレイク 高速魔力回復 ファントム
ソード召喚 連携特化 連撃時攻撃力上昇 衝撃力耐性 王の威圧
??? ??? ??? |

イグニス・スキエンティア 25歳（32） 男 レベル5（30）

天職 王の頭脳

筋力	160	（800）
体力	300	（1200）
耐性	250	（1300）
敏捷	140	（1500）

魔力	100 (400)
耐魔	160 (520)
技能	言語理解 レシピドーム 料理保管 料理複製 状況把握
強制集合 (ギヤザリング)	マーク 連携特化 ボーシヨンボック
ス 戦術瞬間一致 ダガー属性切替 擬似魔力操作 連撃時速度	速度上昇 衝撃力耐性 軍師の見切り
速度上昇 衝撃力耐性 軍師の見切り	速度上昇 衝撃力耐性 軍師の見切り
???	???
となつていてる。	となつていてる。
ルシスでは表現の仕様のなかつた特性が、技能という欄が表示された事によつてそれらしい言語で表されるようになつたからか、今の段階でもかなりの即戦力並みの、いや軽く反則を超えるステータスとなつてゐる。そしてこれに更に付与されると考えると、恐ろしさを通り越して号泣する。	ルシスでは表現の仕様のなかつた特性が、技能という欄が表示された事によつてそれらしい言語で表されるようになつたからか、今の段階でもかなりの即戦力並みの、いや軽く反則を超えるステータスとなつてゐる。そしてこれに更に付与されると考えると、恐ろしさを通り越して号泣する。
それぞれ追加された技能を使用して、その場にあつた戦闘方法で道を切り開いていく。その判断すらも、イグニスの状況把握や戦術瞬間一致によつて高速で行われる為、立ち止まる事すらない。	それぞれ追加された技能を使用して、その場にあつた戦闘方法で道を切り開いていく。その判断すらも、イグニスの状況把握や戦術瞬間一致によつて高速で行われる為、立ち止まる事すらない。
順調に捜索を続行していると、ふと、足元の色に違和感を感じたイグニスが不審に思い、よく確認する。そうすると、黒い洞窟の地に、明らかに不自然な赤色の乾いた色の何かが付着していた。	順調に捜索を続行していると、ふと、足元の色に違和感を感じたイグニスが不審に思い、よく確認する。そうすると、黒い洞窟の地に、明らかに不自然な赤色の乾いた色の何かが付着していた。
「これは…まさか血？」	「これは…まさか血？」
「なんだと？」	「なんだと？」
「しかもこれ程の色は恐らく人間の物。そして、まだ新しい。…これはまさか」	「しかもこれ程の色はハジメの物…」
嫌でもこここの血はハジメの物に近いという結論に、少しばかり動揺を隠せずに曝け出してしまう2人。しかし、その嫌な想像を振り切り、状況把握を駆使して希望を見出す。	嫌でもこここの血はハジメの物に近いという結論に、少しばかり動揺を隠せずに曝け出してしまう2人。しかし、その嫌な想像を振り切り、状況把握を駆使して希望を見出す。
「…恐らくだがここら辺の何かと争い、重傷を負つて彼処の穴に向かつて撤退したのだろう。血が水滴の様に点々として彼処に繋がつてる」	「…恐らくだがここら辺の何かと争い、重傷を負つて彼処の穴に向かつて撤退したのだろう。血が水滴の様に点々として彼処に繋がつてる」

「つまり、彼処に居る可能性が高いって事か？」

「いや、新しい血と言つても、ここ數十日前のものだと推測する事から、彼処に今も隠れているとは確定出来ない。もしかすると、脱出を目指して奥に進んだ場合もある」

進んでみるかと言うイグニスの間に、数秒も开かせずに頷くノクティス。一刻も早くハジメの無事な姿を確認したい二人は、バクバクし始める心臓を必死に落ち着かせながら穴へと入り込んで行つた。

「やはり、誰も居ない…いや待て。ここに僅かだが、何かを貪つたような、生活の跡のような物がある」

「マジか…でも、これも大分経つちまつた様だな…」

穴を潜り抜けた先には予想通り誰も居なかつたのだが、その場には食事を通した誰かが過ごした痕跡があり、望んでいた微かな希望が見えた。のだが、直ぐにそれも1つの恐怖にかき消されてしまう。

「待てよ…でもここつて食料も何も無かつただろ？ もしこれがハジメの痕跡だとして、何を食つたんだ…？」

「植物とか…も確認は出来なかつた…。とすると、魔物の…？」

「は…!? それが本当なら身体が持たねえぞ…!! 早く飯を食わせねえと!!」

「落ち着けノクト。冷静さを早速欠いているぞ。

此処に侵入した途端に魔物が寄り付かなくなつた。だと言うのに、此処で生活を行つていた誰かは此処に魔物の肉らしき物を持ち込んで食していた。そして、その肉片は大分腐食が経つたものからまだ真新しい物もある…。

魔物の肉は強力な毒を持つと言われる。それ故に一欠片でも喰らえば身体が持たない筈だ。それが長持ちしているという事は…恐らく、この空間に何らかの物体があり、それが南雲の毒を中和したと推測する。その証拠に、そこ。少し無理やり何かを取り出したような跡

がある

「…それはつまり」

「ああ。もしこの正体が南雲だとして想定すると、南雲は生きている可能性が高いという事だ。

確かに俺達は南雲を見つけた訳じやない。だが、自然の一つ一つの奇跡は、俺達に味方してくれていてるのかも知れない」

もう技能と言うよりも個人の力なのでは無いかという分析で、想定の先までも予測していく。縋っていると感じられるかも知れないが、その縋りの発想さえも疑う事の出来ない一つの可能性として成り立つ。

ノクティスは顔を顰めながら、イグニスが口に出す憶測と分析の結果を真摯に受け止める。全く希望の無いよりは、1本の髪程の望みに賭けるように、また此処での探索を終えて更に奥へ進もうと迷宮の通路を探し、足を向けた。

「気を付けろノクト！ ハンドレッグはお前の苦手なモンスターだと
は思うが、堪えてくれ！」

「堪えてくれつてお前完全に克服した訳じやねえぞ！ ああああ虫は
嫌いなんだつづーの!!」

「デュアルホーンか…。あの角を上手く躱す事が出来れば…」

「…いや待てイグニス。あの数は躱せないわ…！」

魔法で一掃だろ

「お前こそ待て！ こんな狭い所で魔法を繰り出してみろ!! 自爆行
為にも等しいぞ!!」

「…ノクト。今日はカルパツチョだ。野菜の部分もちやんと食べるん
だぞ」

「うげ…。まあ、食わねえよりは……んぐお…ん…魚の部分はう
めえ」

「…野菜の部分は…」

「…聞くなつての…」

「…はあ…」

「…手掛けりも、何もあれからなしか…」

何度目の戦闘だろう。

何度目の休息だろう。

何度目の溜息だろう。

二人が想定するよりも、オルクス大迷宮の下層はその名の通りの大迷宮を構えており、もうその迷宮の広さに呑まれかけていた。

こうしている間にも、一握りの希望が無くなつてしまふかも知れないと言うのに、迷宮が、地形が、魔物が前に立ちはだかり予定通りに進出が困難なのだ。

その困難を潛り抜けてでも、捜索できるだけの範囲は全て捜索し尽くした二人は現在、魔物の血の濃厚な臭いに包まれて最悪な心持ちのまま、如何にも何かが待ち受けている扉の前にある程度の身支度を整えている。

捜索優先とはいえ、血の臭いやら空腹やらを味わつたままで益々支障がきたされるから故、工夫を加えて水を浴び、軽い食事で体調を整える。やつている事は何時もの繰り返し。けれど、日に日に表情に余裕が無くなつて来る事だけが、繰り返しの僅かな変化だ。

「…この扉…どう思う」

「…何かしらあるとは考える。が…何だろうな…つい最近、此処で何かあつた気がする」

「何かつてなんだよ。…中に何が居るか分からねえのは確かだな…」「行くか？ ノクト。すぐ近くにもこの扉以外の道があるが、この道とは別に、別の下層に繋がる扉かもしれないぞ」

「でもそうとも決まつた訳じやねえだろ。手当り次第怪しい所は探るつて決めて来てんだ。行くぞ」

「…分かつた。だが、無理と判断すれば一旦引き返すぞ」「りよーかい」

畠等を承知で、意を決した二人は扉を開ける。

ギギギと古臭つた音と共に、左右対称の絵柄の片方が闇に包まれる。その闇が作つた切り目へと、2人は吸い込まれていく。

闇が広がつてゐる故に視界が物体を感知する事は無い。ただただ足に感じる硬い床を踏み締めながら、前に前に歩んでいく。

「…」の闇の中を彷徨う感じも、懐かしいな」

「だな。エレベーターを動かして進んだら、モンスターに道を塞がれて…。そん時はうざつたかったけど、今はなんか思い出す記憶の1部になつてるわ」

「あの後焦つたお前が、細道から間抜けな声を出してすつ転がつたのも思い出す」

「お前ひよつとしなくてもSだろ。サドだろ。そんな泥記憶呼び覚ますんじやねえよおおおお…」

まさかとは思うが、愛子先生にもそんな調子じやねえよな」

「な…そんな訳が無いだろう。彼女にそんな真似ができる訳が無い」

「…ふーん？」

「…なんだその目は。何も間違つた事は言つてないぞ」

「1回愛子先生からイグニス先生は意地悪だつて真つ赤になりながら俺の所に怒りながら自慢して來たんだが…あれは何だつたのかねえ」「うぐつ…そ、それは聞かないでくれ…」

「今のお前の心の中を当てるやろうか？　あん時は初だつたノクトがこんな冗談を言う立場になつたのか…だろ？　それと、もう少し優しくするべきだつて」

「人の心の中を捏造するな…!!」

「んー？　事実を言われたくないだけなんじやねえの？」

「もう分かつた…俺がからかい過ぎたのが悪かつたから…」

日常会話を続け、場を和ませようとするふたりだが、その心の奥の様子は再び言つたが余裕が無い。その証拠なのか、ノクティスとイグニスの反論の仕方に勢いが無くなつてゐる。

2人はそれに気づく様子は無いが、疲労が自然と行動に出る程には疲弊していると言うのだろう。その代わりに、周りへの警戒心だけは研ぎ澄まされていた。

故に、急な視界の発光に対応する事が出来たのだ。

「ノクト！　目を塞げ！」

「もうやつてる！　お陰様で目眩ましは喰らつてねえ！」

「良い反応だ！」

突然の閃光に対応した2人は、瞼の外で感じる光が弱まるのを感じると、恐る恐ると目を外の世界へと向ける。

「さて、こんな事をしやがつたのは……つ…お前は…？」

『ようやく目覚めたのですね。ノクティス。そしてその軍師たるイグニス』

2人の目に映し出されるのを待っていたかのように光が集まり、具体化したのは人の形だった。ノイズのかかったアルトボイスを響かせ、まるで知り合いのように2人に発言を交わす。

「アンタは…誰だ？　顔が全然見えないんだが…」

『…面白いのですが、今の私に全てを曝け出して話す力は残つていません。なので、最低限の魔力による遠距離会話を行つてはいる次第なのです』

「…そうか。だから光で象った人型しか投影することが出来ないという事か」

『流石は王の頭脳。予想が早いですね』

今対話している女性、と予想される光は指摘通り、僅かながらに口が動いているように見える以外は何の情報が得られない発光をしている。

脳に直接話し掛けられているような音の震えを届けられながら、ノクティス達は彼女の話に応じていく。

『必要最低限の事を話させていただきます。まず、貴方々が探されている人達は、生きています。この迷宮のこれより下の階層に』

「…！ 本当か！」

「…」

謎の人物からの希望の言葉。この言葉一つでノクティスの顔にみるみる活気が戻っていく。しかし、この迷宮の広さは2人が身をもつて知っている。場所を知ったとしても、そこまでに合流する事が出来るか…。

『…では、特別に一人にこの動物の力を貸してしまよう。速さには自信がある子達なので、十分に協力し合ってください』

「は？ なにを…って!?」

光が指を鳴らすと、その前付近に新たな光が形成されていき、次は鳥型へと形を変え始め、黄色のノクティス達には見慣れたあの鳥が姿を表した。

「クエエエ！」

「クエエエ？」

「…この感触、懐かしいな」

「…ああ。本当に。チヨコボの羽毛を触るのは」

ノクティス達をつぶらな瞳に写したチヨコボ達は、警戒すること無くその身を擦り付けるように出会いを喜ぶ。懐いているようだ。

前世界で、ノクティス達がこの鳥のことをどれだけ可愛がり、頼つていたかが分かる様子である。

『この子達は人に懐きやすく、人の気配を感じ取りやすい敏感なのです。きっと貴方達の探し人も見つかるでしょう』

「そか。ありがとな。態々俺達のために」

『…正確には、貴方よりも貴方を想う人の為なのですが…私自身も貴方には幸せを掴んで欲しいのでまあ良しとしましょう』

「…！ まさか…」

そう言えば、もう1人の探してゐる人とは…

『そして、もう1人：月の人は、この迷宮の真相を一人で抱え込んだ人物の試練の場で、安息の時を過ごしています』

「月の…」

「試練の場…?」

疑問を口にする彼等と共に、光がだんだんと拡散していく。すると、見えない女性が焦りを声にのせ始める。

『…つ…もう時間ですか…』

ノクティス。今度こそ…私の…し…ゆう…との…し…あ…せを…
つ…で…』

「? おい!」

回線の悪い携帯のようにブツ切りを繰り返す声を必死に届ける光は、やがて虚しくも全てが光の粒へと変わり…そのまま消えていった。

「…魔法効果が切れたのか…」

「…月の人…」

「まさか…な…」

「ノクト…」

月の人という言葉を聞いた時から、顔に影が入り込んだノクティスは、うわ言のように繰り返している。そのノクティスに何かを感じたイグニスは、案じる様に背中を軽く叩く。

「重く捉えるな。お前はもう十分に重さを知ったんだ。これ以上背負い込む必要は無いんだ。

もし仮にあの方が生きているとするなら、幸せになつてやるという気持ちで出迎えてやれ。それが、俺達がお前に望む一つなのだから」

「…イグニス」

イグニスはそう言うと、クールなその口角を優しく、ふわりとあげて笑った。

イグニスはその言葉を口に出せるほど、ノクティスを信頼していた。だから、決められた使命を与えられ、世界の全てを背負わされた友を見守り続けた。使命を果たすことを思いつつも、人としての、生きる者の幸せを掴んで欲しいと願つたからこそ、この言葉には意味があるのだ。

「…ん。 そうだな」

イグニスからの激励に、頬を力強く叩きながら心配そうに顔を覗き込むチヨコボを撫でる。クルクルと気持ちの良さそうな音が聞こえ、比例するようノクティスの表情に淡さが灯る。

コウ…と言った洞窟の唸り声に押し負ける事の無いように、何度もになる膝の力を入れ、未来を掴むための踏ん張りを身に付ける。「今ので分かつた。まだ俺には受け入れ切れてない心があるって事が。…でも、俺はもう、自分の未来を掴むつて決めたからな。

…足がすくんだら、手を引っ張つてくれるか。イグニス

「ふつ…。今は俺だけじゃない。この子達も、だろ」

「クエッ!!」

「…そだつたな。

…うしつ。しょげんの終わり！ …こんなウジウジしてたら、またグラディオに怒られちまうからな

「ふつ。その意気だノクト」

騒がしく頼れる鳥達を得た二人は、沈む一方だつた気持ちを高め、諦める事を止める理由を得、再び再起をした。

「ひ…ひひ…あいつらが悪いんだ：俺の前でムカつくことばかりして…か、香織に手を出そうとする南雲も、ムカつくノクティスも…ヒヒ…」

グラディオラス達がホルアドの宿で休んでいる頃。夜の静けさの中に、一人の怪しい男が、気味の悪い悪笑を口から吹き出している。

人が通れば、ぞわりと背中が寒くなるような不気味さを醸し出し、此処には居ない誰かへの恨みを向ける。

「…へえ。やっぱり君だつたのかア…やっぱり碌でも無い連中なんだね。君達は」

「本当にね。ま、ボクは正直センセ以外のヒトには興味が無いからどうなろうと構わないんだけど♡」

「…!? お、お前らは…!!」

「あー。大声出すのは無し。此処夜だよ？ 近所迷惑ダメ。絶対ってね

」

「多分この子には無理だよ。だって、自分が中心だもん。迷惑だなんてきつとこの子の辞書には無いよー？」

「お、俺をどうする気だ…！ ま、まさか売る気じやねえよな!? 賴むよオ！ 俺は何もしてねえ！ 俺は俺は悪くねえんだよお!!」

「あー喚かない喚かない。大丈夫。君を売り飛ばしたりなんてしないさ。俺、何だかんだ優しいから…さ」

「ほ、ホントか!?」

「そーそー。だからさあ…

大人しく聞いてよ？ 檜山君ン？」

闇が似合うニビルで獰猛な笑みが、檜山の瞳を喰らつて離さない。

この日、歪んだ男は闇の糸に絡まつた。

荒んだ眼

静まり返った夜の町。その闇に紛れるように2人の男女が、へっぴり腰で逃げ惑う人を無様そうに見下ろしていた。闇と比例するように、その双方の瞳はどこまでも薄暗く、そして残忍な目付きをしていた。

「ねえねえ、先生え。良かったの？ アイツ、始末しておかなくて。絶対大した役にも立たないし、こつちが弱みをチラつかせたら何するか分からぬよ？」

その目を外すこと無く、少女の方がやや不満げな声色を口の動きに乗せて奏でる。それはかなり不服を宿しており、半端な理由では納得のいかない事を主張していた。

男はその不満すらも理解していたかのようにさわやかに、されど冷酷に告げる。だからこそだと。

「俺が役に立つ奴をあんな扱いにする訳ないでしょ？ だつてあの子、あーでもしない限り言う事は聞かないし、悪巧み以外の成績が良いとも思えないしねえ。まあ、情報収集くらいの役に立てば良いかな」

「えー。じゃあ優秀な子に頼めばいいじゃん。例えば僕とかさあ」「生憎と自分で自分を立候補しちゃうような奴に任せられないよ。だつて君、不都合な事があつたら殺しちゃいそうじゃない」

「ひどーい！ 僕だつてちゃんと考えて行動するからそんな短気な事しないもん！ 先生の不利になる奴なら考えるけど」

「…ホントそう言う所なんだよねえ。君は」

呆れてそれ以上追求するのを止めたアーデンは、まだ納得していない様子の恵里に諭すように真の目的を告げる。

「俺は元々利用出来るものは何でも利用する主義なんだア…。まあ、皆大好き、愛ちゃんセンセー…だつけ？ 彼女と一丸となつてる生徒達を巻き込むと、後々容易ではないことぐらい想像がつくし、かと言つて初対面の奴らを利用するにしても、尾ひれに何がついてるか分からない。けど情報不足。手詰まりな訳なの。俺達は」

「うん。それはわかるよ？ センセーも愛子先生の事をそれなりに買つてたのは見ててわかるから。凄く不愉快だつたけど」

「あーはいはい。話を脱線させないさせない。後で話は聞くからさ。
…まあ一応、俺達も下手には動けないわけ。けれどさ…」

表沙汰になつたら間違いなく首を跳ねられる奴なら、ある程度は使えるんじゃない？」

「！ へへえ♪ センセーも中々エグい事考えるねー。益々惚れ惚れしちやうなあ」

勇者であれば間違いなく逆鱗に触れるであろう発言を、2人は名案のように話の台に乗せていく。それはもう、戸惑いの欠片も見せずに。

アーデンはまるで、それが当然だと言わんばかりの開き直つた顔つきでたんたんと話を進めていく。

「でもさー、一応ヤバいことしてるやつだとは言つても、周りは擁護しそうな位置の奴じやない？ 少しセンセーにしては思い切りが早すぎるんじやない？」

恵里は疑問であつたのだ。いつもは捻りに捻つて結論を出すアーデンが、何故こんなにもはやすぎる段階で決断したのか。相手は幾ら腐りに腐つたやつだと言えど、立場的に下手に手を出せば良くない方向へ走り出す奴だ。迂闊には動けないと踏みどどまるはずなのだ。

なのに、何故。

「あー…やつぱそうなる？」

「うんうん。まあ、そんな先生も好きなんだけど♪」

「まあ、あれだよ。『スルーされた!?』だつてあの子、どつちみち後戻り出来ないじやない？ 確かに今はまだ身を隠せるけど、ノクト達が帰ってきた時、それを保つてられるかな？」

「あれ、もしかして信頼してる？」

「信頼？ 僕が？ まさか。ただ俺はアイツらの事をよく知つてるから、そう思つてるだけさ」

吐き捨てるようにそう呟いた彼の眼は、光を宿しているような、無

理やり闇を纏つてゐるような、複雑な色をしていた。そのただならぬ色に恵里は少したじろいだものの、全てを理解したかのような微笑みを浮かべてそれを肯定する。

あくまで、何処までも惚れ込んだようだ。

「へえー。なーんだ。僕こそが早とちりしてただけかあ。先生はやつぱりきちんと考へてるんだねえ。感心感心♪」

「どうせ腑抜けた事を言つても評価が上がる癖によく言う口だね。君は」

「あ、やっぱり分かつてスルーしてたね…。まあいいや。僕を楽しませてくれたことで無かつたことにしてあげる。…でも先生。それだけの理由じゃないよね？」

「あ、やっぱりバレる？」

「そりやそりや。だつて先生。アイツを見る時の顔、あの偽善者よりも怖いからね？」

「…まあ、そうだろうねえ。だつて…」

俺、アイツみたいな奴が一番大つ嫌いだからさあ。」

ここまでで最高級にドスの効いた笑み。それに対しての恵里の顔は、いつもにも増して惚れ惚れとしていた。

時は戻り、奈落の奥底にて。

二羽の力を借りたノクティスとイグニスは、今までの行動速度が嘘みたいになるほどの速さで先を急ぐ事が出来ていた。何せ、チョコボは速いだけでなく、怪しい所を瞬時に見抜いて背中の彼らを導いて行くのだ。謎の声の主はとてもいい働きをしたものだ。

それに戦闘面でも、

「邪魔だアアアアアアアアアアアア!!」

「クエエエエエエエエ!!」

『グアガアアアアアアアオア!?』

「ノクトオ…！ 面倒なのは分かるがチョコボで蹴散らすのはどうな
んだ…？! そしてチョコボものるな…!!」

今まででは邪魔をされたくないがために殲滅する必要があつた怪物達も、チョコボが強烈なタツクルや蹴りを繰り出しながら押しのけていくのだ。普通であれば引かれるような行為だが、チョコボも乗り気なため、下手に口を出すことは危うい。

「クエ！」

「何？ お前もやりたいのか…！ 待て、不用意に突っ走
るアアアアアアアアアアアアアア…!!」

「はははは…!! イグニスのやつ、合わねー悲鳴上げてるわ！ なんか
新鮮だわ！」

「クエ！クエエエエ!!」

駆け抜けながらどのようにしてイグニスの光景を見たのやら。余
程気に入つたのか、駆け抜け終わつてからもその事を必要以上に引き
合いに出すノクティスは、後々不貞腐れたイグニスの機嫌取りをしな
がら下へ下へと進んで行つた。

そうして振り回されるように進み続け、チョコボが反応を示したの
が、余りにも大きすぎる雑草を備えた草原のような地帯だった。

その巨体の草を前に、虫がダメであるノクティスは間から沸くこと
を恐れて躊躇つたが、仕返しの如くイグニスがノクティスのチョコボ
に促し、ジエットコースター時の様な悲鳴の伸びが響き渡つた。

と、その悲鳴に混じるようにな。

シヤアアシヤアアアと何か蝶のような声が
まるでノクティアの声
に復唱するかのように辺りに聞こえてくる。

しかし、それらしき姿はノクテイス達の元へは現れない。寧ろ、遠ざかっていると言つても過言ではないのではないか。段々と、吸い込まれるように、その声も小さく、か細くなつていく。

「…なあ、これつて…」

「ああ。チヨコボ達も反応している。これは、先客のピンチ：だろうな」

冷静に聞こえ、遠ざかる声を分析する二人。その2人の決断を先取るよう¹に、チヨコボが地を蹴り飛翔する。

目的は、求めてた再会へ。

と、行かせないのがこの迷宮の性癖なのかな。

「何でこうなんだああああああああああああああああ！」??

追う側は、追われる側へと激変する。ノクティス達が求めてるものへ辿り着くはずの手がかりは、自らを滅ぼさんとする凶器へと変貌してしまつたのだ。

チヨコボの足音がかき消されるような乱暴な地を蹴るリズムが、ドドドと音を立ててノクテイス達を四方八方から追い込む。

えたのだ。音の正体に追いつく頃には、正体の目的は既に消失してお
り、新たに現れた自分達こそを新たな獲物として認識した。
故にこの有様なのだ。

「チツ…消してやる…！ 力を貸せ、夜叉王!!」

面倒に感じたノクティスは、対複数に有効な複製剣を率いる夜叉王の刀剣をその手に召喚し、剣の嵐を群がる化け物共に差し上げる。

嵐によつて起こつた血しぶきはやがて踊りを踊るように別々の無事な個体を巻き込み、雪崩のように軍隊が崩れていく。しかし、それでも意地のあるやつはおり、それらを踏み越えて口を開け、ノクティス達を捕食しようとかかる。

「多すぎだろ…!? どんだけいやがるんだコイツら…!!」

「相手は後にしろノクト！ チョコボが気配の居所を掴んだ！ あの切れ目へ向かう事に専念しろ！」

軍師は素早く目標を指さす。その先には、カパツと口を開けた縦割れの洞窟だ。この生い茂つた木々を抜けた先にだらしなさげに待ちわびるその中に、微かながら生きる者の力を感じた黄色き鳥の仲間は、導くその足を、羽を駆使して全速力を出し切つた。

裂け目へと近づいた彼等はその身体をそのまま裂け目へと入れようと走り続ける。しかし、近づきよく見た裂け目は、謎の凹凸のようなもので塞がれていた。チョコボは咄嗟に突撃を停止し、困ったように鳴き声を上げる。

「クエエエ…」

「これは…ハジメの鍊成か!?」

「ふむ。どうやら、此処の切れ目から彼らも下へと進んだのか。そして、魔物の追手から逃れる為にこれを作つたか」

「でもこれじゃ俺らも入れねえな…力づくで壊すか？」

「しかし、中の南雲達も巻き込まれるのでは…?」

「…ぐつ…」

あと一步の所で思わず足止めを食らつてしまつた二人は、必死に打開策を頭に浮かばせていく。しかし、考えることさえも邪魔するような煩わしい足音がズンズンと近付く。

すると、

「クエエエエエエエエエ!!」

「クエエツツ!!」

「！　おい！」

「何を…!?」

2人の苦悩を察知したかのように、二羽の勇士たちが自らを見るとばかりの挑発をし、ノクティス達から魔物を釘付けにして遠ざかって行く。

どういう訳か、ノクティス達には一切の興味を失つたように魔物達はチョコボを血眼になつて追いかけていく。

そのチョコボ達の口には、魔物を誘うような魅惑の料理が加えられていることにイグニスは気付いた。

「…どうやら、時間を稼いでくれるみたいだ。：全く、勝手に余り物を取りつたからにはお仕置をしなくては」

「…！」

「ノクト。確かに俺が出した不安だ。だが、あの子達が作ってくれたチャンスだ。逃す訳には行かない」

「…必ず戻つて来いよ…。…ハアア!!!」

青いオーラに一瞬包まれたノクトは、糸を切るように力を解放し、ありつたけの剣戟を突き、鍊成物を壊す。そして、周りの魔物の様子を確認すると、中へと足を進めて出した。

中へと侵入すると、一つの存在向き合うようにしていった2つの存在の図が目にはつきりと映る。その中のひとつも、ノクティス達の記憶に当てはまる人物は一見見当たらない。しかし、銃をおもむろに2つの存在へと向け、何かを呟く男に対して、なんの躊躇もなく声を上げ、応戦の合図を広げる。

「ハジメ!!!

「…っ！」

呼びかけた声に過剰に身体を跳ねさせ、思考が停止した男に変わり、ノクティスは一刀両断するように闘王の刀を、二つのうちの一つの植物状の女神モンスターへと無慈悲に振るう。

断末魔を苦しげに発しながら消えていくモンスターを他所に、どこか呆けている男を心配するように金髪の女性とノクティス、そしてイ

グニスが近寄つていく。

「…随分と姿が変わつたな。ハジメ。でも、ちゃんも見つけられて良かったわ」

「…誰？ ハジメの…知り合い？」

「いや、お前こそ…違え違え。いきなりで悪いな。俺はノクティス。コイツの先輩だ」

「俺はイグニス。南雲の…俺の場合これは伝わるのか？」

「普通に先生つて言えば伝わんじやねえの？」

「…！ ノクティス…イグニス…つて…」

彼らの正体に僅かに思い当たる節があるのか、金髪の女性は目を見開いて白髪の男：ハジメを心配そうに見つめる。

当人は感情のわからないように顔を下へと向け、ワナワナと身体を震わせている。その瞳には、果たして何を宿しているのか。

「直ぐに合流出来なくて…悪かった。ハジメ。けど、これからは隣で戦える。：一緒に帰ろうぜ？」

「…俺も、教師の身でありながらお前に手を差し伸べて、引き上げることすら出来なかつた。それを償えるなら、共に背中を預けさせて欲しい」

震える以外に行動を示さないハジメに対し、二人は優しく、そして落ち着けるように語りかけながら手を差し伸べる。その行動に、ハジメがとつた行動は…

銃音が辺りに響き渡つた。湧き出る赤の音がやけに生々しく、また驚きを隠す事が出来なかつた。

「…ハジメ？」

ノクティスは突如としてのハジメの行動に目を丸くする事しか出来なく、やつとの思いで口にした言葉は、銃音の残りで乗せられて行つてしまつた。

「……」

「…？ な、ぐも…？」

「今更…何しにきやがつた…」

「つ！」

「共に戦う？ …肝心な時に居なかつた癖に、何を馬鹿な事を…」

「…ハジメ、話を」

「聞く必要なんて無いだろ。

聞いて何になるんだ…？」

もういいから…

俺の前から、消えてくれ…」

アーデンの、それ以上の荒んだ眼を、乱暴にノクティス達から背け、慌てたように後を追う金髪の女性と共に、荒れ果てた様子のハジメは先の闇へと姿を消した。

「…ハジメ…」

背後より香る、血の匂いだけが、その場を收めるように広がりきつた。

怒りと始動

不穏を残して遠ざかる背を見送る事しか出来ないまま、2人はその場に佇んでいた。

焦りを含みつつ必死に背を追う少女の事も、それすらも気にかける事のなく進むハジメも、止めることなど出来ないままだつた。

期待していた再会がこの様な複雑なものになってしまったのだ。それで思考が追いつく事の方が中々に難しい。

鼻を刺激する鉛の匂いも、辺りに響き渡つた後の銃声も、

それが碎いた音さえも。今の彼らには何も届くものにはならなかつたのだ。

「…ノクト…大丈夫か？」

銃声の反響が完全に消失した頃、同じく思考処理が追いついてきたイグニスが、未だに微動だにせずに固まる友に声をかける。

声をかけた先の彼は、それに少しの動きも見せず、感情の分からないままで相槌をうつた。生氣のない、からくり人形のようにゆつくりと、滑りの悪い動きで首を振るその姿からはとても大丈夫、の言葉が当てはまる様子には見る事が出来なかつた。

「…ノクト？」

まだ思考が追いつかないのだろうか。それとも、心の傷が広がつてしまつたのだろうか。その答えを探すように彼の顔を覗こうとした。

しかし、背後から近づく地を蹴り飛ばすリズミカルな音が、それを許す事をしなかつた。直ぐにその正体に勘づいたものの、警戒心がイグニスの視線と得物を後ろへと向かわせてしまつたからだ。

ふとした警戒心とは裏腹に、そこには2羽の可愛らしくりりとしたお目目の鳥達が到着つとばかりに羽を広げていた。

「…ああ、無事に帰つてきたようだな。流石に疲れただろう。ここで少し羽を伸ばしてから行くか？」

眼鏡をかけ直しながら、仕切り直しの機会を作るとばかりに切り出したアイデアに2羽は大袈裟に羽根をばたつかせる。まだまだ行けと言いたいようだ。

「元気がいいのは良い事だが…生憎と今は身体と共に精神を休めなければならぬ時なんだ…特にノクトの」

「イグニス。そいつらの意思を尊重してやれ」

イグニスが休息の理由にもしていた男は、言葉をさえぎりそう提案する。未だイグニスからは顔が見えない。ただ、暗いかどうかすらも予想が出来ない立ち姿をしていた。

「しかしノクト…勝手にお前の気持ちを想像するのも失礼な話だが、先程のは大分困惑したのではないか？　まさか南雲があそこまで変わっているとは思わないからな…」

「まあ驚いたつていやあ驚いたけどな。んでも、それ以前に余計ほつとけなくなつたしな。イグニスだつて、俺の気持ちを組んでくれてるからの提案であつて、それがわかつて無いわけじやねえだろ？」

「…まあな。

俺達が取りこぼした魔物にあの弾丸が命中したのは偶然とは思えない…だが、もし本当に孤独の時間が長かつたせいで南雲の考え方には変化が起きてたとするのなら…」

「そん時はそん時だろ？」

「つ」

振り返ったノクティスの瞳を見て、イグニスはそれ以上の提案を切り上げた。

この迷宮に来てから、イグニスは何度も息を呑む事があつた。

それは今のように、ノクティスの些細な変化によるものである。

ルシス時代のノクティスは、良くも悪くも抱え込む性格であつた。

その為に、他人からどう捉えればいいか分からぬ罵倒があつた際、衝突し、それすらも悩みに抱えてしまう様な。彼からすれば放つておけない事だつたのだ。

しかし、ここに来てからは出来事の前やその先を見据えているかのような振る舞いを見せている。

「ハジメにあつち行けと言われて、まんまと引き下がる程俺はやさしくねえし、なにより他人に拒絶されるのが怖くて王様が務まるかつて

の…まあ、もうそもそも王様でもなんでもねえんだけどな」

そう、笑いながら既に言葉に出さずとも自信を感じさせるその様に、イグニスはここに来てから何度も目が分からぬ決意を抱いた。

そして2人と2匹は再び潜り出す。

全ては、南雲ハジメの本心を聞くために。

銃声が鳴り響く。打ち砕かれていくモンスター達の数は下に進むにつれ、増大していく。男の負の感情を表すように。

「ハジメ…良かつたの…？」

ぶつきらぼうに足を進める男に、黄金色の少女が小さく呟く。
足取りは未だ弱まらず。それは苛立ちを表しているかのように。何かをもみ消すかのように。強まっていく。少女の疑問を聞かなかつた事にする為かのように。

「…ハジメ…？」

「…ああ。良かつたんだ。あれで良かつたに決まってる。そうであるはずに決まってる…!!」

先程の行いを正当化せざるを得ないように頭を搔きむしる男：ハジメを、

助けられた少女：ユエはただ、募り行く不安を抱え見てる他無かつた。

それもそのはず。ハジメは、永遠に続くと思われた封印を、自分を解き放ってくれた、温もりを感じた一人の男。

それが今、彼から感じるのは、なにかに囚われているような、何かを見失つているような喪失感。彼が過去について話した時に感じたその不安は、先程の二人の男との再開によつてリミッターが外れるか

のようになってしまつたのだ。

「…ほんとうに？」

「だからそりゃだつて言つてるだろ…！　アイツらに助けられる道理なん
てこれっぽっちも…」

「でもハジメ…苦しそう…」

111

「……他の人の事を話す時……ハジメはそんなに気持ちを乱してなかつたけど、あのノクテイス……つて人達の時だけ……ハジメは取り乱してる」

地面を抉る音が消えた。されども、不安は止まらない。止まろうとしない。振り向いたその瞳に光が灯つていなかつたからなのか、ハジメの異変の真相が掴めないからなのか。

「もういいだろ…!! その話はもう」

しかしそれ以上、何も進展等は起らなかつた。いや、全てをかつ
さられてしまつたのかもしれない。

「クエ工工工工工工工工工工工工!!」

「ちよつ
待
て！
ブ
レ
ー
キ！
ぶ
れ
ー

「……えつ……？」

て、いくだけではどどまらずに不安の種を逆くの字に曲げつつ壁に吸い込まれていく光景が映し出されてしまった。

余りにも訳の分からぬ、そして間抜けすぎる絵面を目の当たりにして、ユ工はどこかほつとしたような、また別の何かが沸きあがる予感がした。

(…どうしてだろ…少し気持ちが安らいだのに…物凄く安心出来ない
…)

「…カツコつけといてこのザマか…まだまだ俺がついていないと駄目だな…俺達の大将は…つつはあ…」

白い目を向ける仲間の上に跨った男がついたとてつもなく巨大な溜息に、ユエは同情すると共に、何となく湧き上がった新たな不安の正体が分かつてしまつたのだつた。

「いきなり事故起こすとかやつぱ殺しにきてんのか!? あ、あ、!?」

「クエエエエ…クエ! クエエエ!!」

「いででで分かつてるつつの! 僕が悪かつたからてか今から謝るから! マジで悪かつたハジメあだだだだだだ!!! ごめんなさい! ごめんなさいって言えつてことだろ分かつたからつつくなああ!!」

なんとか壁と一緒に一体化していた二人と一羽を生物に戻すと、ユエと話していた時よりも狂つたように叫び散らしながら非難するハジメと、すっかり縮こまつている主犯2人という、母と子供達のような図が出来上がつていた。母の方はゴリゴリの極道が入つてゐるようである。ドスが入りすぎて喉がイカれかけていた。

「ていうか異世界で衝突事故とか意味が分からねえよ!! どんな速度で走つてきたんだその鳥は!!」

「悪いって…追いつかねえと思つてスピード上げた途端に見つかるもんだから…」

「いやそこじゃねえ!! どんなバケモンみてえな脚力してんだつてつてんだよ!!!」

「クエエ!??」

「お前は黙つてろおややこしくなるだろうが!!!」

「…ほつといていいの…?」

「割り込んでも頭痛に悩まされるだけだ…」

「…ん…そんな気がしてきた…」

遠くから見守る…ことを放棄したユエとイグニスは事情抜きに説教を続けるハジメが静まるまで、心ここに在らずを実現することにしたのだつた。

時は遡る。

グラディオラスの奮闘により、休暇を与えられた生徒達は、抜け殻のようになつていた。

原因はただ1つ。オルクス大迷宮での1件である。

死ぬかもしない恐怖。何もかもが通用しない現実。落ちた仲間達。

そして、次は自分達が…と考えてしまう絶望。

それら全てが、体を動かす気力さえも奪つて いるのだ。一部を除いては。

ステータスプレート公開時の演説者である園部優花を含める、戦争反対派と勇者パーティ、グラディオラスとプロンプト、そして、教師である畠山愛子である。

戦争派閥と愛ちゃん派閥という大まかに分けて説明をすると、先ず、勇者率いる戦争に参加する者達は以前と変わらず、訓練に力を注いでいる。

力をつけ、一刻も早く世界を救うべく奮闘している。

というのはあくまで勇者個人が掲げている目標であり、深く掘り下げるに、この派閥は再起不能メンバーよりも問題を抱えていると言つても過言ではない。

何故か。連携、思想、行動理由。全てが見事にバラバラすぎるのだ。先程も説明した通り、世界を救うという目標を掲げ、というかそれしか目に入っていないのは勇者だけであり、そのほかのメンバーは生きるためやら、目的すら謎の者すらいる状況。

更には、性格やらを差し置いて、未だに心にとてつもなく恐怖を抱えている者すらいる。

復帰したのは早いが、崩れるのも時間の問題と言えるだろう。

次に、愛ちゃん派閥。

作物系において無類の強さを発揮する天職持ちの愛子は、農地開拓の為に戦場とは全く無関係の場所に移されていた。

それを上手く利用し、現時点で戦争、戦闘事態に反対意識を持つ生徒達は

愛子に付き添う事にした。表を戦争に参加する事とするならば、裏で情報やら別の方法を探り、元の世界に帰る方法を探す決断をした。此方は全員の目標が一致している他、ハジメ達の奈落行きを知らされても尚、すぐに行動を再開させた愛子を筆頭としている。約束の効果は偉大なのだろうか。

団結力やリーダーの頼りやすさ的には、後者が安定している。しかし、圧倒的に愛ちゃん派閥は人数が少ない。

その為、満足のいく成果は未だに出ておらず、どちらも苦しい状況下に置かれていた。

では、残る2人は何をしているのか。

「…皆。確かに俺達はある迷宮でとてもない挫折を味わった。だけ

れど、何時までもこうしている訳には行かない。その間にも、世界の平和がどんどん失われていくんだ。だから、武器を取るんだ」

「あのさあ…何度言えばわかるんだよ君は。こんな状態で武器を取らせて死ぬだけだってば！ 教会だけじゃなくて、君まで強制させてどうするんだよ！」

「でも、このまま何もしないのがいい訳じやないでしよう。俺達は戦うことを決めた。だからこそ、何時までも恐怖に怯えたままじやダメなんだ」

「恐怖っていうのは鼓舞するだけで取れるようなそんな甘いもんじやないんだけど!? ああもう、どうしてこう話を聞かない奴らばっかりなんだよ！」

プロンプトは、怯えたままの生徒達をあらゆる脅威から守つていた。

当然ながら、この怯えた生徒達の事を鬪わせたい教会側はそのままにしようとはしなかった。匂わせる形で何度も復帰を促してきたのだ。

最初は愛子の猛抗議のおかげもあり、暫くは息を潜めていたものの、愛子達が本格的に別行動を取り始めたあたりから、また圧力を強め始めて來ていたのだ。

それだけだつたらまだいいのだが、流石は一度、全員に戦うことの希望を抱かせたトップと言うべきか。

勇者の中で、クラスの中でのあの挫折は既に過去のこととなつていたのだ。つまり、なにかきつかけさえあれば復帰出来るはずだと。決めつけもここまで来れば素晴らしい。

正直、プロンプト自身もその場気分で戦争へと覚悟を示していた生徒達に対して、良い感情を持つている訳では無い。寧ろ、その挫折は予想出来たのに対処出来なかつたことだとすら感じている。（にしたつて、コイツらの強制あまりにも酷すぎる…もう、どうしたらしいのさ！）

板挟みをモロに受けている彼は、悲鳴すらあげられない状況だった。

どうするべきかと…頭を回そうとした時である。

「お前ら…何様だよ」

もう1人の教師が、動き始めた。